
ナンバーズ～魔法が使えない男リベンジ！～

赤夜叉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナンバーズ〜魔法が使えない男リベンジ！〜

【Nコード】

N9645S

【作者名】

赤夜叉

【あらすじ】

主人公の死と言う最期で幕を閉じた『ナンバーズ〜魔法が使えない男〜』が物語を一新させ、色々パワーアップして帰ってきた！今回の敵はガルマやゼツと言ったオリキャラではなく、『リリカルなのは設定』と言う強大な“運命”！ 自堕落男・塚本隼樹が、ナンバーズの未来を変える為に奮闘する！

プロローグ（前書き）

どうも、作者の赤夜叉です。

主人公の『死』と言うショッキングな終わり方をした『ナンバーズ』魔法が使えない男』ですが、「隼樹は死なせるべきじゃなかった」「隼樹が生き残って欲しかった」と言う読者の声がちらほらあり、この度、物語を一新させて『塚本隼樹』を復活させました。

今作の塚本隼樹は、前作よりもダメさに拍車がかかってます。ダメ人間万歳！

今回は、主人公視点を中心に進行していきます。

では、『ナンバーズ』魔法が使えない男リベンジ！』が始まります！

あつ、タイトルの『リベンジ』は『？』的なワードです。

ブローグ

ペダルを漕いで、自転車を走らせてるところだ。

季節は夏で、今日も日差しが強くて蒸し暑い。家を出る前に水を飲んできたが、十分も経ってないのにもう喉が乾いてる。汗も止めどなく流れてきて、物凄く鬱陶しい。自分の体から出てる物なのに、自分じゃ調整出来ないのが性質^{タチ}悪いよ。あつ、今、目に入りそうになった。八月が終わって九月に突入したってのに、ウザイ暑さは全然引いてくれない。

信号が赤に変わったから、自転車を止めた。その間にポケットからハンカチを取り出して、眼鏡を外して汗を拭く。周りを見ると、同じように汗を拭いてる中年サラリーマンの姿が、ちらほらと居る。ダリー、と思った。こんなクソ暑い中、俺は上下黒のスーツを着て、第一ボタンとネクタイを締めている。今すぐにでも脱ぎ捨てたいが、就活中なのでそうもいかない。これから企業の面接があるけど、この暑さのせいでやる気が大幅に削がれる。

いや、例え暑くなくてもやる気は無い。マジ、ダリーなんだって。就活なんてやってる暇があったら、クーラーの冷気が効いた部屋でゲームやったり、漫画読んでいたいな。ダラダラ、グズグズ、部屋に引きこもっていたいってのが俺の本音だ。でも俺がそうしたくても、親が許してくれないんだから仕方ない。

信号が青に変わって、俺は自転車を走らせた。

こんな無気力全開じゃあ、面接落ちるのは目に見えてるよな。もう適当に流すように面接受けて、終わらせて、とっとと帰ってゲームやろう。

そんな事を考えながら、俺はいつも使ってる駐輪場に自転車を停めた。ダルさ満開の重い足取りで、最寄り駅に向かって歩く。

マジ、ダリー。

俺の名前は、塚本隼樹。つかもとじゅんき 就活中の大学四年で、年は二十二歳だ。

自分で言うのもなんだが、俺は何の面白味も特徴も無い平凡な学生だ。他の人より漫画やアニメを多く観て、『オタク』と言う泥沼に足を突っ込んだじゃいるが、ソレ以外に何も無い。

まあ、敢えて特徴を一つ挙げるとすれば、俺は酷く『マイナス思考』の持ち主であると言う事だけだ。マイナス思考主体の俺だから、今日の面接も落ちる気満々だ。好きで落ちようとしてる訳じゃないんだが、マイナスなイメージが拭えないんだよ。加えて、めんどくさがる性格だから、マジでダルい。

ダルいと思いつつも黒鞆を片手に歩く俺は、道の途中で、ガツと音を立てて何か踏んづけた。俺は立ち止まって、足をどけて踏んだ物を見た。踏んづけた物は、一個の丸い玉だった。真っ赤なビー玉のようにも見える。

俺は屈んで、何気なく赤い玉を拾った。

「なんだビー玉かよ……。どうせなら、金でも落ちてればよかったのに……」

太陽の光に玉を当てながら、俺は落胆の溜め息をついた。

その時、異変が起こった。手に持っている玉が、突然赤く光り出したのだ。

「え……？」

不可解な現象に、俺は目を丸くした。太陽の光で反射してるとかじゃなくて、“玉自体”が輝いてるんだ。

動揺する俺の手の中で、玉は赤い光を強めていく。周りを行きかう人達も、こつちを見てざわめいてる。

光を間近で受ける俺は、耐えられずに瞼を閉じた。遮った視界は、瞼越しでも赤くなって、次第に俺の意識が薄れていった。

プロローグ（後書き）

感想お待ちしています。

N o . 1 隼樹リターンズ（前書き）

隼樹「『ナンバーズ』魔法が使えない男リベンジ！』 始まります。
あの、俺、面接間に合いますか？」

No.1 隼樹リターンズ

暗闇の中で、俺は薄らと意識を取り戻した。

周りが暗いのは、瞼を閉じてるからだ。小さな唸り声を漏らしながら、俺は顔を横に動かした。すると布に触れたような感触がして、鼻では何かの匂いを嗅ぎ取った。甘くてイイ匂いで、何だか落ち着いてしまう。

次第に意識がハッキリしてきて、手にも何か触れてる感覚を憶えた。触れてるのは右手で、位置は顔の真横だ。そう言えば、顔全体も柔らかい物で挟まれてる感じた。目を開けながら、手を動かして触れてる物が何なのか確かめる。

俺が目にしたのは、一つの膨らみを掴んでる自分の右手だ。んで、俺の右手が掴んでる膨らみは、柔らかくて気持ちイイ。こんな気持ちのイイ物は、今まで触った事も無い。だが、何故だが同じような物を見た事がある気がする。

何気なく顔を上げると、人の顔があった。顔を赤くさせて、眉根を寄せて細めた目で俺を睨んでいた。

目が合った俺は、半ば茫然とした顔で固まった。俺を睨んでるのは、女だ。怖い顔で睨んできてるが、かなりの美人だ。濃い紫色の長い髪で、多分ウェーブがかかっている。瞳は綺麗な金色で、髪の色同様に日本人離れしている。相手が女となれば、俺の右手が掴んでる物の正体も判明した。

俺の右手が掴んでるのは、相手の女性の胸だった。折り重なるように密着した状態になってて、顔は胸の谷間に埋まっていた。

事態を把握した俺は、自分の置かれた状況に慌てて体を起こした。

「いや、これは、その……！ すず、すいませ……ぶっ！？」

謝罪の言葉を言い終える前に、俺の左頬に痛みと衝撃が走った。

俺が体をどけた事で自由の身となった相手の女が、頬にビンタを食らわせてきたのだ。バチンツと部屋にイイ音が鳴ったと同時に、俺はバランスを崩して後ろに体を反らす。左頬に強烈なビンタを受けたと思ったら、直後に床に倒れて頭と背中を打ち付け、新たなダメージを受けた。受け身も取れなかったから、かなり痛い。

「ぐああああ……！」

頭と背中を押さえて、俺は痛み悶える。

「な、何者ですか、貴方はっ！？」

俺を張り倒した女が声を上げて聞いてくるが、正直それどころではない。

アンタのビンタのせいで、俺は三重の痛みを受けたんだぞ！ 左頬、後頭部、背中の中三ヶ所を痛めるなんて初めてだよ……！ ああ、もう嫌だ。いつそ死にたい。なんで目覚めて早々、こんな目に遭わなきゃいけないんだ？ 俺が胸を触ったからだよ、チクショー！ でもワザとじゃないもん！

「い……いえ、その……。お……いえ、私は塚本隼樹、です」

ジンジン痛む後頭部を擦りながら体を起こして、俺は名乗った。

「塚本、隼樹……ですか……？」

「はい……そうです……」

女は警戒した様子で、俺をジッと睨んでいる。
ベッドの上で、掛け布団で体を隠していた。

世の中第一印象が大事って言うのに、最悪の展開だよ。自業自得

かもしれないけど、俺だって故意に胸を触った訳じゃない。

「では、次の質問です。貴方は、どうやってココに侵入したのですか？」

「えつと……それが、自分でもよく分からなくて……。ああっ、そうだ！ 道で赤いビー玉みたいなのを拾ったら、突然光り出して、気が付いたらココに居たんです……！」

嘘偽り無く正直に話したが、果たして信じてくれるかどうか。玉拾って瞬間移動なんて馬鹿な話、俺だったら信じないね。

そう考えると、目の前の女にも信じてもらえないだろうな。嘘だと一蹴されて、警察と呼ばれ、強姦か痴漢の容疑で逮捕されて、俺はブタ箱にぶちこまれるんだ。ああ、鬱だ。

「赤い玉と言うのは、コレの事ですか？」

「へ？」

伏せていた顔を上げて、思わず間抜けな声を出してしまう。

ベッドの上の女は、片手に赤い玉を持っていた。間違いなく、ココに来る前に拾った赤い玉だ。

「そう！ ソレです！」

女が持つ赤い玉を指差して、俺は必死に訴えた。この機を逃せば、俺は弁解出来ないような気がした。

俺の訴えを聞いた女は、手に持つ赤い玉を黙って凝視する。

数秒の間、玉を凝視していた女の空いてる手が動いた。顔の前くらの位置で手を止めて、モニターと操作盤みたいな物を出した。

って、待て待てエエエ！ えっ？ 今この女、何したの！？ 何も無い空間に、薄い半透明のモニターと操作盤みたいな出したよ

！？ あの、SF映画でたまに見かける、ああいうヤツだよ！

内心で動揺混乱してる俺の前で、女は出したモニターらしき板を黙々と操作している。さっきまで赤かった顔色は戻り、真剣な目つきでモニターと向き合っていた。

未だ落ち着かない俺だが、凜とした顔の女を見て思った。

——綺麗だな……。

半ば見惚れてる俺の前で、女は作業を止めてモニターと操作盤を消した。

俺に向き直って、凜々しい顔で言った。

「お話があります。私と一緒に来て下さい」

「は、はい……」

当然断る事など出来ず、俺は頷いた。まあ、断る理由も無いしな。女の後が続いて部屋を出ながら、俺は心の底で思った。
あの時味わった胸の感触は、絶対に忘れないと——。

*

アホな誓いをした俺は、自分の置かれてる状況に不安を募らせていた。

いや、だってさ、俺の周りを七人の女に囲まれてるんだぞ。しかも、何故か全員が青と薄紫を基調とした全身タイツを着ている。

捕われの身のような状況で、俺は思った。

——ゲ・シヨ・カーの戦闘員じゃね？

しょうがねーじゃん！　だって、マジにそう見えるんだもん！
本家ゲ・シヨ・カーの戦闘員の格好と比べると地味な方だけど、近い感じなんだぜ。

それで一番の問題が、目のやり場に困るって点だ。全身タイツは隙間無く密着してて、体のラインがハッキリと浮き出てる。マジ、ヤバいってこの格好は。やらしい目で見たら殺されそうだから、今は床をガン見して回避している。冷たい床に正座して、ジツと床の一点だけを見つめるのだ。コレ以外に、危機を回避する方法は無い。それに相手は無言のプレッシャーを与えてくるので、顔を上げられる状況に無かった。

ちくしょう。何だよ、何なんだよ？ 俺が一体何をした？ 何か悪い事でもしたか？ 何で、こんな訳の分からない状況になっただよ？ ああ、もう無理無理。超帰りたい。でも俺、事故とは言え女の胸触っちゃったから、やっぱり警察に通報されるのか？ そうなったら、俺の人生完璧に終わりじゃん！ 痴漢で「僕はやってない！」と無実の人間が無実を主張しても、9割強は逮捕されて冤罪になるんだぞ。結局、被害者の女が有利なんだよ。ちくしょう！ そんなのって無いぜ！ 俺達『男』が一体何をした！？ ああ、憂鬱だ……。どうすれば俺は、この苦しみから解放されるんだ？

苦悩する俺の脳裏に、ある圧倒的な閃きが過った。

「そうだ、死のう」

「は？」

「いやいや、早まっちゃダメっスよ」

俺の圧倒的ナイスアイデアを聞いて、連中の何人かが反応した。その中には、俺を気遣うような声も混じってた。ちよっと嬉しかった。

「やあ、待たせたね」

部屋の自動ドアが開いて、二人の男女が入ってきた。一人は、俺と事故った女だ。俺を囲んでる女達と違って、紫と白を基調とした

制服を着ている。割と普通の格好な事に、俺は人知れず安堵した。

もう一人の男は、一緒の女よりも更に濃い紫色の髪を肩の位置まで伸ばし、端正な顔立ちで目の色は女と同じで、白衣を着ている。見た感じだと、科学者のように見えなくも無い。まあ、男の格好と部屋の中を見れば、科学者決定かな。部屋の中には、パソコンやら怪しげな機械やらが並んでいて、少々薄暗い感じでちょっと不気味だ。さしずめ、悪の秘密基地ってところだろ。だって、男の顔が悪人の笑みっぽいんだもんよ。

二人が歩んでくると、タイト姿の女達が道を開けた。どうやら、ココではあの二人が偉いようだ。

「ようこそ、私の研究所へ！ 私の名は、ジェイル・スカリエッティ。隣に居るのは、私の研究の手伝いをしてもらっている秘書のウーノだ」

「は、初めまして。塚本隼樹です」

相手はもう知ってるとは思うが、一応こっちも名乗り返した。

さっき俺と事故った女がウーノで、男はスカリエッティか。日本人じゃないとは思っていたが、やっぱり外国に來ちまったのか？

思考を働かせる俺の前で、スカリエッティは例の赤い玉を片手に話し出した。

「キミが拾った、この赤い玉を調べさせてもらったよ。どうやら、これは時空移動型のロストロギアのようだ」

「時空移動型？ ロストロギア？」

聞き覚えの無い単語に、俺は首を傾げるしかなかった。時空移動なら、映画とかでたまに耳にするから何となく意味は解るが、ロスト何とかがって方に関してはサッパリだ。

「次元空間の中には、幾つもの世界が存在する。ロストログアとは、簡単に言えば他の世界よりも進化しすぎた世界の危険な技術の遺産種類にもよるが、中には次元空間を滅ぼす程の力を持った物もある」

スカリエッティの説明を聞いて、俺はポカンとなった。

正直、話のスケールが大き過ぎて追いつけない。次元空間を滅ぼせると言われても、具体的な規模が想像出来なくてシックリこない。漫画みたいな設定だな、と言うのが俺の限界だった。

「このロストログアとキミの所持品などを調べた結果、ズバリ、キミは『次元漂流者』と断定された！」

ビシツと俺を指差して、スカリエッティは結論を言った。

しかし、当の俺はやはり首を傾げるしかなかった。

次元漂流者って何よ？ 少なくとも、良くない方の言葉ってのは解る。

困惑してる俺に、親切にもスカリエッティは分かりやすく説明してくれた。次元漂流者ってのは、簡単大雑把に言えば世界規模の迷子だ。なんでも、存在する世界は一つじゃなくて、それこそ星の数ほどあるらしい。世界によって環境も文明レベルも様々で、俺がやってきたこの世界は『魔法』が存在するミッドチルダと言う。

おいおい、魔法って実在するのかよ？ フィクションの世界だけかと思ってたけど、実際に俺自身も不可思議な現象を体験したしなえ？ 夢の可能性？ なんもん、ウーノさんにぶっ叩かれた時点で無しと判断したわ。アレ、マジ痛かったんだから。ってか、今もまだちよいと痛いし。

まあ、いいさ。原因が解ったんだから、後は帰るだけだ。もう一度赤い玉を使えば、元の世界に帰れるハズだ。

「現状を理解したかい？ そんなキミに、非常に残念なお知らせが

ある」

「え……？」

スカリエッツィの言葉を聞いて、思わず俺は顔を引きつらせた。おいおい、止してよ。この状況で、『残念なお知らせ』と言ったら一つしかねーじゃねーか。止めて！　お願い！　聞きたくない！

「調べてみたら、このロストログアは魔力が空になっていた。試しに魔力を注入してみたが、全く反応を示さなかった。どうやら一回限りの使い捨てのようだ。つまり……」

「っ、つまり……」

先の言葉を予想していた俺は、苦笑いを浮かべた。

「キミは、元の世界には戻れない……！」

予想していた残酷な現実が、俺に突き付けられた。

「は……はは……」

ショックを受けた俺は、半ば放心状態になって虚しく笑った。

終わった。何もかも終わったよ。大好きなアニメを観る事が出来ず、友達と通信して友情プレイで盛り上がる事も、もう出来ないのだ。何より、家に帰れない事が、家族に会えない事が一番ショックだった。この世界には、俺の知っている人は一人も居ない。真正正銘の孤独状態。

無理だ。知らない世界で、知らない人に囲まれて、独りで生きていくなんて自堕落な俺には無理。絶対不可能。それに事故とは言え、俺は強姦をしてしまった。もう俺に明るいどころか、薄暗い未来すらない。ああ、憂鬱だ。

苦しみから抜け出したい俺は、画期的な解決法を見つけた。

「そうだ、死のう」

「いや、何でだ!？」

俺の画期的解決法に、女性陣全員が声を揃えた。

驚く女性陣とは対照的に、スカリエッティは面白そうに笑っていた。そりゃもう愉快そうに。

「ハッハッハッ! まあ、待ちたまえ。孤独になって自棄になる気持ちも解るが、まずは私の話を聞いてくれるかい？」

「はあ……」と力無く頷く俺。

「隼樹君、ココに住まないかい？」

「はい!？」

スカリエッティからの予想外な提案に、俺は目を見開いた。秘書のウーノさんや他の全身タイツ陣も、驚いた顔をしている。

俺の反応など意に介さず、スカリエッティは続ける。

「ココは極秘の研究施設でね、外部に存在が漏れるような事は避けたいのだよ。だから、キミにはココに住んでもらいたい。外出には制限がかかるが、衣食住の世話も約束しよう。どうかね？」

「いや、その……いいんですか？」

「私がそうしてくれ、と言っているのだ。キミが気にする事じゃないよ」

おいおい、見た目胡散臭そうで悪そうな男だけど、中身は良い人なんじゃね？

なんて思ったが、すぐにマイナス思考が発動した。いや待て。もしかしたら、コレは罠かもしれない。上手い事、俺

を研究所に引き止めて、人体実験をする魂胆かもしれないじゃないか！ 見た目通りのマッドサイエンティストだったら、俺の命は無いぞ！

そこまで考えた俺だったが、しかしと思う。

例え断ったところで、研究所の存在を外部に知られたくない連中が、俺を解放してくれるとは思えない。そう考えると、結局スカリエッティの提案を呑むしかないんだよな。

思考を終えて、俺は結論を出した。

「分かりました。それでは、お世話になります」

「なに、困った時はお互い様じゃないか」

頭を下げる俺に、スカリエッティは気の良い返事をしてくれた。それから俺は、今度はウーノさんに頭を下げた。

「あの、ウーノさん……！ さっきは、本当にすいませんでしたっ！」

「頭を上げてください。アレは故意ではなく、転移の際の事故だったのですから」

なんって心の広い女性なんだ、ウーノさんは！

聞いたか？ 警察に通報しないどころか、俺の事許してるっぽいぞ！？ 見た目だけじゃなくて、心まで綺麗だよ！ 本当の美人だね！ ヤベツ、惚れちゃう！

俺とウーノさんの事故が一件落着いたのを見計らって、スカリエッティが指示を出した。

「ふむ、問題が解決したところで……チンク。彼を部屋まで案内してくれたまえ」

「はい」

答えて一步前に出たのは、チンクと呼ばれた小柄な少女だ。明かりを受けて煌めく銀髪は腰の下まで伸びて、右目を黒の眼帯で隠した十代前半の美少女だ。目の色は、やっぱり金色だ。

感想——メチャクチャ可愛い。

「隼樹さん。お荷物をお返しします」

「あつ、どうも」

「では行くぞ。ついてこい」

「はい」

ウーノさんから鞆を受け取り、歩き出すチンクの後を追う。
扉の前で、スカリエッティや全身タイツ一同に一礼してから、俺は部屋を出た。

*

チンクの案内で、俺は通路を進んでいた。通路も薄暗くて、不気味な雰囲気が続いている。何故に怪しい組織は、決まって建物の中が薄暗いんだ？ 悪っ婆さでも演出してるのか？

「着いたぞ」

考えに集中してたら、俺が使う部屋の前に着いた。チンクが操作をして、スライド式のドアが開く。ベッドや机と言った必要最低限の物しか置かれてない、簡素な部屋だ。他には、洗面所が備え付けられてる。

「私の部屋はすぐ近くだから、何かあったら呼べ」

「はい。ありがとうございます」

俺より年下のハズなのに、妙に大人びてるから、ついつい敬語になつてしまう。背が小さくてシツカリした女の子って、可愛いよね？

「ああ、自己紹介がまだだったな。私はNo.5のチンクだ」

「No.5？」

数字が出てきた事に、俺は顔をしかめた。

「まあ、私達の詳しい説明は後で話そう。もうすぐ昼食だから、今は休んでおけ」

俺に微笑みを向けて、チンクは部屋を出ていった。

一人残された俺は、やる事も無いし疲れたので、ベッドの上に倒れ込んだ。

「ダリー」

俺は瞼を閉じて、寝る事にした。

No.2 異世界で鬱を呟く男（前書き）

ウーノ「『ナンバーズ』魔法が使えない男リベンジ！』始まります。ドクター、今作業に戻ります」

No.2 異世界で鬱を呟く男

目が覚めると、知らない天井が広がってた。

まだ半分寝てる状態で体を起こして、自分が居る場所を見回す。

簡素な室内を見た俺は、異世界にトリップした事を思い出した。

密かに夢オチの可能性を抱いてたんだが、どうやら現実のようだ。現実是非情である。

まあ、元の世界に戻れたとしても、面倒な就活が待ってるだけなんだけどな。そんな事を思いながら、俺がベッドから降り立った時だった。

「隼樹。起きているか？」

ノックの音と共に、少女らしき声が聞こえてきた。

この声は、チンクだな。

「はい」

返事をして、俺は入り口に歩いていった。ドアを開けると、小柄な少女——チンクがこっちを見上げる形で立っていた。

「昼食の用意が出来たぞ。食堂へ案内しよう」

「ありがとうございます」

やっぱり敬語になってしまう。シッカリし過ぎだろう、チンク。何だか未だに精神年齢がガキな自分が、物凄く恥ずかしいよ。ヤベツ、帰らせて……。あつ、帰れないんだった。

内心で一人呟きながら、俺はチンクと一緒に食堂を目指した。

＊

チンクの案内で食堂に着くと、ソコには他のメンバーが既に揃っていた。

悪の組織の拘りか、今も全身タイツだ。恥ずかしくないのかね、と言つか、見てるこっちの方が恥ずかしい気持ちなんですけど。と言つか、目のやり場に困るんですけど。

俺達が入室した途端、一同の視線が一斉にこっちに向いた。いや、怖エエよ！ マジ、ビビっちゃったよ！ 他人の注目を浴びるのって、物凄いプレッシャーなの知ってる？ 皆さんの視線を一身に受けて、もう体ガツチガツチに固まってるんだよ。

「それじゃあ、紹介するぞ」

俺の緊張を他所に、チンクはクールに姉妹紹介を始める。
チンクさああああん！ 今こそ助けて下さああああい！

「？？3のトーレと？4のクアットロだ」

俺の心中の救助願いは届かず、チンクが姉妹を紹介する。
紫色のショートヘアで、鋭い目をしてる女性が、トーレ。何かリダー的な感じがする。

栗色の髪を両脇で結び、眼鏡をかけてる女性が、クアットロ。あつ、俺と眼鏡キャラ被ってるじゃん！ まっ、いいか。

トーレは無愛想な顔をして、俺なんかに興味の欠片も無いって感じだ。クアットロの方は、何が楽しいのかニコニコ笑っている。

「？？6のセインに、？？9のノーヴェと？？10のディエチ。最後に？

「11のウェンディだ」

「よろしくな！」

「ウェンディっス！ よろしくっス！」

水色セミロングの女の子が、セイン。笑顔が眩しい、明るい女の子だ。

赤髪の女の子が、ノーヴェカ。気の強そうな女の子だ。あれ？

何か苛立ち気味じゃね？ 俺、何か悪いことした？

茶色のロングヘアを、黄色いリボンで後ろで縛っている女の子が、ディエチ。何かおとなしそうな感じだな。

濃いピンク色の髪を後ろでまとめている女の子が、ウェンディ。

この娘も可愛いなあ。セインと同じで、元気が良いよ。

っーか、その？って何よ？ まあ、いいや。

さて、相手側の挨拶が済んで次は俺の番か。ヤベーよ、超緊張してきたよ。感覚的には、企業の面接みたいだよ。ちくしょう、真面目に企業面接の練習しとけばよかったアア！ 大丈夫だ。落ち着け、俺。練習は不十分だが、本番の面接は、二回は経験してきたじゃねーか。

緊張を解すように、俺は深呼吸をした。

「っ、塚本隼樹です。よろしくお願いひ……」

ザ・ールド！ 時は止まる。

か、噛んじまったアアアアア！ 最後に俺の自己紹介で締めようとして、噛んだ。台詞噛んじやった。

俺が噛んだ瞬間、食堂は静まり返った。棒のように突っ立ってる俺は、固まって一同を凝視する。恥ずかしさで、顔の熱が上がってるのが分かる。おそらく俺の顔は、トマトのように赤くなってるだろう。

「ぷつ。あははははは！　じゅ、隼樹……お前、今噛んだのか？」

チンクが腹を抱えて笑う。

「あははははは！　よ、よっぽど緊張してたんだね！」

セインも大笑いしてる。

「ダメツスよ、セイン。そんなに笑ったら、隼樹が可哀相ツスよ！　くくく！」

「そう言うウエンディちゃんだって、うふふふふふ！」

ウエンディも手で口を塞ぎながらも笑い、クアットロも笑っている。

トーレは呆れ顔になり、ノーヴェは眉根を顰めて溜め息をついている。

ディエチは伏せた顔を手で覆って、必死に笑いを堪えている。

——ぐわアアアアア！　超恥ずかしいイイイイイ！　穴があったら入ってエエエ！　ココに来てからロクな目に遭ってねえよ！　ウーノさんには叩かれるわ、沢山の女の前で恥かくわ……もう最悪だよ。ああ、もう死んだ方がよくね？

「……すみません。死んでいいですか？」

「わ、悪かった。そう落ち込むな。くくく」

おおおおいっ！　チンク、まだ笑うか！？

もう駄目だ。こりゃあ、マジで死ぬしかねーや。食事終えたら、紙とペン貰って、部屋で遺書を書こう。

ネガティブ思考のまま、俺は席に着いた。この料理が、最後の食事になるんだな。

長テーブルの上に、皿とコップが一つずつ置かれてある。皿の上には、四角いクッキー的な物が三枚。皿の隣には、栄養ドリンク的な液体が入ったコップがあった。

目の前に並べられた料理と呼べない料理を見て、さっきまでの羞恥心が吹き飛んで、急速に冷静さを取り戻した。

――何すか、コレ？ え？ コレが飯？ このカロリーメイト的な物体が、昼飯なのか？ マジでか？ いやいや、冗談だよな？ コレは、前菜みたいなもんだよな？

「あの、チンクさん？」

「何だ？」

「コレって……え？ コレが食事ですか……？」

「ああ。コレだけで、必要なカロリーと栄養を摂取出来る」

俺に答えた後、チンクはモシャモシャとカロリーメイト的な物を咀嚼する。

――え、栄養食品で済ませてやがるウウウウウ！

驚愕の事実を目の当たりにして、俺は内心にシャウトした。

いやいや、いくら何でもソレはないわ。米出せ、肉出せ、ジャパニーズ&アメリカンフード出せエエエエ！

心中で叫ぶが、連中に届く訳も無く食事は続く。住まわせてもらってる身だし、小心者の俺が連中に意見なんて出来ないから、受け入れるしか無いんだよな。

諦めた俺が、コップに手を伸ばして中身を口に含んだ時だった。

「あら〜？ 『隼ちゃん』は食べないのかしらあ？」

「ぶーっ！？」

盛大に吹いた。

ば、爆撃来たアアアア！ 完全に気を緩めてた隙に、奇襲を受け

たアアア！ 恥ずかしい呼び方をされた俺は、呼び主に顔を向けた。

「えっと……クアットロさん、ですよ？ 何ですか、今の呼び方！？」

「あら、隼樹って呼ぶより、こっちの方が可愛いでしょ？ 隼ちゃん」

「いえ、あの……結構恥ずかしいんで、やめて下さい！ お願いですから、その呼び方はやめて下さい！」

この時、俺は自分の行為が逆効果である事に気付いてなかった。俺の必死な様子を見て、クアットロは素晴らしい笑顔で言った。

「じゅ、ん、ちゃん」

「嫌アアアア！」

俺は現実から目を背けるように、頭を抱えて顔を伏せた。恥ずかし過ぎて、もう一生、顔上げられないよ。

「それよりも隼ちゃん。貴方の前の人が、大変な事になってるわよ？」

「はい……？」

クアットロの言葉で顔を上げた俺は、一度頬を引くつかせ、固まった。

俺の前の席には、頭を濡らした赤髪の女——ノーヴェが居た。液体を滴らせる前髪に隠れて、表情はうかがえないが、小刻みに震えている体から怒りが伝わってくる。

次の瞬間、ノーヴェは額に青筋を立てて、怒りが爆発した。

「てんめエエエ！ 何しやがる！」

「すいません！ すいません！ 本当にすいません！」

痛みも気にせず、俺はテーブルに額を何度も打ち付けて謝った。
とにかく必死に謝らなければ、今味わってる以上の苦痛を受ける事になる。

「ノーヴェ、落ち着け！ 隼樹も悪気があってやった訳ではないし、こうして謝っているんだ。許してやれ」

「クアットロ、お前もからかうのはそれ位にしておけ」

チンクが怒れるノーヴェを宥め、トーレがクアットロを一言注意した。

——もう嫌だ……！ まるで一年分の不幸が、一気に降りかかったみてーだ……。ああ、憂鬱だ。俺はどうすればいいんだよ……？
こんなの、もう耐えられねーよ……。

頭を下げた状態で悩む俺は、一つの案を思い付いた。

「そうだ、死のう」

「いや、だから早まるな！」

チンクにツッコまれました。

*

騒がしく最悪な食事を終えた俺は、即行で部屋に引きこもった。
もう俺は、絶対に一歩たりとも部屋の外に出ねーぞ。完全に引きこもってやる。嫌な目に遭うくらいなら、一生箱入り男子になった方がマシだ。食堂の一件で、俺の精神ライフポイントはゼロなんだ

よ。

何で異世界に飛ばされた上に、こんな酷い仕打ちを受けなきゃいけないんだよ。俺、そんなに悪い事したか？

俺は神なんか信じちゃいないが、もし在るとしたら、とんでもなく性質の悪い奴に違いない。人を異世界に飛ばして孤独にさせた上に、辱しめて、心に傷を負わせるなんて底意地が悪いに決まってる。憂鬱な気分で、俺は枕に顔を埋めた。

*

「あつははははは！ 早速、娘達と打ち解けたようじゃないか！」

研究室で笑い声を上げるのは、スカリエッティ。

彼の目の前にある一枚のモニターには、先ほどの食堂の光景が映っていた。自己紹介で自爆し、クアットロに弄られ、ノーヴェの怒りに触れて、実に騒々しい出来事だった。

ソレを見て、スカリエッティは愉快そうに笑っていた。

傍らで一緒に見ているウーノは、少し同情の念を抱いていた。

「あの、ドクター」

「ん？ 何だねウーノ？」

「何故ドクターは、彼を受け入れたのですか？ 彼の出身世界は、あの機動六課の隊長陣と同じく地球だと判明しています。彼を地球に送り帰しても、問題は無いのでは？」

本人の前では「帰れない」なんて言ったが、隼樹の出身世界は判明している。帰そうと思えば、実は簡単に帰せるのだ。それに地球に帰してしまえば、スカリエッティ達の情報が管理局に漏れる事も

無い。

ウーノの疑問に、スカリエッティは笑みを浮かべて答えた。

「ククク……！ そんなの決まってるじゃないか、ウーノ。面白そうだからだよ！ 計画発動が迫った時に現れた次元漂流者……このタイミングで現れたのは、偶然か？ それとも必然か？ 彼が、この先のストーリーにどう関わるのか楽しみだよ！ それに！」

「彼の、あのネガティブ思考は実に面白い！ 見ていて飽きないじゃないか！ はははははははは！」

隼樹の事を語りながら笑うスカリエッティを見て、ウーノは意外そうな顔をする。

魔導師や特別な存在にしか興味を示さなかったスカリエッティが、凡人の隼樹に興味を抱くのは大変珍しい事なのだ。

隼樹のネガティブ思考が凄い事は、ウーノも同感だった。

——あのネガティブ思考、どうにか治せないかしら？ 将来が心配だわ。

笑い続けるスカリエッティの傍らで、ウーノは母性を働かせていた。

N o . 2 異世界で鬱を眩く男（後書き）

感想お待ちします。

No.3 俺に理由を下さい(前書き)

トーレ「『ナンバーズ〜魔法が使えない男リベンジ〜』始まるぞ。
さて、覚悟はいいか隼樹？」

No.3 俺に理由を下さい

食堂の一件で恥をかき、傷付いた俺は部屋に引きこもっていた。しかし、そこへチンクがやってきて、クアットロの悪戯の謝罪をしてきた。本人の代わりに謝りに来るなんて、ホントにチンクは出来た娘だよ。あの性悪眼鏡女や俺なんかとは、大違いだ。

チンクに迷惑と心配をかける訳にもいらないから、俺は大丈夫と言葉を返した。するとチンクは、「気晴らしに自分達の訓練を見学しないか？」と誘ってきた。

はて？ 訓練って、一体何の訓練だ？ 悪の組織的な彼女達の訓練と言ったら、戦闘訓練か？

少しばかり興味が沸いてきたので、俺はチンクの誘いに応じた。一生箱入り男子と誓ってから一時間も経たない内に、俺は部屋を出た。だって、チンクの誘いじゃあ、断る訳にはいかないでしょ。

訓練所への道すがら、チンクは自分達の事を教えてくれた。

チンク達は、『ナンバーズ』と称される集団の『戦闘機人』である。戦闘機人ってのは、簡単に言えばサイボーグだ。自己紹介の時にも言っていた『No.』ってのは、造り出された順番を示していて、数字の通りの姉妹関係なんだと。ちなみに、ウーノがNo.1だそうだ。うん、納得。んで、No.2は任務とやらで別の場所に居るらしい。どんな人なのか気になるが、居ないんじゃない。

戦闘機人は、人体に機械を組み込んで身体能力を向上させ、更に『IS』とか言う特殊能力まで使えるらしい。IS能力は、個人によって様々のようだ。

ふと魔法世界にサイボーグっておかしくね？ と言う疑問が浮かんだが、口に出さない事にした。いや、気にしたら負けかな、思っさ。

「いやー、ホント漫画みたいだな」

一通りの説明を聞いて、俺は感想を口にした。チンクの話の聞いたら、まるで漫画の世界に飛び込んだような気持ちになった。

「漫画？ 漫画とは何だ？」

「え？ 漫画知らないんですか？」

「ああ」

こりゃ驚いた。

小さな女の子が、まさか漫画を知らないとはな。いや、こんな怪しい研究所に引きこもってたら、漫画を知らなくて当然かもな。と言つか、そもそもミッドチルダに漫画は存在するのか？

まあ、その辺は今度外に出る機会が出来た時にでも、確認するか。

「漫画って言うのは、絵と文字が一緒になってる本です」

「ほお、そんな物があるのか」

俺の説明を受けて、チンクは小さく頷いた。

確か鞆の中に、時間を潰す為に入れておいた漫画が一冊か二冊あった気がするから、後で貸してあげようかな。

そんな事を考えて歩いてた俺は、何気なく顔を隣のチンクに向けた。すると、チンクもこっちを見ていた。金色の隻眼で、ジッと俺を見つめている。

「え？ あの、何か……？」

「いや、何でもない」

俺が尋ねると、チンクは前に向き直った。

今の無言の視線は、何だったんだ？ よう解らん。

頭の片隅に疑問を置いて、俺はチンクと一緒に通路を進んだ。

*

訓練所に着くと、既に他のメンバーが揃っていた。

食堂に入った時と似た状況だったから、軽くデジャヴを感じた。

しかし、中の光景を見て俺は驚いて目を見開いた。ウェンディがサーフィンボードみたいな重装備の先端を構えて、何やら狙いを定めてる感じた。すると重装備の先端に濃いピンク色の塊が出てきて、弾丸のように発射された。放たれたエネルギー弾は、相手のノーヴェに向かって真っ直ぐに飛んでいく。対するノーヴェは、驚く事に素手で複数のエネルギー弾を弾きやがった。右手には何やら籠手のような物をハメて、両足にはローラーブーツを履いている。しかも、自動で動いてるみたいだ。そんでディエチも近くに見えるが、この娘も無茶苦茶だ。身の丈以上のバカデカイ大砲を軽々と言った感じで構えて、狙いを定めてエネルギーを溜めている。次の瞬間、砲口から轟音と共にオレンジ色のエネルギー砲が放たれた。標的は勿論、ノーヴェだ。当たったらひとたまりも無いだろう砲撃を、しかしノーヴェは自動ローラーブーツで軽やかに避ける。

この三人だけでも凄いのに、更に驚かせてくれたのがトーレだ。ノーヴェ達三人対トーレー一人の実戦訓練なのだが、コレがマジで凄いなって。まずはウェンディが射撃で牽制するんだが、トーレは難なく避けて距離を詰めていく。全然、牽制になってない。次いでディエチが砲撃を放つも、コレもかわされる。ノーヴェが突っ込んで接近戦が始まるが、トーレの圧倒的スピードに翻弄されてあえなく倒された。続いてウェンディとディエチも、一瞬で負けた。トーレ圧倒的強さだよ。ぶっちゃけ、動きがよく見えなかった。

バトルアニメそのもののような常識離れした訓練風景に、俺は度肝を抜かれて茫然と突っ立っていた。

「ふむ。では、姉も参加するでしょう」

チンクが歩み出た。

訓練に臨むチンクを見て、俺はこれ以上無いってくらいに目を見開いた。

いやいやいや、チンクまであんなあつぶねー訓練するつもりか！
？ 死ぬって絶対！

そんな俺の心配を他所に、チンクはトーレと対峙した。ってより
によつて、三人を瞬殺したトーレかよ！？

驚く俺が見てる前で、二人の訓練が始まった。チンクは黒いナイフを両手に数本構え、忍者のクナイのように投擲した。トーレは素早く横に動いて、飛んでくるナイフを避けた。やっぱり動きは、トーレが一番速いみたいだ。だが、チンクの攻撃はナイフを投げて終わりでは無かった。

「IS・ランブルデトネイター！」

チンクが能力名らしき言葉を発した直後、かわされたナイフが爆発した。

お、おっかねー！ ナイフぶん投げるだけじゃ飽き足らず、投擲武器その物を爆発させたよ。今のがチンクの言った、ISってヤツなんだな。

投擲と爆破能力を駆使するチンクだったが、結果はトーレの勝ちだった。さっきの三人よりは奮闘した感じだけど、やっぱ素早いトーレを捉えるのは難しいみたいだ。俺だったら、絶対に無理だけだね。

正直、スゲーとしか言い様がない。

「こんなの毎日やってるんですか？」

「まあな」

何て事無い風に、チンクは答えた。

訓練を中断して、休憩に入っている。よっぽどきつかったのか、ウェンディやノーヴェは息が上がっていた。クアットロは何やらメンバーの訓練を眺めて、操作盤を操作していた。多分、訓練のデータを記録してたんだらう。セインは単純に、俺と同じでメンバーの訓練を見学してた。

「なあ、どうだった？」

「え？」

セインが近づいてきて、突然聞かれた。

「どうって……？」

「あたし等……って言っても、今回はあたしは参加してないけど、訓練見た感想は？」

ああ、そういう事か。

セイン達にとって、俺は初めての一般見学者だ。他人の意見が気になるのも、なんとなく分かる。

ややあって、俺は感想を言った。

「スゲーって思った。その、見た事も無いスゲー武器使ったり、メチャクチャな動きで闘ってるの見て、スゲーって思った」

あんな真似、凡人の俺には到底出来ない。いや、例え天才でも人間じゃ不可能な事だ。

人間を超えた存在の戦闘機人だからこそ、出来る芸当だ。

「それだけか？」

不意に、別の方から聞かれた。

顔を向けると、ソコにはチンクが居た。気のせいか、どこか腑に落ちないって感じの顔をしてるな。今さっきの俺の感想に、何か不満でもあるのか？

「訓練を見せる前に話したが、私達は闘う為に生み出された戦闘機人だ。さっきの訓練で見たように、人間を超えた力を有している。そんな私達を見て、感想は凄いの一言だけか？ お前は、私達が怖くないのか？」

ああ、そういう事か。

チンクは、普通の人間の俺が、普通じゃない自分達を恐れていない事を気にしてたんだ。ココに来る途中で、チンクが無言で俺を見ていたのは、俺がチンク達の正体を知っても怖がった様子を見せなかったからか。

気がつく、チンクだけじゃなくて他のメンバーも俺を見ていた。他のメンバーも、少なからず俺の意見が気になってるようだ。まあ、連中の中では恐れられる対象なんてイメージなんだろうが、生憎と俺の意見は違う。悪が、連中が思ってるような感想は無い。

だから俺は、言ってやった。

「全然怖くない、と言ったら嘘になるかな。でも、怖いより、凄いや羨ましいって気持ちの方が強いです」

「羨ましい？」怪訝そうに眉根を寄せるチンク。

「うん。ISって特殊能力とか、サイボーグだったり、色んな武器使って闘ってる皆を見てスゲーカッコイイって思った。

それに、羨ましかった。皆にはさ、生きる目的って言うか、その……存在理由ってヤツがあるんですよ。闘う為に生み出されたって

のも、立派な存在理由だと思って、凄い力があって、ホント羨ましいと思いました。……正直、羨ましくて軽く落ち込みもしましたけどね」

「どうしてっスか？」

最後の方で暗くなった俺に、今度はウェンディが聞いてきた。

「皆と違って、俺には存在理由が無いんですよ……。元の世界じゃあ、勉強は出来ないし、得意なモノも無いし、就職活動も上手くいかない……。何事にもやる気を出せない、ダメ人間……。毎日ダラダラ生きてて、たまに思うんだ……。『俺、何の為に生きてるのか？俺は生きてる意味はあるのか？』ってさ……。別に俺が居なくなっただって、困る人なんて誰も居ないんだから……」

そう。俺なんか居なくなっただって、何も困りはしないんだ。

無気力で非生産的な人間に、生きる意味なんてある訳ないんだ。ソレに比べたら、ナンバーズは良い方だ。存在する理由があって、目的の為に全力で取り組んで、何だか生き生きしてる。生きてるって実感が、伝わってくる。そういう充実してる感じが、羨ましいんだ。

正直、生きてる意味が解らない。だからと言って、自殺する度胸は俺には無いから、死ぬ事も出来ない。難儀な事だ。

ふと俺は、周りの皆が黙り込んでる事に気付いた。

ヤベツ。俺がくだらねー心情なんか話しちまったから、場が暗くなっちゃった。

皆に謝ろうと俺が、口を開こうとした時だった。

頬を叩かれた。パアツと乾いた音が、ドーム状の広い訓練所に鳴り響いた。

他人に叩かれたのは、コレが人生で二度目だ。一度目はウーノに叩かれたが、二度目は別人だ。今、俺を叩いたのは意外にも、トー

レだった。

「くだらん」

「え……？」

叩かれた俺は、半ば啞然と頬を押さえてトーレを見る。

トーレは、鋭い目を向けて俺に言った。

「存在理由が無い？ 自分が居なくなっても、誰も困らんだと？
くだらん……もし本当にそう思ってるなら、ウジウジせずにさっさと死んでしまえ……！」

「なっ！？ トーレ、言い過ぎだぞ！」

暴言とも取れるトーレの言葉に、チンクが声を荒げた。

チンクの言葉に鼻を鳴らし、トーレは嫌悪感を露にした顔を俺に向ける。

「言い過ぎではない。コイツは性根が完全に腐り切った、ダメ人間だ！ コイツのような甘ったれでウジウジした奴が、私は大嫌いだ！ 見ているだけで不快になる」

侮蔑のこもった目で言われ、俺は思わず顔を伏せた。

トーレの厳しい言葉が、俺の胸にグサグサと突き刺さる。胸が締め付けられるように苦しくて、泣きたくなった。悔しいけど、トーレが言ってる事は正しい。悪いのは不甲斐無い俺自身だ。けど、グータラな性格だから、俺は変わる努力をしようもしないんだ。そうだ。トーレの言う通り、いっそ死んでしまおう。そうだ、死のう。

俺が死のうと心の中で決めた時だった。

「だから、私が貴様を鍛えてやる！」

「はあ!?」

「えええええっ!?」

トーレの発言に、俺だけじゃなくて他のメンバーも驚いてる。
い、いきなり何を言うんだ、この女は!?

「本来ならば、貴様の事などどうでもいいのだが、それでは私の気が収まりそうにないんでな。今日から私の訓練相手を務め、その腐り切った性根を叩き直してやる! 死にたくなければ、死に物狂いで食らいついてこい!」

「いや、待てトーレ! 隼樹は我々のような戦闘機人でも無ければ、魔導師でも無いただの人間だぞ!」

「その辺は考えて手加減はする」

「だが……!」

「いいんじゃないの? 何だか面白そうですし〜!」

「クアットロ!?」

一人現状を楽しんだ様子のクアットロに、チンクは睨みを向けた。
な、何だか大変な事になってきたぞ。コレって、ほぼ間違いない。
俺のせいだよな。

「隼樹。嫌なら嫌って、ハッキリ言った方がいいっすよ? トーレ姉はああ言ってるっすけど、下手したら死んじゃうっすよ?」

俺を心配して、ウエンディが囁いてくれた。

下手したら死ぬ、か。俺も訓練の様子は見てたから、トーレと自分の力の差くらい分かってるよ。まさに天と地の差だ。正直やりたくない。めんどくさいし、痛いのは嫌いだからな。

でも、断る事に躊躇してる自分も居るんだよな。何でか解らない

けど、断ろうって決断が出来ない。

チンクとトーレは、まだ口論を続けてる。

悩んだ末、俺は意を決して答えを口にした。

「分かりました。その……やらせていただきます……！」

俺が参加を表明すると、二人の口論が止まった。

トーレはやれやれとかぶりを振り、チンクは納得してなさそうに渋面になる。

「本当にいいのか、隼樹？」

「まあ、はい……」

「そうか……分かった。だが決して無理はするなよ」

「はい。どうも」

世話役つてのもあるんだろうけど、俺の心配をしてくれるチンクの優しさに感謝する。

「よし、なら早速始めるぞ」

トーレはウエンディ達程疲れてないみたいで、すぐに俺との訓練をしようと動き出した。さっき見たトーレの尋常じゃない強さを思い返して、俺は唾をゴクリと飲み込んだ。ヤベーな、早くも後悔してきた。

緊張でガッチガッチになった動きで、俺はトーレと対峙した。動きが固い俺とは対照的に、トーレは腕を組んで余裕を露にしている。何か、歴戦の戦士って感じだな。こうして向かい合ってるだけでも、超怖い。

「とりあえず、お前は私の攻撃を避ける。ただひたすら回避と防御

に専念して、絶対に倒れるな。私が『終わり』と言うまで、立っているんだ！ いいな？」

「は、はい……！」

「すみません。ビビって早くも足が震えてるんですけど、やっぱりやめていいですか？ 帰っていいですか？ あっ、帰れないんだった。

「いくぞ！」

一瞬の出来事だった。

数メートルの距離があったハズなのに、トーレは一瞬で俺の眼前まで移動した。いきなり目の前に現れて驚く俺の顔に、トーレは拳をお見舞いしてきた。過去に部活の先輩と、遊びで殴り合いをした事があるが、その時以上の痛みが頬に走った。

「がっ……！」

顎が外れたんじゃないか、と思ったが無事についてた。本当に手加減はしてるようだが、今の一発で口の中が切れて血の味が広がる。

「まだまだこれからだ！ 気を抜くな！」

トーレの容赦の無い攻撃が続く。

痛っ！ いった！ 今度は腹に入れやがった！ マジで容赦ねえ！ しかも足も狙ってくるから、段々立ってるのが辛くなってきた！ 手加減されてるとは言え、素人凡人の俺にはキツ過ぎる。もう限界で、今すぐにでも投げ出したかった。でも、結局やめようとしなかった。キツいし、痛いし、苦しいし、逃げ出したいよ。でも、俺は心の中で弱音を吐いても、口には出さないで続けた。

「よし、終わりだ」

トーレの攻撃の手が止まった。

や……やっと終わったか……。

訓練が終わって、俺は安堵の溜め息をついた。俺は何とか生きて立ってるが、決して無事とは言えない状態になってた。顔中殴られて痛いし、鼻血も止まらない上に涙まで流して酷い有様だ。更に腹や足を何度も殴られ蹴られ、痛いなんてもんじゃない。

避けるのは絶対に無理だから、受けるしかなかったんだよ。は●めの●歩のように、ガードを固めて亀のように籠もる『亀作戦』だ。この選択が間違いだっただな。早々に諦めてダウンしちまえば、カツコ悪くても楽になれたのにさ。

あーあ……ダルイ上に、体中が痛^{いて}ーよ……。やっぱ、こんなやるんじゃ……なかった……。痛い目見て……損した、だけ……じゃん……。

痛みと疲れで頭がフラフラして、俺は前のめりに倒れそうになった。

けど、俺は倒れなかった。目の前に何かがあって、俺の体を支えてくれたんだ。温かくて、何だか心地いい。腫れあがった顔を、柔らかい物が包んでいる。

ぼやける意識で、俺は顔を上げた。ソコには、俺を支えて見下ろすトーレの顔があった。

「ふん。どうやら、完全に腐り切っていた訳ではないようだな」

鼻を鳴らして、鋭い目つきで見ている。

ただ、気のせいか、目の鋭さが若干緩んでる感じがする。

「まあ、とりあえず……よくやった、と言っておこう」

トーレの労いの言葉を聞いた瞬間、俺は気付いた。

ああ……そういう事ね。俺がトーレの相手を受けた理由は、認めて欲しかったんだ。すぐに倒れて楽になるうとしなかったのは、意地だったんだ。くだらん、死んでしまえ、と『俺と言う存在』を全否定された感じで、悔しいと思ったんだ。ソレで『俺と言う存在』を認めて欲しくて、意地になって立ち続けたんだ。

そんで今、トーレから労いの言葉を貰って、俺は凄く嬉しくなった。少しだけ、トーレに『俺と言う存在』を認められたような気がした。

スゲー痛い目に遭ったけど、トーレの相手をして良かったかもな。でも、出来れば今回限りにして欲しい。ソレが駄目なら、週二、三回にして欲しい。

正直、体もたねえ。

このミッドチルダには、時空管理局なる組織が存在する。

数多に存在する世界を管理してる超巨大組織で、警察と裁判所を合体させたようなもんだ。俺の世界の国家権力どころじゃない、もはや世界権力だ。

俺が何の為に、この世界に飛んできたのかは、まだ解らない。

解らないが、俺の意思とは関係無く物語は動き出す。

この世界に来たばかりの俺は、気付いてなかった。いや、知る由も無い。

ただの凡人の俺が、時空管理局なんて世界権力相手に無謀にも挑むなんて。

そして、その初戦は意外と早くやってきた。

場所は、ミッドチルダの市街地。

聖王の器を巡っての闘いだ。

相手は、機動六課。

N o . 3 俺に理由を下さい（後書き）

感想お待ちします。

No.4 苦手なモノは苦手だ（前書き）

ノーヴェ「ナンバーズ」魔法が使えない男リベンジー」始まるぞ。……何だよ、文句あるのか？」

No.4 苦手なモノは苦手だ

ミッドチルダにやってきて、七日目を迎えた。

ベッドから起き上がった俺は、椅子に座って机に突っ伏した。浮かかない顔で、盛大に溜め息をつく。

正直、もう限界だ。これ以上は耐えられそうに無い。

え？ トーレの訓練相手？ いやいや、違うよ。確かにトーレとの訓練は、週二って事で続けてるよ。これでも粘り強く交渉して、何とか週二にしてもらったんだ。あれ以来妙にトーレがやる気出して、日数を減らすのに苦労したもんだ。いや、別にトーレが嫌いってんじゃないくて、痛くて疲れる事が嫌いな。寧ろトーレは好きですよ？ あの気の強い性格がいいよね。

俺が耐えられないってのは、ココでの食事だ。朝から晩まで、キヤロリーメイトキヤロリーメイトキヤロリーメイトって、どんな生活だよ！？ 二日目で、もう味噌汁と白米が恋しくなったよ。それからキヤロリーメイトを見るたびに憂鬱な気分になって、テンション下がりはなしだ。ナンバーズは全く気にしてない様子だけど、俺はそうはいかない。舌に刺激が欲しい。このままだと、●魂の監察のように『あんパン地獄病』にかかっちゃう。俺の場合は、『キヤロリーメイト地獄病』だけだね。

いや、ホントにヤバいんだって。このままじゃ、精神だけじゃなくて味覚までおかしくなっちゃう。俺自身を救う為にも、人間らしいまともな食事がしたい。もうレトルトでも冷凍でも弁当でも何でもいいから、飯と呼べる食べ物が欲しい。

そんな訳で、俺はこれからスカリエッティの所に行って、買い物をする為の外出許可を貰いに行こうと思う。今日の俺は一味違うぞ。外出許可を貰うまでは、絶対に引き下がらないからな。

意気込む俺は部屋を出て、スカリエッティの研究室を目指した。

＊

「ああ、構わないよ」

——アッサリ許可が下りたアアアア！

反対覚悟で頼んだら、意外とアッサリ許可が下りたんで俺は内心でシャウトした。

外出には制限がかかるとか言ってたのに、軽い感じで許可してくれたよ。一週間過ごしたとは言え、まだまだ警戒するべきだろう。外部に情報が漏れてもいいのか？俺が外に出て、アンタ等の存在を公言しない根拠なんて無いんだぞ。そこら辺解ってるの？

訝る俺の前で、スカリエッティは続けた。

「ただし、私の娘同伴と言うのが条件だが、いいかね？」

「え？ あ、ああ……全然いいですよ」

なるほど、そういう事ですか。

外に出るのは構わないけど、一人で行くなつて事だ。ナンバーズの誰かを同伴させる事で、俺の行動を見張るって魂胆だろう。俺が妙な動きをしないか監視して、問題が起これば即アジトに逆戻りになり、人体実験の処分を受ける事になると思う。ヤベー、ただ買い物に行くだけなのに、妙に緊張してきた。

もしかして、コレって命懸けの買い物になるんじゃない？

「そうだね……確か、ノーヴェが空いていたね。彼女に同伴を頼むとしよう」

——ノ、ノノノ、ノーヴェだとオオオオオオ！？

恐ろしい名前を聞いて、俺は内心にシャウトした。よりもよつて、ノーヴェを同伴させるだと？ いやいやいや、ノーヴェは勘弁して下さい！ ウーノや他の娘はいいけど、ノーヴェだけは駄目なんです！

この一週間、俺はナンバーズとそれなりに親しくなれたつもりだ。世話役のチンクは勿論、性格が明るいセインやウエンディは向こうから話しかけてくれるし、トーレとは訓練を続けてるし、クアットロは相変わらず俺をからかってくるし、ディエチは殆ど無口であまり会話した事ないけど、最初の頃よりは多少マシになった。

だが、ノーヴェだけはダメなんだ。何が気に入らないのか、いつもカリカリしてる様子で親しくなれそうにねーんだよ。アイツ、絶対俺の事嫌ってるよ。別に何か悪い事した訳じゃないけど、明らかに嫌われてるよ。そういう点じゃ、ディエチよりも関わり難い。嫌いじゃないけど、超苦手なんだよ。

「それでは、ノーヴェを呼んできますので少々お待ち下さい」
「あ、は、はい……分かりました」

辛い現実を想像して、思わず苦笑いで答えちゃった。
ウーノが研究室を出て、ノーヴェを呼びに行った。
大丈夫なの？ そのコンビで本当に大丈夫なのか？ ダンジョンクリア出来るのか？ ゲームクリア出来るのか？
不安を胸に募らせ、俺はウーノが戻るのを待った。

*

そんな訳で、俺とノーヴェの異色コンビでミッドチルダの首都・クラナガンにやってきました。

流石、高度な文明が発達してるだけあって、街には高層ビルが何本も聳え立ってる。ただ、魔法世界である事を考えると、近未来都市に違和感を憶える。

しかし、そんな事よりも問題なのはノーヴェエの方だ。同伴してるノーヴェエは全身タイツじゃなくて、Ｔシャツにジーパンと言う男っぽいらフな格好をしている。

お前、普通の服持ってるじゃん！ 何でアジトでは、常時全身タイツなんだよ！？ 意味分かんねーよ！ アレか？ 着替えるのが面倒なのか？ 一日中パジャマで過ごす休日のお父さんか？

って、そうじゃねーよ！ 問題は服装じゃなくて、ノーヴェエの様子だ。

一つ言も喋らねーんだよ。

アジト出てから、全く会話してないからね。無言の状態が続いて超気まずい空気が出来上がってるから。空気が重くて、何か息苦しく感じるんだよ。ただ買い物しに来ただけなのに、何でこんな緊張しなきゃいけないんだ？ 周りは賑やかなのに、俺とノーヴェエの所だけ別空間だよ。

重い沈黙に耐えきれずに、俺は意を決してノーヴェエに話しかける事にした。

「あ、あの〜」

「んだよ？」

「いえ……何でもありません……」

いやアアア無理無理！ ちょっと声かけただけで睨まれたよ！ まだ何もしてないのに、もう疲れた。ノーヴェエと一緒に居るだけで、精神的に辛い。ノーヴェエのように常にイライラした奴は、下手に話しかけない方がいいんだよな。どこに地雷があるか分からないから、関わらないのが一番なんだ。ヤベーな……コレ以上機嫌悪くなったら最悪、手が出るぞ。殴られるぞ？ ああ、ヤベーよ、帰り

てーよ。

「そつだ、帰ろう」

「何でだよ？」

「すいません！」

背後から凄みの声でツッコまれて、俺は謝った。どうやら、手ぶらで帰るのは不可能のようだ。ノーヴェの一言で、完全に退路を断たれちまった。

ちくしょう。他のナンバーズとだったら、絶対こんな空気にならなかったのにな。買い物に行きたいなんて言うんじゃなかった。今日一日我慢して、明日にするべきだったんだ。失敗した。

ええい、今更後悔しても遅い。俺に出来る事は、とっとと買い物済ませてアジトに帰る事だ。余計な事は一切言わずに、質問だけするんだ。下手に親しもうとするから、失敗するんだ。そうと決まれば、買い物だけに集中するぞ。

しばらく歩いて、一つの建物に目が止まった。出入りしてるのは、主に主婦と思われる人達ばかりだ。主婦が多く集まる場所となると、大体の見当はつく。けど、念の為にノーヴェに確認するでしょう。怖いけど。

「あの、ノーヴェさん？」

「あ？」

「いや、その……あの建物、何ですか？」

「スーパードよ」

ぶっきらぼうに答えるノーヴェは、相変わらずしかめっ面だ。

「くだらねー事で聞くんじゃねーよ」

「す、すいません。その……ありがとうございます」

ヤベー、殺されるかと思ったぜ。ノーヴェ相手だと、質問するの
も命懸けだ。

こんな危険な買い物は、他には無いぞ。ああ、何で外に出てまで
こんな思いをしなきゃいけないんだよ？

帰るに帰れないので、ノーヴェに気付かれないよう諦めの溜め息
をついて、スーパーに入った。店内には、食材を求めてやってきた
主婦が沢山居る。俺も出入口付近に用意されてる買い物籠を一つ持
って、ノーヴェと一緒に主婦に混じって食材を見て回る。食材の調
達なんて親に任せつきりだったから、良し悪しを見分ける方法なん
て分からない。手にとって見て、適当に選ぶしかないな。食材の種
類が分からない時は、ノーヴェに聞いて確かめる。相変わらず無愛
想で、質問するたびに心臓がドキドキする。俺はミッドチルダ出身
じゃないから、文字も食材の種類も分からないんだから、しょうが
ないじゃん。

特に何を作ると決まってる訳じゃないけど、一通りの食材を揃え
た。ナンバーズの人数を考えて、最終的に買い物籠が二つになった。
ついでに、米袋をノーヴェに持ってもらった。一瞬殺されるかと身
構えたが、渋々ながら持ってくれた。

レジで会計を済ませ、スーパーの外に出た。両手にそれぞれ中身
がパンパンに詰まった袋が二つずつ——計四つの袋を持っている。
ノーヴェには、変わらず米袋を二つ持ってもらってる。

「重い……！」

袋の持つ部分が指に食い込んで、痛い。アジトに帰るまで、もつ
かどうか分からない。

「男のくせに情けねーな」

四つの袋に苦戦する俺を見て、ノーヴェが毒づいた。米袋だつて重いハズなのに、ノーヴェは軽々と肩に担いでる。

やっぱ戦闘機人つて、半端ねえ。

結局、ノーヴェとはロクに会話が出来なかった。何で俺がノーヴェに嫌われてるのか、考えてみたけど答えは見つからない。

ひよつとして、最初の日に俺が飲み物ぶっつけたのを、まだ根に持つてるのか？ もう一週間になるんだから、そろそろ許してくれ。会話も無いまま、俺とノーヴェは街中を歩いていく。このまま何事も無く、気まずい空気のままアジトに帰る事になると思つてた。しかし、この後、俺達は大変な事態に遭遇する。無言で歩いてる途中で、ノーヴェが足を止めた。

「ん？ どうしたんですか？」

振り返って尋ねるが、ノーヴェは答えない。不機嫌とは違う険しい顔で、どこか一点を見つめている。視線を追うと、ひとけ人気の無い路地裏だつた。

もう一度聞こうとしたら、突然走り出した。

「ちよつ……！ 待つてくださいよ！」

重い四つの袋を両手に、俺は路地裏に入ったノーヴェの後を追いかけた。

路地裏に入ると、ノーヴェが地面に屈んで何かを抱えていた。建物に太陽の光を遮られ、薄暗くて見えづらいが、人を抱えてるように見える。恐る恐る近付いてみると、ノーヴェに抱えられてるのは小さな女の子だつた。年は5、6歳くらいで、金色の長髪、着ている衣装はボロボロになつてゐる。細い腕には黒い鎖が巻かれていて、先には四角いケースが繋がっていた。

「何で……？」

目の前の光景に、俺は片眉を上げて怪訝な顔になる。

こんな薄暗いて人気の無い路地裏に、どうして女の子が居るのか？ 何でケースが繋がった鎖が、腕に巻かれているのか？ 俺の中で疑問が浮かんできた。

女の子は気を失ってるようで、目を閉じて静かに息をしている。

女の子とケースを交互に見て、ノーヴェが口を開いた。

「そういえば、今日は『マテリアル』と『レリック』が移送される日だったな」

「マ、マテリアル？ レリック？」

知らない単語が出てきて、俺は首を傾げた。

しかし、ノーヴェは俺の問いには答えず、女の子とケースを見て何やら考え込んでる。俺の事など完全に無視してるな、コイツ。どうやら俺は、『嫌い』じゃなくて『大嫌い』のようだ。

ややあつて、ノーヴェは俺に女の子を差し出してきた。

「持つてる」

「え？ ちよっ……待つ……！」

両手に袋を持った状態で、無理矢理女の子を持たされた。

俺に女の子を預けたノーヴェは、例のモニターを宙に出した。モニターには、アジトに居るウーノが映っていた。

『どうしたの、ノーヴェ？』

「ウーノ姉。路地裏で、気絶してるマテリアルとレリックを見つけ
た」

『何ですって？』

ノーヴェからの報告を聞いたウーノが、モニターの中で僅かに驚いて見せた。

「レリックケースは一つだけど、鎖の長さから見てもう一個あるみたいだ。マンホールから引き摺った跡があるから、多分地下で落としたんだ。これからレリックを探しに行く」

「分かったわ。こちら妹達とガジェットを向かわせるわ」

通信を終えて、ノーヴェはモニターを閉じた。

どうやら、ノーヴェはレリックって代物を探しに地下に行くみたいだな。ハッ、ご苦労なこった。

「オイ、行くぞ」

「え？」

「え？　じゃーよ！　お前も一緒に来るんだよ！」

「ええええええ！？」

冗談じゃない。今からやろうとしてるのって、絶対ヤバい事だろ？ そんな事に付き合つて、万が一にも時空管理局とか言う警察組織に見つかったら、人生おしまいじゃねーか！

断れ！
断るんだ、俺！

ここは勇気を振り絞って、全力で断るべきだ。

「いや、それは……」

「行くぞ！」

「はい……」

ダメでした。語気を強めて詰め寄ってくるノーヴェに抗う事など、臆病な俺には出来ませんでした。くう……泣いていいですか？

拒否権の無い俺は、大人しくノーヴェの指示に従った。買い物袋を路地裏に置いて、俺が女の子とケースを持たされた。俺は荷物係か？

少しズレてるマンホールの蓋を開けて、ノーヴェが先に下に降りる。続いて俺も、慎重に地下に降りた。

下水道は路地裏よりも暗く、薄気味悪い場所だった。

「あたしから離れんじゃねーぞ」
「は、はい」

ノーヴェを先頭に、俺は下水道を進み出した。

偶然か必然か？ 謎の女の子との遭遇で、隼樹は下水道に誘^{いざな}われる。

第一試練・聖王争奪戦！

№.5 NOと言える人になりたい（前書き）

ノーヴェ「ナンバーズ」魔法が使えない男リベンジー」始まるぞ。って何で、あたしがもう一回言っただよ？」

No.5 NOと言える人になりたい

嫌だな、と俺は溜め息をついた。

俺は今、ノーヴェと一緒に地下水路を進んでいる。背中に地上で拾った金髪の女の子を背負って、手にはレリックケースとやらを持って前を歩くノーヴェに続く。

正直、超帰りにえ。レリックってヤツが、どんな大事な物か知らないけど、俺カンケーねえじゃん。それにさ、この女の子と今あるケース持ち帰って、出直した方がリスクが少ないと思うんだよね。だって、俺を連れていく事がマイナスだもん。非戦闘員でビビりなんて、足手まとい以外の何者でもないよ。もう既に、地下水路の雰囲気にはビビってるからな。

路地裏以上に暗くて、殆ど暗闇だよ。人間は情報の殆どを視覚から得てるから、視界が悪いとスゲー不安になるんだよな。前を歩くノーヴェの背中が、ぼんやりと見えるから何とか進めてるけど、一人だったら絶対無理だね。

それに、不安の種は場所だけじゃねーんだよ。ぶっちゃけ俺達がやろうとしてるのって、少女誘拐と盗みだよな？ 結構重罪だぞ。こんな警察——この世界じゃ時空管理局だったな——に見つかったら確実に逮捕されるだろ。前科もんにはなりたくねーよ。俺は厄介事には関わらず、平穏平和に生きたいんだ。

でも『NO』と言えない小心者の俺は、嫌々ながらもノーヴェについていくしかなかった。こうなったら、時空管理局が来る前に、さっさと目的の物を見つけて、とっとと地下からおさらばするぜ。

しばらく歩いて、広い場所に出た。暗闇に慣れてきた目で、やってきた広場を見渡す。天井が高く、複数の石柱が並んで立っている。地下を流れる水が、この広場に集まっていた。もしケースを地下水に落としたなら、ココに流れ着いてる可能性があるな。

「二手に別れて探すぞ。見つけたら声上げて呼べよ」
「はい」

ノーヴェの機嫌を悪くしないように、すぐに答えて行動を開始した。

広い場所で、しかも暗い中で物を探すのは結構大変なんだぞ。内心で愚痴りながら、俺はレリックケースを探す。

それにしても、背中の女の子はホントに大人しいな。ずっと寝てるよ。まあ、五月蠅くなくていいんだけどね。女の子とケース持つて、重いけど。

あー、早く見つけて帰りたいな。やる気なく、ダラダラと広場を回ってた時だった。

「ん？」

浅い水の中に、黒い物体を見つけた。

まさかまさか、と思いながら俺は、近付いて持つてるケースと見比べた。ケースは同じだった。

ビンゴ。

「ノーヴェさん！ ありましたよ！」

「ホントか！？」

俺の呼び声を聞いて、ノーヴェが駆け付けてきた。

「コレですよね？」

「ああ、コイツだ。間違いねえ」

念の為、ノーヴェにも確認してもらった。違って怒られるのは嫌だからな。

意外と早く見つかって、俺は心底安堵した。

だが、災難が起こるのが人生なんだ。完全に安心しきってた俺達の前に、アイツ等が現れやがったのだ。

レリックケースを確保して、さあ帰ろうと踵を返した時だった。

「ソコの二人！ 止まりなさい！」

「えっ！？」

突然の鋭い声に、俺とノーヴェは同時に驚いた。

俺達の前に、なんと人が居るのだ。

紫色の長髪に青色の長いリボンを付けて、可愛さレベルの高い少女が立っていた。黒と紫のジャケットを羽織り、下には体にフィットした白のアンダースーツを着ていて、身体のラインが分かるエロい格好だ。左腕には籠手をハメて、両足にはローラーブーツを履いている。何だかノーヴェの武装に似てるのは、気のせいかな？

「私は、時空管理局・陸士108部隊所属、ギンガ・ナカジマ陸曹です！」

——じ、時空管理局キタアアアアアア！

衝撃の展開に、俺は内心にシャウトした。

ここで時空管理局と遭遇かよ！？ どんだけ運が悪いんだよ、俺は！ もうホント、今日は厄日だよ。苦手なノーヴェが同伴したり、厄介事に巻き込まれるわ、極めつけは時空管理局に見つかっちゃうわ。もう最悪！

それにしても、随分と若くて可愛い局員さんだな。ホントに局員なのか疑っちゃうけど、武装してるっぽいから本物なんだろうな。俺の世界じゃ、ただのコスプレとしか見られねーけど。

現れた局員は、凜とした顔つきで俺達を見据えていた。

「貴方達が持っている女の子とケースを、私に渡して下さい。そのケースの中身は、とても危険な物なんです！」

捜査官っぽい事を言っ、ケースを渡すよう迫ってくる。

危険って、どれぐらいなんだよ？ この場から解放されるんだったら、ケースでも何でもくれてやるよ。でも、ここで渡したら、ノーヴェや他のナンバーズに怒られるだろな。

俺が戸惑い、ノーヴェが警戒していると悪い展開に突入した。

「ギン姉！」

「ギンガさん！」

——え、援軍が来たアアアアア！

また俺は内心にシャウトした。

ギンガと名乗る局員と似たような青髪のボーイッシュ少女、オレンジ髪でツインテールな少女で、二人の年は十代半ばくらい。青髪の少女は武装までギンガと同じで、ツインテールの方は二丁拳銃なんて物騒なもん持ってやがる。さらに赤髪の男の子に、白い帽子にマントを羽織ったピンク髪の女の子が居る。赤髪のガキは大きな槍を持って、ピンク髪のガキは特に武器らしい物は無いように見えるけど、代わりに小さな竜を従えてる。竜使いか？

——ふっざけんじゃねーよ！ 時空管理局に見つかった時点でアウトなのに、更に数なんか増えたらチエックメイトだろ？ マジあり得ないよ！ ああ、もう終わった。俺の人生、完璧に終わったよ。この状況を切り抜けるなんて、100%不可能だね。捕まって、取り調べと言う拷問を受けて、裁判にかけられて、ブタ箱にぶちこまれるんだ。

絶望した俺が、ネガティブ思考を働かせた時だった。
急に後ろから、首に腕を回された。

「動くんじゃねえ！」
「なっ!？」

目の前の局員一同が、驚きの声を上げた。
声には出さないが、俺も驚いてる。
何故なら、後ろに居るノーヴェが俺の首を絞めてるのだ。空いて
手で俺の腕を掴んで、完全に人質を取った犯人になっている。

「一步でも動けば、コイツの首をへし折るぞ……!」
「くっ……!」

局員は悔しそうに歯を食いしばる。
どうやら、俺がノーヴェの仲間とは考えてはないようだ。一緒に
居るところを見たんだから、仲間だと疑われると思ったんだけどな
っか、結構苦しいんだけど……。ノーヴェの奴、半ば本気で首
絞めてんな?

しかしノーヴェ、お前のやり方は間違ってるぞ。
俺は局員一同に聞こえないように、出来るだけ抑えた声でノーヴ
エに囁いた。

「ノ……ノーヴェさん……」
「んだよ? 話しかけんじゃねーよ」
「すいません、すぐに終わります。ノーヴェさん、首は腕じゃくて、
後ろから手で掴んで下さい」
「あ?」

俺の意見に、ノーヴェは怪訝そうに目を細めた。
正直、怖いっす。

「腕を回して首を絞めると、その腕を狙われる危険があるんです。

相手の中に銃持つてる奴が居るから、狙い撃ちされますよ」

「……テメエ、素人じゃねーな？」

「いいえ、素人です」

俺の事が嫌いなノーヴェだが、意見を一蹴する事はしなかった。

首を絞めていた腕を素早く引つ込めて、後ろから手で首を強く掴んできた。だから本気でやるなって、痛いんだよ！ まあ、相手が俺を本気で人質と思ってるのは、ノーヴェが半ば本気で首を握るように掴んで、俺がマジで痛がってるからなんだろうけど。俺、演技下手だからな。ノーヴェは見事な悪役っぷりだよ。あつ、本物の悪人だったな。

人質作戦の効果で、ギンガ達局員は動けずにいた。その間にノーヴェは、俺を人質に局員一同から離れていく。

その時、俺達が入るうとしてた通路の入り口から、音が聞こえてきた。俺達を含めた全員が、通路入り口に目を向けた。風を切るような音は、大きくなって近づいてくる。

おいおい、また管理局の増援じゃねーだろうな？ これ以上数が増えて、囲まれたらマジで脱出不可能になるぞ。

俺の不安は、しかし杞憂に終わった。

地下広場にやってきたのは、奇妙な形をしたロボットの大軍だった。

「ガジェットだわ！」

ギンガが乱入してきたロボットの名前を叫んで、局員一同は臨戦態勢に入った。

ガジェットとは、スカリエッティが造った自律型のロボットだ。缶のような形をして真ん中に黄色いレンズがある？ 型、戦闘機の形をした？ 型等の複数の種類がある。俺が見た事あるのは？ 型までで、ソレ以降のシリーズは見えていない。だってカッコ悪いんだもんよ。

まあ、味方の援軍が来てくれたのはいいんだけどさ……。

「いや、数多すぎね!？」

やってきたガジエツトの数に、たまらず俺は声を上げた。

だって、ザツと見ても五十機位居るんだぜ？　どんだけ量産してんだよ！　しかも相手五人に対して、十倍の数で攻めるってどんだけ卑怯なんだよ！　流石悪者はやる事が違うっすね！

俺が多すぎるガジエツトの数ツツコむと、ノーヴェに強く引つ張られた。

「いでででっ……！　襟食い込む！　襟食い込む！」

俺が必死に痛みを訴えるが、ノーヴェは完全に無視して先を走る。このクソガキ！　テメーいつか痛み目に遭いやがれ、コノヤロー！　心中で毒づいて、俺はノーヴェの後を追いかける。荷物は全部俺が持つてるから、重くて仕方ねえよ。メチャクチャ疲れる。もう全部放り捨てたいが、そんな事したらノーヴェに殺されそうだから必死に耐える。

後ろの方から、時折爆発音が聞こえて、地下通路が揺れる。派手に暴れてるみたいだけど、やり過ぎるなよ？　ココが崩れたら、全員一卷の終わりだからな。

地下崩壊を危惧しながら、通路を進んでる時だった。

「止まれ！」

地下に響く鋭い声パート2で、俺達は足を止めた。

通路の先に立ち塞がるのは、二人の少女だ。一人は赤い帽子に赤いゴスロリの格好をした赤毛の少女で、手にはハンマーが握られている。もう一人は、一言で表すなら妖精だ。手のひらサイズの小さな

妖精。水色の長髪に黄色い『×』の髪止めをして、片手に青い本を持ってる。

また変なの出てきたよ！ 何なんだよ、さつきから！？ 局員つて言うより、コスプレ女子にしか見えないんですけど！？

「動くなよ、お前等！ 地下騒動の重要参考人として、機動六課まで来てもらっぞ！」

嫌だアアアア！ 絶対行きたくねエエエエ！

ハンマーを持って連行を迫ってくる少女は、俺の目には小さな脅迫者に見えた。口は悪いし、ハンマーなんて凶器持ってるし、どっちが犯罪者か分かんねーよ。

横目でノーヴェを見ると、眉根を寄せて険しい顔をしてる。

「大人しく、投降して下さい！」

妖精が投降するよう言うてくるが、絶対に嫌です。捕まったら人生終わりですから。

ああ、やっぱり来るんじゃないかった！ 例えぶん殴られる事になっても、断るべきだったんだ！ 俺の馬鹿っ！

情けない自分に毒づき、俺は泣きたくなった。

後ろの広場では五人の局員が交戦中で、前には二人の局員が立ち塞がって逃げ場が無い。

絶体絶命の状況になった時だった。

通路の堅い壁が、音をたてて突然壊れた。しかも、崩れた壁の中からデカイ影が現れて、二人の局員に突っ込んだ。

「うわああああ！」

「きゃああああ！」

影の突進を受けて、二人の局員は反対側の壁に激突した。

「何っ！？ 何っ！？」

俺はと言うと、突然の出来事にテンパってた。無茶苦茶な展開が続いて、正直訳が分からなかった。

「落ち着け、馬鹿っ！ ガジェット？ 型だ！」

俺の頭を叩いて、ノーヴェが言った。

壁を破って現れた影は、球体で大人以上の大きさだった。下部には蟹のような足が備え付けられ、上部の二ヶ所からアームが伸びてる。球体の中心には、他の型と同じく黄色いレンズが付いている。

「コイツに乗って離脱するぞ！ 早くしろ！」

「ちよっ……待っ……！ うおおおお！」

荷物を抱える俺の体は、ガジェット？ 型のアームに持ち上げられた。パニクる俺を、ガジェット？ 型は機体の天辺に乗せてくれた。

コイツ、機械だけど意外に良い奴かも。

ノーヴェも俺の隣に着いて、逃げる準備が整う。

「よしっ！ 地上に出るぞ！」

ノーヴェの声を合図に、俺達を乗せたガジェット？ 型が穴の中に戻っていった。

ああ、早く帰りたい。

NO.5 NOと言える人になりたい(後書き)

次回『天才 対 非才』

隼樹「何で急に次回予告やってんだ？　しかも何？　このサブタイトル？　まさか白い悪魔や金色夜叉と俺が勝負したりしないよね？　しないよね!？」

No. 6 天才 対 非才（前書き）

隼樹「『ナンバーズ』魔法が使えない男リベンジ！』 始まります。
俺に平穩を下さい」

No.6 天才 対 非才

ガジェット？型とか言うデカイロボットに助けられ、俺とノーヴエは地上に出る事が出来た。

地獄から生還したような気分で、太陽の光を浴びる。

地下でバタバタしたけど、もう終わりだろう。目的の物は無事だし、このままガジェットに乗ってアジトに帰って、とっとと寝よう。^{フッ}しかし、安心したのも束の間、次の災難が俺達を襲ってきやがった。

「ガジェットに乗っている二人！ 止まりなさい！」

またまた局員が来たんですけどオオオオ！ そりゃそうだよな！ 地下だけに局員を送るだけの単純配置で、終わる訳ないですよエエエ！

空を飛んで追ってくるのは、金髪の局員だ。しかも、また女だ。年は十代後半、長い金髪をツインテールにして、黒のミニスカ制服の上に白いマントを羽織ってる。遠目だが、顔もスタイルも抜群に良くて美人だ。

なんて暢気にしてる場合じゃねえ！ この女も綺麗な顔して、鎌なんて超物騒な武器持ってたよ！ 超怖えよ！ しかも、鎌が何か機械っぽいしさ！ アレ、ホント魔法使いか？

「ちっ！ 武器が無え状態じゃ、まともに闘り合えねえな……！」
引くぞ！」

悔しそくに顔を歪めるノーヴエだが、状況の悪さを考えて撤退を選んだ。

ガジェット？型は飛行して逃亡を図るが、残念な事に速さは追っ

ての局員の方が上だった。見る見る距離が縮まってきた、捕まるのは時間の問題だ。追跡を振り切ろうと、ガジェット？型がアームを伸ばして金髪局員に妨害を仕掛ける。が、呆気なく金色刃の鎌に切られてしまった。

ガジェット？型アアア！ もうちょつと頑張ってくれよオオオ！
俺が内心にシャウトした直後だった。

前進していたガジェット？型が、突然動きをストップした。

「そこまでです！」

前を見ると、もう一人局員が増えてやがった。

栗色の髪を同じくツインテールにして、金髪局員とは真逆で白い服を着てる。どんな感じと聞かれたら、正直『アニメ服』としか答えようがない。超恥ずかしい格好だ。もし俺が女でも、アレは絶対に着ないね。

「時空管理局・機動六課スターズ分隊隊長、高町なのは一等空尉です！」

「時空管理局・機動六課ライトニング分隊隊長、フェイト・T・ハラウン執務官です！ 貴方達が持つてるレリックと少女をこちらに渡して、投降して下さい！」

前には白い局員、後ろには金髪局員が居て、またも挟み撃ちの形になってしまった。ツイてないにも程があるだろう。地下での追い詰められた状況が、地上でも再現された。自分の不運さに、もう泣きたくなってきた。隣に居るノーヴェも、苦虫を噛み潰すような顔してる。逃げられないって悟ってんだな。

完全に諦めていた俺だったが、ふと妙な事に気付いた。まだほんの数分——、二分だが、何時まで経っても局員が迫ってくる様子が無い。険しい顔で鎌や杖を構えて、警戒してる感じだ。

何でだ？ 何で二人は、さつさと俺達を捕まえないんだ？

俺は考えた。もしかしたら、この異変が突破口かもしれない。

その時、俺は手に持ってる物に考えが至った。

——ああ！ もしかして、コイツを持ってるからか？ 地下で会った…… ギンガ、だっけ？ とか呼ばれてた局員が、このレリックって代物は危険な物だって忠告してきた。って事は、二人は『動かない』んじゃない？ 動けない』んだ……！ 下手に動いて、レリックを持つ俺が妙な事をするのを警戒してるんだ！

異変の正体に気付いた俺は、コレが突破口だと思った。相手が動けない今の状態は、千載一遇のチャンス。ココを逃せば、今度こそアウトだ。普段使わない脳味噌を働かせて、俺は必死に考えた。

そして俺は、圧倒的な閃きを得る。

いや、そりゃ確かにこの策を使えば、二人から逃げられる事が出来ると思う。でも、コレやっちゃうと、後でノーヴェや他のナンバーズに怒られると思うんだよね……。でも、このまま何もしないでしたら、相手も痺れ切らして捕まえに来るだろうし……。ああ、もう！ やってやるよ！ 務所暮らしより、いつそ美女にこっ酷く怒られた方がマシだ！ もしかしたら、半殺しの目に遭うかもしれないけど……。

肚を決めた俺は、意を決して閃いた策を実行する事にした。

「あ、あの……！」

俺の声に、二人の局員は身構えた。まだまだ警戒は解いちゃいない。

隣に居るノーヴェも、怖い顔でこっちを見てくる。

「貴方達は、このレリックって物を渡して欲しいんですよ？」

「そうです。ソレは、危険な物なんです。ちゃんとした場所で管理する必要があるんです」

鎌を持った金髪局員が、俺の問いに答えた。

さうで、緊張が高まって心臓の音がバクバク激しくなってきた。汗も流れて、体がガチガチに固まってきた。いくら緊張を解く為に、俺は一度深呼吸をする。

頼むぞ。頼むから、上手くいつてくれ……！

「じゃあ渡します」

「えっ！？」

「なっ！？」

俺の言葉が予想外だったのか、二人の局員は意外そうに驚いてる。そりゃ、素直に物を譲り渡す悪者なんて、そうそう居ないもんな。ついでに、俺の隣に居るノーヴェも驚いてる。

「デメエ！ 何勝手な事言ってたんだ！？」

ノーヴェ様ご立腹です。怖い顔をして、耳元で怒鳴ってきます。耳痛っ！

だが俺は、怒るノーヴェに構わず行動に移る。

「うおりゃあああああああああ！」

ありったけの叫び声を上げて、カ一杯二つのレリックケースを下の市街地に向けて放り投げた。ケースが重かったから、投げたと言うより落としたと言う方が正しいな。

「ああっ！？」

俺の信じられない行動に、二人の局員とノーヴェは同時に声を上

げた。

落ちていくケースに意識が向いて、二人の局員は完全に隙を見せた。

ココだ！

「ガジェット？型！ 全速力——いや、ちょっと不安だから、少しスピード落として逃げろオオオオオ！」

俺の指示に従ってくれるか一抹の不安があったが、ガジェット？型は動いてくれた。

二人の局員が居る前後の間——横に向かって、ガジェット？型は宙を走る。

「おま、お前、何やってんだよ！？」

「すいません！ すいません！ でも、こうするしかなかったんです！」

額に青筋を浮かべて声を荒げるノーヴェに、俺は謝った。

後ろを振り向くと、二人の局員は慌てた様子で落ちていくレリックを拾いに行ってる。レリックが本当に危険な代物なら、俺がどんな行動をしたら間違い無く回収に向かう。どれ程の規模か知らないが、街中で被害が出たら大問題だからな。物の数が二個だったのが、幸いだった。一個だったら、一人しか動きを封じられないからな。

ソコを利用した策が、まんまと嵌まったぜ！ 何かスゲー大胆な事したみたいで、ちょっとテンション上がったきた！ 後はこのまま逃げて、ナンバーズからのお叱りを受けるだけだぜ！ うう、怖い……！

危機を脱した直後で、気が抜けた時だった。

「げっ！？」

前方に見える人影に、俺は顔を歪めた。

認めたくないが、新手の局員のご登場だ。ピンク色の長髪をポニテールにした、新たなコスプレ美女だ。しかも、今までで一番胸がデカイ！ 最高レベルじゃねーかって、興奮してる場合じゃねエエエ！

相手の今度の得物は、剣だ。またまた物騒な武器を……！

「ココは通さん！」

しかも、さっきの二人と違って攻撃してくる気満々だ。レリックを手放した事で、切り札を失ったからな。

躊躇無く剣を構えて、猛スピードで接近してくる。

「ヤバイヤバイヤバイヤバイ！ 狙いはガジェットだろうけど、足”が無くなったら下に真っ逆さまだ！」

俺の中で、かつてない危険信号が鳴り響いた。

漫画とかだったら、都合良く仲間が助けに入るんだろうけど、現実には非情なんだよな。

「え！？」

今度こそ諦めモードに入った俺の隣で、ノーヴェが驚きの声を上げた。

次の瞬間、俺の視界が変化した。

*

「全く……世話の焼ける妹と男だ」

「トーレ姉」

気がつく、俺達は廃墟のような場所に居た。周りには、崩れかけた建物や瓦礫が転がってる。俺達以外に、人の気配は全くしない。まあ、気配なんて俺にはよく分かんないけど。

俺達の前には、腕を組んで見下ろしてくるトーレが立ってた。って、トーレ!?

「ト、トーレさん!? どうしてココに?」

「どうしても何も、ウーノの命令でお前達の救援に来たんだ。着いた途端、機動六課の魔導師に迫られてたから、私のISで助け出した」

「トーレさああああん!」

俺は思わずトーレの足に抱き付いた。安心した途端、涙が小さな滝のように出てきた。

「ありがとうございます! もう死ぬかと思いましたアアアア!」

「ええい! ひつつくな、鬱陶しい!」

そんな酷い事言わないで下さいよ! ホントにダメかと思ったんですから! もう、トーレ最高! 俺のお姉さんになって下さい! 俺がトーレの足に抱き付いてると、ノーヴェが立ち上がった。

「すまねえ、トーレ姉」

「全くだ。だが、無事でよかった。レリックは失ったが、『器』を得ただけでも充分だろう。戻るぞ。お前もいい加減離れる、隼樹!」

トーレに怒られ、俺は足から離れた。

ああ、やっと帰れるんだ。

安心した俺だったが、すぐに気を落とす。帰ったら、きつとレリックを投げた俺の行動を咎められる。ああ、憂鬱だ。折角助かったのに、何この気分？

俺が溜め息をつくとき、肩を軽く叩かれた。振り返ると、俺達を乗せてたガジェット？型がいた。コイツも一緒に助けられたようだ。

「お互いよく無事だったな」

俺の言葉に答えるように、ガジェット？型は真ん中の黄色いレンズを点滅させた。

そう言えば、コイツにも地下で助けられたんだよな。相手は機械だけど、一応礼は言っておくか。

「あゝ、地下では助かったよ。ありがとう」

俺の礼に、ガジェット？型はまた点滅して反応した。

つか、俺の背中に居る女の子、ずっと起きないんだけど。あれだけの騒ぎの中で起きないって、どんだけ肝が太いんだよ。

絶対、将来大物になるね。

しばらくして、ルーテシアと言う少女とアギトって妖精2と合流した。なんでも、ルーテシアは召喚魔法や転送魔法に優れてるらしいから、移動に便利なんだと。ルーテシアは、紫色の長髪に黒のドレスが特徴の大人しそうな少女だ。アギトの方は、赤色の髪に明るい性格でルーテシアとは正反対な奴だ。

何でこんな子供二人が、スカリエッティやナンバーズの協力してるのか疑問に思ったが、すぐにどうでもよくなった。

だって、俺関係ないもん。

ルーテシアの集団転送のお蔭で、俺達は管理局に気付かれる事なく、その場を去れた。

＊

地下騒動から何とか生還出来た俺は、アジトに戻ってた。

ナンバーズ全員とスカリエッティが集まってる研究室に、俺も居る。

集まった理由は他でもない。今回の一件についてだ。一同の前で、俺とノーヴェが連れてきた女の子をスカリエッティとウーノが何やら調べてる。

しかし、俺にとってはそんな事どうでもよかった。

それよりも、自分の処遇が気になってた。

――ヤベー！ 気分は死刑執行を待つ囚人のようだよ……！ 超
帰りにえ！ でも帰れないし……でも怖いし……。あんだけ必死こ
いて収穫がガキ一人だけって……。しかも、レリックを失くした原因
は、管理局を巻く為とは言え、俺が投げ捨てたからだし……。絶対怒
られるよ……！ いや、怒られるだけじゃ済まないかもしれない！
俺にはよう解らんが、結構大事な物っぽかったし……。！ どうし
よう？ もし責任を取る為とか言われて、改造手術とかされちゃう
のかな？ シ・ツカーみたいにされちゃうのかな？ マジどうしよ
う？ 改造手術が失敗したら、俺死ぬのかな？ 俺死んじゃうのか
な？

ネガティブ思考が働いて、マイナスのイメージが俺の中で膨らんでいく。

「フフフ。どうやら、この『器』は本物のようだね」

スカリエッティが、何やら嬉しそうに言ったが、こっちはそれどころじゃねーんだよ。人生が懸かってんだよ！

「隼樹君」

「は、はいっ!？」

検査を終えたスカリエッティに呼ばれ、俺は上ずった声を上げた。
き、来たあ……! ついに、この時が来ちゃった……。

恐ろしい処分内容を思い浮かべる俺は、恐怖で足をガクガク震わ
せてた。

しかし、スカリエッティの口から出たのは、俺が予想してたのと
は全く別の言葉だった。

「今回は、キミのお蔭で貴重なマテリアルを手にする事が出来た。
それに、ノーヴェを護ってくれた事も感謝するよ。ありがとう」

スカリエッティからの思わぬ礼の言葉に、俺はポカンとなった。
てつきり、レリックとか言う物を投げた事を咎められると心中で
構えてたが、その事に関しては全く触れてない。完全にスルーして、
礼だけ言ってくる。

不思議に思っ、俺は訊いてみる事にした。

「あ、あの……」

「ん? 何だね?」

「いや、その……俺、レリックってヤツを放り投げちゃったんです
けど……」

「なに、レリックも集めているが、今回はオマケみたいな物だよ。
それよりも、この『聖王の器』を確保出来た事の方が大きい。礼こ
そ言えど、文句や責める事などしないさ」

「そ、そうですか……」

何だかよく分からないが、とりあえず助かったみたいだ。

ああ、良かった。お咎め無しで、本当に良かった。ずっと緊張し

てたから、安心したら気が抜けちゃったよ。

さて、疲れた事だし飯にするかな。ちなみに、路地裏に置いてきた食材やら米は、セインが回収してくれてた。

エエ娘や。

*

昼飯を食い終えた俺は、通路を歩いてた。

満腹になった腹を擦りながら、俺は一人通路を歩く。昼飯は、おにぎりだ。料理ド素人の俺でも作れる料理と言ったら、コレくらいしか無かったんだよ。それでも、キャロリーメイト地獄よりは全然マシだ。おにぎりの中身も色々で、久しぶりにまともな味を堪能する事が出来た。

おにぎり万歳。

ナンバーズからも、まあそれなりの評価を得れた。トーレには助けられた礼もあったから、一番高い肉入りのおにぎりを用意した。少し戸惑ってたが、食べて、悪くないと言ってもらえたので、ホッとした。

んで、昼飯を終えた俺は、自分の部屋に向かった。今日は色々あって、とにかく疲れた。さっさと部屋に戻って、ゆっくり寝たい。

「おい」

だと言つのに、一番苦手な奴に声をかけられた。俺が恐る恐る振り返ると、案の定ノーヴェが立ってた。相変わらず眉根にシワを寄せて、不機嫌そうな顔をしてる。

「その……アレだ……」

あ？ アレじゃ解んねーよ。

っーか、何か様子おかしくね？ いつもの迫力が無いような、頬が少し赤いような、とにかくいつもの様子が違う。アレ？ ノーヴェエってこんなに可愛かったっけ？

口ごもってたノーヴェエが、突然声を大きくして言った。

「きょ……今日は、ありがつ……！」

その瞬間、通路は沈黙に包まれた。

気まずい空気の中、固まって見つめ合う俺とノーヴェエ。

——か、噛んだアアアア！

ノーヴェエの失敗に、俺は内心にシャウトした。

あのノーヴェエが、台詞を噛んだよ！ ヤベーよ、恥ずかしさで顔真っ赤になってるよ！ いや、気持ち解るよ！ 俺も初めてココに来て、食堂で自己紹介した時に同じ失敗したからスゲー解るよ！ 俺が激しく同情していると、ノーヴェエは涙目になって、体をプルプルと震わせた。

「ば……馬鹿野郎オオオオ！」

「えっ！？ ちょっ……ぼぐあ！」

殴られた。

ノーヴェエの鉄拳を左頬に受けて、俺は背中から床に倒れた。コレ、八つ当たりじゃね？

俺を殴り倒したノーヴェエは、踵を返して走り去っていった。

「いつて〜！」

地味に眩きながら、俺は殴られた左頬を押さえた。幸い、顎は外

れてないし、歯も抜けてない。

マジであり得ねえ、あの暴力女……！ 噛んだのは俺のせいじゃねーだろう？ ああ、もう最悪！ 一瞬でも、アイツを可愛いと思っただ俺が馬鹿だった！

俺が床に倒れてると、大きな影がかかった。影の主は、ガジェット？ 型だ。多分、俺とノーヴェを助けてくれた奴だろう。

怪訝な顔を見ると、太いアームを伸ばしてきて肩を軽く叩かれた。まるで、『ドンマイ』と励まされてるみたいだ。

ヤッベ、このガジェット優しい！

ふと起き上がって周りを見れば、？ から？ までのガジェットが数十機集まっていた。そして、よく解らんが全機がアームやらケーブルやらを伸ばしてきて、俺は胸上げされた。

ホントによく解らんが、この日から何故かガジェットに懐かれた。後でスカリエッティに話して訊いてみたら、「非才の身で管理局のエースを出し抜いた一件が、ガジェットに影響を及ぼしたのだから」と言われた。

今日の俺の感想。ノーヴェはやっぱり苦手。管理局はコスプレ集団。ガジェットは良い奴。

No.7 子守りと小さな変化（前書き）

チンク「『ナンバーズ〜魔法が使えない男リベンジ〜』始まるぞ。
今回は私の視点で話が進むが、よろしく頼む」

No.7 子守りと小さな変化

私は、ナンバーズのNo.5のチンクだ。

ドクターの命令で私は、ある日突然アジトに現れた塚本隼樹と言う男の世話役を任された。当初の目的は『監視』だったのだが、今では純粹に世話役になっている。監視目的が無くなった理由は、隼樹と言う男が警戒する必要の無い人物だと判断されたからだ。

私個人の意見は、『ゲータラ男』だ。本人には悪いが、コレが私の抱いた感想だ。

基本的に隼樹は、自分から何か行動を起こすような人間ではない。何も無ければ、殆ど部屋に引きこもっている。最近では、トーレとの訓練を週二でやっているが、ソレ以外はやはり部屋に居る。

それから、かなりのネガティブ思考の持ち主だ。常に物事を悪い方向に考え、やってきた最初の頃は「そうだ、死のう」と口に出す程だった。そのネガティブさは、ウーノに心配させる程だ。隼樹の将来を案じたウーノが、「彼のネガティブ思考を、何とか改善出来ないかしら？」と私に相談までしてきた事がある。私も、あのネガティブ思考はどうかと悩んでいるが、なかなか改善策が思い付かない。ノーヴェ達のエデュケーションはあるが、隼樹はある意味ノーヴェ以上の強敵だ。

そんな隼樹だが、最近では私達と親しくなってきた。最初はぎこちない感じで警戒心もあったが、トーレとは訓練をして、セインやウェンディとは談笑してる姿をたまに見る。相変わらず、クアットロには弄られてるがな。最近では、あのノーヴェも隼樹と親しくなろうと思ってるようだ。口では言ってくれないが、地下騒動の一件以降、ノーヴェは隼樹の事を気にしている様子でな。ただ、ノーヴェはああいう性格だから、気の弱い隼樹は苦手にしてるようだ。世話役として、私自身も隼樹とは多く接している。私は、隼樹が持っている『漫画』と言う物を読んだが、コレがなかなか面白い。

最初は異世界の文字に苦戦したが、理解すれば面白さが解る。隼樹は、こんな面白い物を家に百冊以上あると言う。是非読んでみたいが、帰る事が出来ない現状では諦めるしかない。ギャグやバトルと言ったジャンルが好きなようで、私達に似たようなキャラクターとやらの知識もあるようだ。私達が戦闘機人と知っても、あまり驚かなかったのはコレが理由だったのだ。

隼樹は『グータラ男』だが、決して悪い人間ではない。面白い物を持っていたり、地下騒動では妹であるノーヴェを護ってくれたり、おにぎりと言う隼樹の世界の料理まで作ってくれた。単純な料理だったが、中身に色々な具を入れて、楽しめながら食事をする事が出来た。あんな食事は、おそらく初めてだろう。隼樹が現れた事で、私達の生活は少しずつだが変わってきた。

そんなある日、隼樹と私はドクターに呼ばれた。隼樹は面倒くさそうにダルい足取りで、研究室に向かう。ネガティブ思考もそうだが、このやる気の無さも問題だな。

研究室に着くと、ドクターとウーノ、それに地下騒動で確保した聖王の器の姿もあった。

「やあ、待っていたよ」

「お呼びでしょうか、ドクター？」

「ああ。実は、二人にちよつと頼みたい事があってね」

そう言つて、ドクターは視線を移した。

私も視線を追うと、一人の少女の姿を捉えた。机の陰に隠れるように、こちらの様子をうかがうのは地下騒動で確保した例の聖王の器だ。^{マテリアル}少女を見て、ドクターの頼みごとの内容を察した。

「マテリアルの世話をキミ達に頼みたい」

やはりな。

隣の隼樹を見ると、嫌そうな顔をしていた。声には出さないが、苦笑いでハッキリと気持ちを表している。面倒くさがりな隼樹なら、まあ嫌がるだろうな。だが、同時に『NO』と言えないのが隼樹でもある。嫌な顔こそしたが、結局断る事が出来ずにマテリアルの世話を受けた。

*

ドクターに頼まれ、私達はマテリアルを連れて研究室を出た。しかし、ソコで事件が発生した。

「うええええん！」

隼樹の部屋に向かう途中で、マテリアルが泣き出してしまった。教育の経験はあるが、マテリアルのような小さな子の大泣きを止める術を私は知らない。初めての状況に、どうしたらいいか困惑してしまう。

隼樹なら何か方法を知ってるかもと顔を向けるが、手で両耳を塞い喧しそくに顔を歪めていた。

私は溜め息をついて、隼樹に声をかけた。

「隼樹」

「はい？」

「私はこの場面、どう対処すればいいのかわからない。隼樹は泣き止まずやり方を知らないか？」

「知りません」

即答で返された。

「だから嫌だったんですよ。子供世話なんて、陰湿なイジメ以外の何物でもないですよ」

「ほう。その口ぶりから察するに、過去に子供の相手をした事があるんだな？」

「あ……」

どうやら墓穴を掘ったようだな。

唸り声を上げる隼樹は、しばらくして諦めたように溜め息をついた。

「分かりましたよ。何とかしてみます……面倒くさいな」

最後のボソリと呟いたが、シツカリ聞こえてるぞ。

さて、隼樹がどうマテリアルを泣き止ますか拝見するか。隼樹は屈んで、マテリアルと目線を合わせて話しかけた。

「あゝはいはい。ええつと、どうすりゃいいんだっけ……？ あゝとりあえず、泣き止もう？ ね？ お願い。お兄さんをお願い！」
「う……ううう……ひっく……」

おおっ！ マテリアルが泣き止みつつあるぞ！

その調子だ、隼樹！ お前なら出来る！ 姉が見守ってるぞ！

「えっと……この後どうしよう……。ああ、そうだ。俺の名前は塚本隼樹。キミの名前は？」

「ヴィ……ヴィヴィオ」

「ヴィヴィオか。その、大丈夫だから。別に何も酷い事しないからね？」

隼樹の言葉に、マテリアル——ヴィヴィオは泣き止んで頷いた。まだ少し怯えた顔をしてるが、最初の時よりは大分和らいている。ふむ、泣いてる子供には、優しく接するのが大事なのだな。

ヴィヴィオを泣き止ませた隼樹は、立ち上がって私に顔を向けた。

「これでいいですか？」

「ああ、助かった。こう言った経験は、私には無いからな。ありがとう」

「いいえ」

私が礼を言うと、隼樹は照れ隠しでもするように顔を背けた。

やれやれ、と私はかぶりを振った。それから隼樹に習って、私もヴィヴィオに名乗る事にした。

「私はチンクと言う。今日から、ヴィヴィオの世話役を任された者だ。よろしく頼む」

「チンク、お姉ちゃん……？」

「ああ、そうだ」

微笑みを浮かべて私が頷くと、ヴィヴィオも笑ってくれた。

その時、通路の先から何か音が近づいてきた。顔を向けると、やってきたのはガジェット？型だった。

「おお、サード」

やってきたガジェット？型に歩み寄り、隼樹は丸いボディに手を置いた。

不思議な事だが、隼樹はガジェットに懷かれている。機械に懷かれると言うのも変な話だが、実際にそうなのだから他に言い様が無い。ガジェットは、私達戦闘機人と違って人間のような感情は持ち

合わせていない、純粹なロボットだ。そのガジェットを引き寄せる隼樹は、本当に不思議な奴だ。

ちなみに『サード』とは、隼樹が付けたガジェットの名前だ。？型だから『サード』だそうだ。

「チンクお姉ちゃん。アレ何？」

初めて見るガジェットに、少し怯えた様子でヴィヴィオが尋ねてきた。

「アレはガジェットと言うロボットだ」

「ロボット？」

「ああ。別に危害は加えてこないから、安心しろ」

私の腕にひつついてるヴィヴィオは、ジッとガジェットを見つめている。どうやらガジェットに興味を抱いたようだ。だが怖い気持ちもあるらしく、なかなか前に踏み出そうとしない。

「触ってみるか？」

「え？」

「大丈夫。姉も一緒だ」

私が言っでやると、ヴィヴィオの顔から不安の色が消えて笑顔になった。

手を繋いで、私達はガジェット？型に近づき、隼樹の隣に立った。

「隼樹。ヴィヴィオに、サードを触らせてもいいか？」

「え？ 別にいいですけど」

「ありがとう。ほら、触ってみろ」

私が促すと、ヴィヴィオは恐る恐ると言った様子で手を伸ばす。ヴィヴィオの小さな手が、サードのボディに触れた。

「冷たくてスベスベしてる」

触れた事で恐怖心が薄れたのか、ヴィヴィオは今度は全身で触りに行った。ガジェットのボディの感触が、気に入ったみたいだ。

すると、サードが二本のアームを出して、ヴィヴィオの体を掴んだ。ビックリするヴィヴィオを、サードは掴んだアームで高く持ち上げた。上げては下ろし、上げては下ろしを繰り返すサードの行為に、ヴィヴィオは楽しそうに笑い出した。少女の笑い声が、通路の中に響いた。

「サード……高い高いなんて、どこで覚えたんだ？」

「アレは、ああいうあやし方なのか？」

「そうですよ。サード、もうガッチリとヴィヴィオのハートを掴んだみたいだな」

「うむ。そうだな」

機械と戯れる少女を見て、私は微笑んだ。ヴィヴィオが笑うと、何だか私まで嬉しくて笑ってしまう。

そんな事を思っていると、隼樹が何か閃いたように手を打った。

「そうだ！ このままサードにヴィヴィオの世話を任せればいいんだ！」

「世話役を任されたのは、私とお前なんだぞ。ズルは許さん」

「ですよね」

苦笑いで隼樹は溜め息をついた。

「あれ？ チンク姉に隼樹？」

「ガジェットも居るっスよ。何やってるんスか？」

セインとウエンディが、訓練を終えてやってきた。

「ああ、ドクターからヴィヴィオの世話を任されてな」

「ヴィヴィオ？ ああ、マテリアルの事っスか」

サードに高い高いとやらをされてるヴィヴィオを見て、ウエンディは納得したように頷いた。

天井近くまで掲げられたヴィヴィオは、通路にやってきたセインとウエンディに気が付いたらしく、首を傾げている。サードはアームを下げて、ヴィヴィオを床に降ろした。

「チンクお姉さん。この人達、誰？」

「私の妹達だ」

「やつほー！ セインお姉さんだよ！」

「あたしはウエンディっス！ よろしくっス、ヴィヴィオ！」

私が紹介すると、妹達が明るく名乗った。姉妹の中でも二人は、最も人間臭い性格をしてるからな。

「ヴィヴィオです」

ペコリと頭を下げ、ヴィヴィオも挨拶をした。うむ、礼儀正しくて良いな。

「しかし、チンク姉はともかく、隼樹が子供の世話役選ばれるなんてな」

「いや、正直まいつてますよ。セイン、良かったら代わらない？」

「こら、隼樹」

「すいません」

全く、油断も隙も無いな。サードだけでなく、セインにまで世話役を押し付けようとするとは。

私が呆れていると、一人考え込んでたウエンディが言った。

「チンク姉と隼樹の二人で子供の世話をするって、まるで夫婦みたいっスね」

「はあ!？」

ウエンディの言葉に、隼樹は目を見開いて驚く。

むむっ、ウエンディも妙な事を言うな。確かに、男女で子供を育てる様子は、夫婦とやらに当てはまらなくはない。だが、別に結婚とやらをした訳でもないし、私達が相思相愛な訳でも無いからな。

やはり、夫婦とは違うだろう。

「チンクお姉さん」

「ん？」

ヴィヴィオに手を引かれ、顔を向けた。

「隼樹お兄さん、顔が赤いよ？」

「あ？」

確かに、ヴィヴィオを一睨みする隼樹の顔は赤くなっている。

「どうした、隼樹？ 顔が赤いぞ？」

「え？ いや、何でもないです！ 大丈夫です！」

何とか平静を装おうとしてるが、動揺してるのは明らかだ。

「あれ？　もしかして隼樹、チンク姉の事……」

「わー！　わー！　その先は言わなくていいです！」

何故か慌てた様子で、隼樹はセインの言葉を遮った。一体、何をそんなに慌ててるのだ？

私の前で、隼樹とセイン達が騒いでいる。

塚本隼樹とは、不思議な男だ。魔法や特別な力は持っていないが、不思議な男だ。隼樹が来てから、少々変化が生じた。

その変化の中には、ドクターも含まれてる。以前のドクターであれば、ヴィヴィオの世話を私達に任せたりはしない。計画実行まで、部屋にでも閉じ込めていたハズだ。ソレをせず、ヴィヴィオの世話を私達に任せたのは、ドクターに何かしらの変化が生じたのだろう。そして、原因はおそらく隼樹だろうな。

ただ、悪い変化ではない、と思う。

隼樹が私達の所に来たのは、悪い事では無い。

『私達の世界』は、少しずつ変わっていった。

No. 7 子守りと小さな変化（後書き）

次回『二番目は綺麗で超危険です』

No. 8 二番目は綺麗で超危険です（前書き）

ドゥーエ『ナンバーズ』魔法が使えない男リベンジー』 始まり
ます。読まないと……殺しますよ？」

No.8 二番目は綺麗で超危険です

「同居生活？」

用件を聞いた俺は、片眉を上げた。

朝食を食べ終えた後、俺はスカリエッティに呼ばれて研究室にやってきた。また、どうせロクでもない事を頼まれるんだろうな、と思っていたら案の定だった。

今回、俺に頼まれたのは、現在管理局に潜入してるナンバーズと一週間同居生活をしてほしい、という内容だ。正直、不安な気持ちが大きいな。いや、そりゃあナンバーズは皆美人だけどさ、中にはノーヴェみたいな暴力女やディエチのようなあまり話をしない女とか、色々居る訳よ。必ずしも、チンクやセイン達と言った接しやすい人とは限らないんだよ。でも、断る正当な理由が思い浮かばないんだよな。嘘でもいいから、それっぽい理由を作れたらいいんだけど、俺は嘘が苦手だから、すぐにバレる。

結局、『NO』と言えない俺は、引き受ける事になるんだよね。

「分かりました。でも、何で今更同居なんて？」

「彼女は、今まで独りで潜入任務を続けていてね。アジトに戻る事は殆ど無く、ウーノや妹達とも長らく顔を合わせていない。そこで彼女の孤独を少しでも和らげようと思い、キミに行ってもらおうと言う訳だよ」

ハア、と俺は頷いた。

理由を聞いて、他人事とは思えなかった。

俺も、最初は独りだった。この世界には、俺の知ってる人や俺を知ってる人は誰一人として居なかった。今でこそ、一緒に暮らしてるナンバーズと親しくなって、笑ってるけど、来た最初の頃は本当

に不安だった。不安で寂しくてたまらなかったよ。けど、チンクが優しく接してくれたり、トーレが訓練に付き合わせてくれたり、ナンバーズが支えてくれたから、不安も寂しさもいくらか払拭された。誰かが傍に居る事って、スゲー大事なんだなって実感したよ。

だから、そのナンバーズが寂しがってるなら……まあ、行ってやらないでもないな。

「引き受けてくれて、助かるよ。本当なら姉妹の誰かを向かわせるのが一番なんだが、皆忙しい身だからね」

そこで暇人の俺に、白羽の矢が立ったって訳か。

つか、このスカリエッティってマッドサイエンティストでありながら、親馬鹿でもあるよな。独りにさせた娘の心配してさ、居候の俺に頼む程だもん。

なんて思ってた時、ふと俺はある問題に気付いた。

「ちょっと待って下さい。俺が管理局に出向くのって、マズくないですか？　だって、地下の一件で管理局側に顔見られちゃってるし……」

「なに、軽く変装でもしていれば大丈夫さ。それに、局員全てがレリック事件を捜査してる訳じゃないからね」

なるほろ、と一応納得はするも、やっぱり少し不安だった。

言うなれば、敵地に向かうようなもんだからな。ヤベ、アジト出る前から緊張してきた。

「ああ、そうだ。娘達と一緒に行けない代わりに、別の者を同行させる事にしたよ」

「別の者？」

スカリエッティの言葉に、俺は怪訝そうに片眉を上げた。

別の者って誰よ？ 俺の知る限りじゃ、アジトに居るのはスカリエッティ、ナンバーズ、ガジェット三タイプ、ついでに俺のハズなんだけど。他にも、俺の知らない誰かが居るのか？

俺が考え込めると、研究室の扉が開いた。研究室には、通路に繋がる物と奥に通じる物と二ヶ所あって、今開いたのは奥に通じる扉だ。

開かれた扉から入ってきたのは、今日も綺麗なウーノともう一人綺麗な女の二人だった。

ん？ 二人？ 一人知らないの増えてね？

ウーノと入ってきた女は、光を浴びて輝く金髪をツインテールにして、若干幼く見える顔立ちだが目は鋭く、黒のスーツに黒のミニスカートを履いて生足を晒してる。身長は170センチはありそうで、胸が大きい。この間見た、シグナムってピンク色のポニーテール巨乳と同じくらいだ。しかも惜し気もなく晒してる生足が、細くて綺麗だ。

しかし、こんな美少女がアジトに居たっけ？ 全然記憶に無いんだけど。

「あの……スカリエッティさん？ こちらの方は……？」

「紹介しよう！」

俺が謎の美少女について尋ねると、スカリエッティは何故か急にテンションを上げた。

何故だか解らんが、嫌な予感がある。

「彼女は私が開発した、人型ガジェット一号——別名『サード』さ！」

「サード？」

名前を聞いて、俺の中で何か引つ掛かった。
ガジェットでサードって……ええええつ！？

「サードオオオオ！？ サードって、あのサード！？ デカイ真ん丸ボデイのサード！？」

「その通り！ 元ガジェット？型だよ！ 私の技術によって、見事に生まれ変わったのさ！」

「マジでかアアアアアアア！？ いや、変わりすぎでしょ！ もう完璧別人じゃないっすかアアア！」

某SF大江戸コメディ漫画のツツコミ眼鏡の如く勢いで、俺は声を上げてツツコんだ。

だってお前……あのサードが、衝撃的なビフォーアフターを遂げたんぞ！？ 極太りした女がダイエツトに成功したとか、そんなレベルの話じゃねーよ！

俺が衝撃を受けていると、サードらしき女が話しかけてきた。

「ちょっと、アンタうるっさい！ 何そんなに驚いてるわけ？」

「いや、驚くわ！ いや、驚きますよ！ って言うか、貴女ホントにサードなんですか？」

「当たり前でしょ。地下でアンタとノーヴェを助けて、ヴィヴィオを高い高いしてあげたサードよ」

「マジでかアアアアアアア！？」

見た目通りの綺麗な声で、女も自分がサードである事を認めた。

「え……？ ってか、サードって性別『女』だったの？」

「いいえ、ソレは違います」

俺の疑問に答えてくれたのは、ウーノだ。

「純粋な機械であるサードに、性別などありません。ただ、ガジェットにはA I——つまり、人工知能が搭載されていて、ある程度 of 意思はあります。今までの事は、先ほどサードが語ったように、ちゃんと記憶してあります。？型のボディにあつた人工知能を取り外し、人型ボディに組み込んだのです。ボディの方は、私達戦闘機人と違って完全に機械で構成されており、外側は人工皮膚で覆われています」

「そ……そうなんですか……」

な、何か……俺の知らないところでえれえ事が進んでたんだな。どおりで最近、サードの姿を見なかった訳だ。スカリエッティ達に改造されてたのか。

いや、しかし、何でよりによつて女型？ 人に化けるなら、別に男でもいいじゃん。そう言えば、戦闘機人も今のところ全員女だし……。何なの？ スカリエッティの拘りか何か？ これじゃあ、もう完璧女版ター・ネーターじゃん。つか、サード中身も完璧に女じゃん。

全くの別人と化したサードに、俺は何とも言えない複雑な想いを抱く。？型の外見だと男友達みたいな感覚で接してたが、美少女に変身したら今まで通りに出来ねえ。

そう思つてると、サードが声をかけてきた。

「外でのアンタの護衛も兼ねて、私も同行するから。まあ、これまで通りよろしく」

「は、はい……こちらこそ」

いや、だから無理だつて。相手が美少女だと、緊張して敬語になっちゃうから。馴れ馴れしく接する事なんて、出来ないですから。俺達の友情は、何処にいつちゃったんだろう？ とちよつと切な

く思った。

*

サードの衝撃暴露から一時間後、俺はアジトの入り口に立っていた。隣には、勿論サードが居る。

早速、今日からNo.2さんと同居するので、アジトを出発するのだ。見送りには、アジトに居る全員が来てくれた。コレって、かなり嬉しい事だと思わない？ 家族でもない付き合い短い他人を見送るうなんて、良い人達だよね。

しかも、見送りに来てくれたのは、スカリエッティやナンバーズだけじゃないんだぞ。なんと、ガジェットまで来てくれたんだ。？から？型までの数十機が、通路に所狭しと集まってる。更にコイツ等、言葉を話せないから、代わりに大きな横長の旗にカタカナで『イッテラッシャイ』と書いて掲げてるんだぞ？ ヤッベ、ちよつと感動しちゃったよ！ お前等、皆大好きだアアア！

俺達の友情が、確かにソコにあった。

「あーあ。隼樹が居なくなったら、ちよつと寂しいな」と言ってくれたのは、セインだ。

「しばらくは、隼樹の手作りおにぎり食べれないっスね」俺のおにぎり、そんなに気に入ってくれたのかウエンディ。

「私も、隼ちゃんが居ないと寂しいわ」猫なで声で言うのはクアツト口。皆の前で弄ってくるから、その地獄から抜け出せると思うとちよいホツとする。

「隼樹、お前……いや、自分で決めたのなら私は何も言わん。頑張ってこい」何やら気になる事を言ったのは、トーレだ。え？ どういうこと？ 凄い気になるんですけど。

「まあ、その……とつと行つてこいよ！」ノーヴェは相変わらずだ。あれ？ 頬が少し赤いのは、気のせいかな？

「気をつけて……」とディエチが言った。うーん、あんまり会話した事ないからか、ちよい素っ気ない感じだけど、仕方ないか。

「No.2は、身内には優しいから心配するな。それから、ヴィヴィオの面倒も私達でちゃんと見ておくから大丈夫だ」

「隼樹お兄さん、行つてらっしゃい！」

微笑むチンクと笑顔で挨拶をするヴィヴィオ。ヤベツ、可愛いんですけど。チンクなんて、天使ちゃんマジ天使な感じに近い可愛さだ。あれ？ 天使ちゃんマジ天使って何？

「それでは隼樹さん。短い間ですが、妹をよろしくお願いします」

丁寧にお辞儀をしてくるウーノ。

「は、はい」

ウーノに頼られてる感じで、若干緊張してきたな。

「では、頼んだよ隼樹君。サードも、隼樹君の護衛や目的地までの案内を頼むよ」最後にスカリエッティから言われた。

「はい」

「はいはい、分かつてるわよ」

どうでもいいけど、サードってちよつと生意気そうな性格だな。上手くやっていけるか、ちよい心配だ。

さて、そろそろ行くかな。

見送り一同を見回して、俺は声を出した。

「それじゃあ、行つてきます」

こうして俺は、サードと共にアジトを後にした。

*

アジトを出て、俺はサードに案内されて街中を歩いていた。

サードの中には、目的地の位置や道のりがインプットされているから、安心して任せられる。外見は変わっても、頼りになるな。

ちなみに、俺は帽子にサングラスと言うベタな変装をしている。地下の一件で、一部の局員には顔が知られちゃってるからな。まあ、用心の為だ。

サードの案内で、俺は目的の場所に到着した。見上げれば、高級マンションのような建物が目の前にある。管理局の局員が使ってる、察みたくない所だ。かなりデカくて、家賃とかも高そうな感じだな。俺みたいな貧乏人には、一生縁の無い所だ。けど、その一生縁の無い建物の前に俺は居るんだよな。

入り口に目をやると、硝子の自動ドアが開いて、一人の局員が建物から出てきた。

綺麗な緑色の長髪の女で、顔も整っていて、間違いなく美人の部類に入る。青を基調とした局員の制服を着ていて、有能な女性社員みたいな感じに見える。

正直、ちよつと見惚れてた。

すると、相手の女もこっちに気付いて、近付いてきた。

「貴方が塚本隼樹さん、ですか？」

「え？ あつ、はい！」

ニッコリと微笑む女に急に声をかけられ、俺は慌てて返事をした。近くで見て、改めて綺麗だと思った。

ん？ 俺の名前を知ってるって事は、もしかして……。
俺が思い当たると、女はサードに笑みを向けた。

「貴女が彼の護衛のサードですね？」

「そうだけど、アンタがNo.2？」

緊張してる俺と違って、サードは全く物怖じしていない。その度胸が凄く羨ましいな。

「そうです。立ち話もなんですから、どうぞ中へ」

No.2に招かれ、俺達は建物の中に入った。

エレベーターを使って、上の階に移動する。先頭を歩くNo.2の案内で、建物の一室に入った。

中は結構広く、大きな窓があつて開放的な空間になっている。高い階に位置するから、窓から街を見下ろす事が出来る。はっはっはっ！ 人がゴミのようだ！ 一回声に出して言ってみたい名台詞の一つだ。

俺達が部屋を見ていると、No.2が飲み物を用意してくれた。

「どうぞ、おかけになって下さい」

「あ、どうも」

No.2に促され、俺は軽く頭を下げて椅子に座った。隣にサードが、向かいNo.2が座る。

「申し遅れました。私^{わたくし}、戦闘機人No.2のドゥーエと申します」

柔らかな笑顔で、ドゥーエが自己紹介をした。

うん、チンクが言ってたように、優しそうな人だな。

そう思つて、油断したのが悪かった。

「隼樹さん」

「は……はいっ!？」

ドゥーエに呼ばれた俺は、思わず畏縮しちまった。

さっきまでの笑顔が消えて、目を鋭くさせて、こつち睨んでんだよ。しかも何か妙な迫力もあつて、俺の足は早くも小刻みに震える。俺はチラッとサードに視線を向けた。

サードは、口元を引きつらせて顔が蒼くなつてた。

——ロボット機械をビビらせるつて、どんな迫力ウウウ!？」

親友のビビリ具合を見て、俺は内心にシャウトした。

完全にビビつてる俺達に、ドゥーエは静かに語り出した。

「ドクターから既にお聞きになつてるとは思いますが、私は管理局に潜入任務として潜り込んでます。本来なら、正体がバレるリスクを減らす為に、貴方達の同居は断るつもりでしたが、他ならぬドクターの命令だったので招き入れました。

ですが……もし、私の正体がバレるような事をしたり、任務の邪魔になるようでしたら……」

ソコで一旦言葉を切り、ドゥーエは何処からともなく、かきつめ鉤爪を手に構えた。鋭い鉤爪は、部屋の明かりを受けて、銀色の鈍い光を放つ。

「殺しますよ……!？」

恐ッえええええええええ! 物凄く冷たい目で睨まれたんですけどオオオオオ!

チンク姉! この女のどこが優しいんですか!？ 全っ然優しく

無いんですけど！ 隙あらば命奪りにくる殺し屋みたいだよ！ 隣に居るサードなんて、怯えすぎてガタガタ体震わせて俺にしがみついているから！ 今にも泣きそうな顔してるって言うか、もう泣いてるよ！ オイル？ オイルなの！？

この時、俺は本気で命の危険を感じた。地下騒動も怖かったが、あの時は相手の局員に俺とノーヴェを殺す気は無かった。

でも、ドゥーエさんは違う。周囲の熱を下げるようなドゥーエの雰囲気から、本気で殺す気が伝わってきた。初めてだが、コレが『殺気』ってヤツか。

トーレが言おうとしたのは、多分この事だろうな。
漏らさなかったのは、僥倖うかつと言えるだろう。

No.9 二番目は危険で超エロいです(前書き)

ウーノ「『ナンバーズ』魔法が使えない男リベンジ!」始まります。ああ……隼樹は大丈夫かしら？」

No.9 二番目は危険で超エロいです

その日も私は、研究室でドクターの研究をサポートしていた。目の前に展開している画面下のコンソールを叩き、データをまとめている。

いつも通りの作業なのですが、今日はどうも捗っていません。頭の片隅にある不安が離れず、目の前の作業に集中出来ないのです。不安の種は、他でもない隼樹さんの事です。No.2のドゥーエとの一週間の同居生活の件ですが、彼にとって非常に危険なミッシェンだと思われます。同居相手のドゥーエは、身内には等しく優しく接します。教育係として、クアットロの面倒もよく見ていました。しかし、身内以外の者には容赦なく冷酷なのです。アジトである程度一緒に過ごしてきた私達は、隼樹さんの事を認めています。ですが、長くアジトを離れて外で活動しているドゥーエは、隼樹さんとは初対面であり、まだ身内とは思っていないでしょう。そう考えると、下手をしたら隼樹さんの命も危ないです。これは、トーレも懸念していた事です。サードが同伴するとは言え、現時点での戦闘能力はドゥーエの方が上であり、隼樹さんを護りきれる可能性は低いです。

小心者でネガティブ思考の隼樹さんは、本当に大丈夫なんでしょうか？ 彼の事が心配で、時折コンソールを操作する手が疎かになってしまいます。

「ドクター」

「何だね、ウーノ？」

ドクターは作業の手を止め、私に振り返りました。

「彼をドゥーエの元へ送って、本当に大丈夫なのでしょうか？」

「なに、心配ないさ。隼樹君は、私達の身内みたいなものだから、いくらドゥーエでも無茶はしないハズだよ」

「だいいいのですが……」

ドクターの言葉を聞いても、私の不安はなかなか晴れません。すると、心配する私を見てドクターが突然笑い出しました。

「ははは。そうしていると、まるで隼樹君の母親みたいだね」

「なっ！？ ド、ドクター！ からかわないで下さい！」

な、何を言うのかと思えば……わ、私が隼樹さんの母親だなんて……。ドクターが変な事を言うから、顔が熱くなってしまいました。コレも全部、私に心配をかける隼樹さんのせいですね。帰ってきたら、うんつと叱ってあげましょう。

私は気を取り直して、作業に戻りました。

*

マジヤバい、と言う言葉以外思い付かない。思い浮かばない。

そんな窮地に、俺とサードは居た。ドゥーエが用意してくれた部屋に引き込もって、ベッドに座って俯いてる。隣に居るサードは、俺にピッタリくっついて離れない。ドゥーエに対する恐怖、サードの大きな胸が腕に押し当てられてる興奮が混ざって、もう自分でもよく解らないヤバい状態になってた。

嫌だよ……帰らせてよ……。

ココ来てから、俺達に安息の時間は無い。ただリビングに居る時も、夕食の時も、ずーっとビクビクして過ごしてました。理由は、同居相手のドゥーエだ。知り合って僅か数分で、「殺しますよ？」

って脅されたら、そりやビビりますよ！ ビビらずに、普段通りに過ごせる方がおかしいでしょ？ 俺の護衛って事でついてきたサードも、泣いてしがみついてて全く護衛の役目を果たせそうにないしさ。つか、何でロボットが泣けるの？ 確かに、ドラ●もんも泣く事出来るけどさ。

とにかく、機械を怖がらせる程に恐ろしい女と一緒に居る俺は、もう気が気じゃない訳よ。

——ヤベーよ……！ 絶対ヤベーって……！ 俺達、無事に一週間を生き抜く事が出来るのかな……？ もし、何か気に障るような事したら、俺殺されちゃうのかな？ 鉤爪で引つ掻き殺されるのかな？ 嫌だアアア！ 童貞のまま死ぬのは嫌だアアアアア！ さっきから、俺の頭の中こんなばっかだよ。ネガティブの無限ループで、自分で自分を追い詰めて苦しいんだよ。

ああ、もう、やめだ！ 止め！ こんなばっか考えてるから、どんどん不安になってくんだ……！

かぶりを振って、俺は考える事を止めた。

脅されはしたが、まだ殺されると決まった訳じゃない。俺達がヘマをしなけりゃ、向こうも手は出してこないハズなんだ。このまま個室に引き込もってれば、俺達の安全はほぼ確保されたようなものだ。

そうだ、ポジティブだ。ポジティブに考えるんだ、隼樹。こんな時くらい、ポジティブに思考を切り替えるんだ。

しかし、アレだな。ずっと緊張状態が続いてるから、喉が乾いたな。水分を欲するように喉をゴクリツと鳴らして、俺は扉に目を向けた。飲み物を手に入れるには、あの扉の向こうのリビングに出て台所にある冷蔵庫まで行かなければならない。ソレはつまり、ドゥーエと言う悪魔が居る領域に足を踏み入れる事になる。

ドゥーエは怖いが、喉の乾きもそろそろ限界だ。

よし……！ 行くか！

意を決して、俺は個室を出ようとベッドから腰を上げようとした。

「ちよつ……ちよつとアンタ！ 何してるのよ!？」

俺の腕に引っ付いてるサードも、一緒になって立ち上がった。怯えが色濃く表れてる顔で、俺を見下ろす。

俺の身長は170より下だから、サードに見下ろされる形になるのだ。

「いや、ちよつと喉が乾いたから、飲み物を取りに台所へ……」
「あ、危ないわよ!」

心配してくれるのは凄く嬉しいけど、ゴメン。我慢の限界なんだ。

「サードは、ココで待ってて」

本当は一人じゃ怖いから、一緒に来て欲しいけど、男として格好悪い気がするから俺だけで行く事にした。

すると、怯えてたサードが、急に目を鋭く戻して言った。

「だ、だつたら私も行く!」

「えっ!？」

「わ、私はアンタの護衛で来たんだし……友達だし……だから一緒に行く!」

顔を近くして言い寄られて、俺はサードの迫力に圧される。ただ、途中の『友達だし』って言葉には、スゲー嬉しく思った。

「と、止めても行くからね……!」

腕をガッチリと掴まれ、こりゃテコでも離れないなと悟った。

諦めた俺は、サードも連れていく事にした。

俺とサードは、抜き足差し足忍び足、と極力音を殺して進み、静かに扉を開ける。いきなり全部開けないで、小さな隙間を作って、まずはリビングの様子をうかがう。見回すと、リビングにドゥーエの姿は無かった。多分、俺達と同じように自分の部屋に居るのだろう。リビングに居ないのは、好都合だ。

今度こそ扉を全部開けて、俺達はリビングに出た。ココでも、やはり足音を殺して歩を進める。姿が見えないとは言え、油断は禁物だ。何ていったって、相手は潜入のプロだからな。熟練した泥棒の如く、慎重に台所を目指す。

そして、極限の緊張感の中で、ついに俺達は台所にある冷蔵庫の前に辿り着いた。

よっしゃあ！ こうなったら、もうこっちのものだ！

目的地に到着した事で、少しテンションが上がった。

俺の背後に居るサードも、ホッと安堵の息を漏らした。

これで冷蔵庫から飲み物をゲットして、部屋に戻ればミッションコンプリートだ。

安心して、少し気を緩めた時だった。

ガチャッ、ボタン。

扉の開閉音が聞こえた。

ん？俺まだ冷蔵庫のドア開けてないぞ……？アレ？つか、今の音後ろから聞こえたような……。

その瞬間、猛烈に嫌な予感がして、心臓が高鳴り出した。

俺は気配なんて感じる程器用じゃないが、後ろに“何かある”と思った。サードとは別の“何か”……いや、“誰か”が居る。

俺は、まるで油の切れたロボットのような、鈍い動きで後ろを振り向いた。

視線の先には、ドゥーエが立っていた。しかも、バスタオルで髪を拭いてる最中で、身体の方には何にも纏ってない。ほぼ完全に、裸の状態なのだ。

「わ、ちよっ……!？」

生まれて初めて女の裸を直接見て、俺はあたふたした。顔の熱が急上昇して、心臓の鼓動もバクンバクン激しくなる。

対してドゥーエは、男の俺に裸を見られたつてのに、全く動じてない。それどころか、口元を吊り上げて、ニヤリと不気味な笑みを浮かべた。首にバスタオルをかけて、裸で一步ずつ歩み寄ってくる。

ちよっ……ちよつと……!？ ヤバい！ マジでヤバいつて……! 身の危険を感じた俺だが、すぐ後ろに冷蔵庫があつて退路が無い。逃げようにも逃げられなかった。

すると、サードが俺を庇うように前に出た。

「じゅ……隼樹には、指一本触れさせないわよ！」

サードとドゥーエが、真つ向から睨み合う。

数秒の沈黙の後、ドゥーエが動いた。素早くサードの身体に密着して、左手を下半身に伸ばす。

あつという間の動きに、サードは呆気に取られる。

「あつ!？」

「身を挺して他人を護ろうなんて……フッフ、可愛いわね」

動揺するサードに顔を近付け、ドゥーエは妖しく笑う。

それからドゥーエは、サードの下半身に伸ばした左手をスカートの中に潜り込ませた。

「えっ!？ ちよっ……やめっ……んあつ!？」

「フッフ。機械でも感じるのかしら？」

な、何やってんだよ、この人はアアアア！？

目の前で行われてる事に、俺は顔を真っ赤にさせて内心にシャウトした。

いやいやいや、コレはヤバ過ぎでしょ！？ 絶対にヤバいつて…

…！ だつて…あ、ああ、あんなトコ弄つて…！ うわあああ

…！！ わああああああ！ 無理無理っ！ コレ、完璧に18禁だよ！ この場じゃ、何にも描写出来ないアダルトな世界だから！

衝撃の光景を目にして、興奮して混乱する俺の前でドゥーエの責めは続く。もう、とにかく一方的に責めまくる。ドゥーエに激しく妖しい責めに、サードは身をよじらせて喘ぎ声を漏らしてる。

正直、コレくらいが限界だ。

しかしコレは、ホンットに…見てるこっちまで興奮する、ヤバい光景だ。

そして、俺の前でサードは果てた。

「あ……あ……んはあ……！」

ズルズルとドゥーエの身体からずり落ち、床に仰向けに崩れた。かなりヤバい状態だった。顔は赤く恍惚とした表情で、口の端から涎らしき液体を一筋垂らし、更には舌までだらしく突き出してる。天井の明かりを受けて、ピンク色の舌が綺麗に光って見える。着ている黒スーツは乱れ、散々弄られた身体はビクンビクンツと痙攣してる。

——エロオオオオオ！ サード、メチャクチャエロオオオオオ！
って言うか、何でロボットのサードが昇天してんの！？ おかし
くね？ いくらドラ●もんでも、昇天は……する、かもしれない…
…。っか、マジでエロいんだけど……！

絶頂して倒れたエロサードを眺めていたが、途中でハッと我に返った。

馬鹿馬鹿っ！ サードがやられたら、次は……！

俺は、恐る恐る顔を上げた。

倒れたサードの前に、ドS女・ドゥーエが立っていた。濡れた指先を舌で舐めて、妖艶な笑みを俺に向けてる。ゾクツと背筋に寒気が走って、俺は固まった。まるで、蛇に睨まれた蛙のように動けない。いや、例え動けたとしても、逃げられないだろう。

獲物の追い詰めた獣のように、ドゥーエはゆっくりと寄ってくる。勿論、裸のままだ。ドゥーエが寄ってくるにつれて、シャンプーの香りが濃くなる。

とうとうドゥーエは、俺の目前までやってきた。

「さあ、捕まえたわよ」

ドゥーエの蠱惑的な顔が間近に迫り、俺は緊張と興奮が混ざって、どうしたらいいか解らなくなってた。互いの顔が超至近距離にあつて、ドゥーエの吐息が当たる。

「フフ。私の裸を見た罰です。さあ、貴方はどんな声でナいてくれるのかしら？」

「いや……！ ドゥーエさん、ちょっと待って下さい……！」

「必死になって……可愛いわ」

ドゥーエは更に顔を近付け、俺の頬に狙いを定めた。

そして、濡れた舌で俺の頬をペロリツ、と味見するように舐めてきた。

——ヒイイイ！ 怖いけど、恐怖とは違った意味でドキドキする……！

俺の頬から口を放して、ドゥーエは妖しく舌なめずりをする。

「久々に楽しませてもらいますよ」

「あああああああああ！」

俺は、ありったけの声で叫んだ。

しかし、誰かが部屋に駆け付ける事もなく、ドゥーエの魔の手が止まる事もなかった。

俺は成す術もなく、ドゥーエの責めを受けた。

この時、ドゥーエからどんな目に遭わされたかは、俺から語る事は出来ない。ご想像にお任せする、とだけ言っておこう。

No.10 独りって寂しいじゃないか（前書き）

サード「『ナンバーズ〜魔法が使えない男リベンジ〜』始まるわよ。って、今回私の出番無いの!？」

No.10 独りって寂しいじゃないか

ドゥーエとの同居生活三日目。

初日のお仕置きから何とか生き延びた俺とサードは、部屋でグツタリとしている。もう何にもやる気が起きなくて、ベッドの上で横になって、ボーッと天井を眺めてるだけだ。

ドゥーエのお仕置きは、そりゃ凄かった。殺されなかっただけマシだけど、なかなか辛かったな。あの日から、もう夜は下手に部屋から出ないようにした。また風呂上がりのドゥーエと遭遇して、お仕置きされるのはちよつとキツイ。もう少しソフトなら、まあ、一方的に責められるのも悪くないかな、と思っってしまう俺って危ないかもな。

戻ってこい、普通の俺。

しかし、暇だな。ドゥーエは本局に出勤していて、部屋には居ない。脅威が去った事で、気が抜けて疲れた心を休めるけど、暇でもあるんだよな。

ああ、何か小腹も空いたな。ドゥーエからは、お腹が空いたら好きに食べていいって言われてるから、お言葉に甘えんとするか。

ベッドから体を起こして、俺は部屋を出る。サードは、ベッドで寝たままだ。

起こさないように静かにリビングに出た俺は、台所に向かった。

あちこち棚を開けて、食パンを見つけた。他の所も探してみたけど、残念な事に何も無かった。ドゥーエは、家ではあんまり食べないのかね？ 多分、本局の食堂とかで済ませてるんだろうな。まあ、いいや。

冷蔵庫の中を開けて、バターかジャムが無いか探す。だが残念な事に、バターやジャムは中身が空だった。買い替えようよ。ガツカリする俺は、何か代わりの物は無いか冷蔵庫の中を見回した。すると、ある物に目が止まった。ソレは、卵だった。

「卵と食パン……」

確か、この二つで何か作れたような気がする。んで、俺の好物でもあったような気がするんだよね。

うーん、と唸りながら考えた。

ふと俺は思い出す。

「ああ、そうだ。フレンチトーストだ」

アレ、甘くて美味いんだよね。昼飯の時に、よく食べたな。

「んじゃ、フレンチトーストにしてみつか」

そうと決まれば、早速作りますか。

でも、フレンチトーストって卵と食パンだけじゃないよな。確か、他にも砂糖と牛乳が必要だった気がする。さすがに、卵だけじゃあそこまで甘い味にならないからな。まず冷蔵庫で、牛乳を発見した。俺は再び台所の棚を開けて、今度は砂糖を探す。下の段の棚を開けて、並ぶ調味料の中に砂糖を見つけた。

これで材料は揃った。

ふと思っただが、ドウエって料理するのか？ 今日までの飯も全部レトルトだったけど、じゃあココにある調味料の意味は何？ うーん、解らん。まあ、いいや。考えるのも面倒だし、それより早くフレンチトースト作って食べたいし。

そんな訳で、俺はフレンチトースト作りを始めた。ちゃんと手は洗ったからね？

まずは確か、卵と砂糖と牛乳を混ぜるんだったな。アレ？ どれぐらい混ぜればいいんだっけ？ 実際に作った事無いから、細かい過程が解らん。まあ、何とかなるっしょ。しばらくかき混ぜた後で、

食パンを一切れボウルの中に入れた。裏表をかき混ぜた卵に浸して、フライパンに乗せる。火を点けて、浸した食パンを焼く。おおっ、段々良い匂いがしてきたぞ。お母さんが作ってくれたヤツと、似てる気がする。おっと、そろそろひっくり返してみるかな。フライ返しを使って、食パンをひっくり返した。

おおっ！ 黄色い表面に、焦げ目の付いた食パン！ コレだよ、コレ！ コレが、フレンチトーストだ！

久しぶりの料理に、テンションが上がる。料理をするなんて、中学の時の家庭科の授業以来だ。両面焼き終え、食パンを用意してた皿に移す。

焼き立てで、白い湯気を上らせてる。フレンチトーストの出来上がりだ。初めてにしては、なかなかの出来じゃないかと思う。ヤベツ、口の中に涎が溜まってきた。俺は猫舌だから、もうちっと冷ましたらいたたくとしますか。

そう思いながら、リビングのテーブルに皿を移した時だった。ガチャ、ボタン。

ドアを開閉する音が聞こえて、俺は動きが止まった。音は玄関の方から聞こえてきた。俺は、恐る恐る玄関に続く廊下に振り返った。「ちょっと時間が空いたので戻ってきたんですが、何か良い匂いがありますね」

リビングの入り口に、制服姿のドゥーエが立ってた。

おお、神よ。俺が一体何をしました？

美人なドゥーエだが、悪いが俺には鋭い鎌を携えた死神にしか見えない。だって、ドゥーエはスパイであると同時に暗殺者でもあるからね。凡人の俺を殺るなんて、赤子の手を捻るように簡単だよ。

恐ろしい想像を膨らませる俺に近付き、ドゥーエはテーブル上の皿に目を向けた。皿には、出来立てのフレンチトーストがある。

「コレは、何と言う料理ですか？」

「えっと、フレンチトーストって言います。俺の世界にある料理です」

そうですか、とドゥーエはフレンチトーストに視線を注いだまま
でいる。ミッドチルダにフレンチトーストが無いからか、興味を抱
いたようだ。

するとドゥーエは、俺に顔を向けて要求してきた。

「一口食べてもいいですか？」

「え、ええ、勿論。あつ、まだ熱いので気を付けて下さい」

ダメです、なんて断れる訳ないでしょ。その瞬間に八つ裂きにさ
れちゃうよ、俺。

「では、一口」

右手を伸ばして、フレンチトーストを掴んで口に運ぶ。熱いのも
構わず、一口食べ、咀嚼する。

この時、俺は物凄く緊張してた。まだ味見をしてないから、もし
不味くてドゥーエの機嫌を損ねたら、俺は殺されると不安になっ
たのだ。

「ど、どうですか……？」

心臓をドキドキさせながら、俺は味を尋ねた。ミスったら、打ち
首獄門だ。って、江戸時代か！

心中でツツコミつつ、俺は緊張した面でドゥーエの反応を伺う。
咀嚼を終え、ドゥーエは飲み込んだ。

「甘過ぎますね」

「えっ!？」

ドゥーエの感想を聞いた瞬間、俺の表情は凍り付いた。

——さ、砂糖の量を間違えたかアアアア!? ヤベー、ミスったアアア! ここ、殺されるウウウウ!

人生終わった、と俺は絶望した。

しかし、続くドゥーエの言葉は、俺の予想とは全く違った答えだった。

「ですが、美味しかったです」

「え……?」

続く意外な感想を耳にして、俺は半ば呆然となった。

ドゥーエが、顔をこっちに向けた。笑ってる顔には前のような妖艶さや怖さが無く、何て言うか、普通の微笑みだった。

「隼樹さん。もし良ければ、今夜も作ってくれませんか? 疲れた

時には、甘い物が一番と聞きますから」

「え? あっ、はい」

思わず返事をしちゃったが、どうやら死亡フラグは回避出来たようだ。

安心した俺は、小さく息を吐いた。今ほど生きてる、と実感した事はない。緊張の糸が解けていって、体中の力が一気に抜けていった。

そんな俺を見て、ドゥーエがクスクスと笑った。

「隼樹さんは、本当に可愛いわね」

「は？」

ドゥーエの言葉に、俺は怪訝な顔になる。

可愛い？ 俺が？ 顔はイケメンじゃないし、体つきだってそんな立派でもない、俺が可愛い？ 意味解らん。

俺が疑問に思ってる、ドゥーエが続けた。

「反応が一々正直なのよ、貴方。私がフレンチトーストを食べていたら、味の感想が気になってソワソワしていたり、今さっきも安堵して体の力が抜けたり、見ていて飽きないわ」

それは『可愛い』と言うより『面白い』では？ なんてツツコミは口が裂けても言えないので、胸の内にしまっておく。

「嘘やごまかすのが下手な正直者で、可愛いと言う事ですよ」

俺の心を読んだように、ドゥーエが言った。

「それに、追い詰められて怯える様子も可愛かったわ」

アンタ、ドSですからね。俺の反応見て、楽しむのも納得ですよ。まあ、何にせよ一つ解った。現段階では、ドゥーエは俺達を殺す気は無いって事だ。とりあえず、邪魔者とは思ってないみたいだから、命の危険は格段に減ったと考えていいだろう。それに、最初は凶器を使った脅しにビビって怖い人って印象だったけど、意外とドゥーエ良い人かもしれない。サディストだけど。

ドゥーエに対する印象が、俺の中で変わってきた。

「あつ、そろそろ戻らないといけませんね」

時計に目を向けて、ドゥーエは玄関に向かう。途中で足を止めて、見送りに来た俺に振り返った。

「それじゃあ、今夜楽しみにしてますから」

「は、はい」

「もし、美味しくなかったら覚悟しておいて下さいね？」

「え、っ!？」

ドゥーエの顔が、微笑みから悪魔のような笑みに変わった。

「そう、その反応よ！ それじゃあ行つてきます」

「い、行つてらっしゃい」

苦笑いで見送る俺を背に、ドゥーエは部屋を出ていった。

どうやら俺は、邪魔者ではなく、イジメ甲斐のある獲物と定められたようだ。命の危険は減ったが、危ない事に変わりはない。もし料理をしくつたら、ドSなドゥーエからどんな罰を受ける事になるか解らない。前みたいなら、エッチ系のヤツなら、まあ、いいかな。誤解の無いように言つとくが、俺は決して鞭でぶつ叩かれたり、蠟燭で炙られて感じるマゾではない。実際、そんな事はされなかったし、嫌だし。

エッチ系なら悪くはないけど、やっぱ女に一方的に責められるのって格好悪いよな。男の尊厳の為にも、美味しいフレンチトーストを作らねば！

俺は決意を固め、フレンチトーストの特訓を始める事にした。

*

「行つてきますか」

廊下を歩く私は、さつき部屋を出る時に言った言葉を呟いた。長い潜入任務で、あんな事を言ったのは今日が初めてでした。それも、姉妹でも何でもない赤の他人に、です。外見はパツとしませんし、頭も良くありませんし、何より臆病者です。良いところなんて、無しに等しい人間です。任務の邪魔になるだけ、としか思つてませんでした。

ですが、意外と面白くて可愛いところがありました。弄り甲斐があつて、さつきも出掛ける時についつい意地悪な事を言つてしまいました。

本当に、楽しいと思つてしまいました。

彼等と一緒に居るのも、悪くないと思つてしまいました。

二人を私の身内と認めてしまった、かもしれません。

そんな事を考えてる私の足取りは、自然と軽くなつていた。色々考えるのは、また今度にしましょう。

「今夜が楽しみだわ」

さつきの甘過ぎまるフレンチトーストの味を思い出しながら、私はマンションを出た。

家に帰るのが楽しみ、と思つたのも今日が初めてでした。

No.11 二人の異世界人と未来（前書き）

ドゥーエ『ナンバーズ』魔法が使えない男リベンジ』』始まり
ます。さて、今日はお二人をどう弄りましょうか？」

No.11 二人の異世界人と未来

ドゥーエとの同居生活七日目。

今日でドゥーエとの同居生活も終わる。思い返すと、一部を除いて割と普通の生活だったな。一緒にご飯食べて、休みの時は部屋でテレビ観たり、買い物に出掛けたり、極々普通のありふれた日常だよ。まあ、たまにちょい刺激的な事も、されたっちゃされたけどね。いやいや、悪いけど詳しい説明は出来ないな。ココじゃ描写出来ないから、教えるのは無理だ。

そんな感じで、俺とサードはドゥーエと平和平穏な日常を過ごしてきた。

最終日の今日も何事もなく、平和に過ごせると思った。けど、事に俺の思いはぶち壊された。

皆さん、事件です。

現場は、ミッドチルダの首都・クラナガン。

「ちょっと、何でアンタまで隼樹にくつついてるのよ……？」

「あら？ そんなの、私の自由でしょ？それに、隼樹さんだつて嫌がつてないみたいですし」

犯人は、サードとドゥーエの二人で、人質は塚本隼樹——つまり、俺です。両サイドに回られ、腕を絡めてきてガッチリと捕まっています。そりゃもう、女性だけの柔らかい膨らみが当たる程、ガッチリとです。

俺が周りを見渡すと、男共の目が痛いっす。敵意と嫉妬心剥き出しで、『何であんな地味男が、美人二人とくつついて歩いてんだよ？』って顔をしてる。

周りの視線を辛く思う俺の両サイドで、サードとドゥーエが睨み合ってる。そりゃもう、火花散らせる程です。俺が入り込む余地な

んで無いし、入り込む勇氣なんてありません。だって、俺ヘタレだから。女って、怖いんだよ。

何でこうなったのかと言うと、最後に皆で街に出掛けようとドゥーエが提案して、俺達は断れる訳もなく承諾したのだ。まあ、ぶっちゃけ断る理由も無いし、今までも何度か一緒に外出してたからな。そこまでは良かった。何の問題も無かったが、その後で異常事態が発生した。

着替えて外に出た途端、ドゥーエが腕を絡めてくっついてきたのだ。当然、俺はビックリしたよ。ドゥーエとピッタリくっついて、恥ずかしくて顔が赤くなった。俺と腕組みをしてるドゥーエは、全く気にした様子もなく、笑顔で「行きましよう」と言ってきた。まあドゥーエに限らず、魅力ランクが最下位に位置する俺如きと腕組みして、恥ずかしがるなんてあり得ないからな。俺はスゲー動揺して、興奮したけど。

しかし、事はドゥーエに腕組みされて終わりでは無かった。ドゥーエの行動を見て、何故かサードが顔を赤くして怒鳴ったのだ。どうしてサードが怒ってるのか分からなかったけど、多分、護衛と言う自分の役目で、ドゥーエから俺を護ろうとしたのだろう。でも、ドゥーエが思った程の危険人物じゃない事は、サードも解ってるハズなんだけどな。困惑する俺の前で口論したかと思えば、サードまで空いてる腕に絡み付いてきた。

んで、現在に至るって事だ。

ドゥーエと睨み合ってたサードが、視線を俺に向けた。

「隼樹。アンタも、嫌なら嫌ってハッキリ言った方がいいわよ」

「いや……はあ……。別に嫌って訳じゃ……」

「はあ!？」

俺の言葉を聞いたサードは、目を剥いて顔を近付けてきた。迫力と身長差もあって、超怖い。

「ふふふ。ホントに、隼樹さんは正直者ね」

ドゥーエ、笑ってないで助けて下さい。

「くう〜！」

サードは俺から顔を離して、またドゥーエを睨み付ける。

何となく分かった。要するに、ドゥーエはサードをからかっているのだ。サードって単純なところがあるから、ちよつとした事ですぐムキになる。ドゥーエにとっては、最高の弄り相手だろう。

まあ、サードをからかうのは別にいいけど、その為に俺を巻き込むのはやめてほしい。いや、腕組みは良いんだけど、状況が状況だからさ。こんな睨み合う状況じゃなきゃ、最高なんだけどな。

端から見たら羨ましいかもしれないけど、中心地に居る俺は、ちょいと複雑な心境なんだよ。何時サードが、本気で怒り爆発させるか分からないしさ。つか、コイツ本当にロボットか？ 今更だけど、スゲー人間っぽいんだけど。

まあ、とにかく、一触即発とはいかないが、ソレに似た状態で俺達は街を回った。ウインドシヨッピングしたり、ゲームセンターに入ったり、飲食店でご飯食べたりした。あつ、勿論サードはロボットだから、食事は出来なかったから。

二人と街を回ってる途中で、ふと俺は思った。

——コレって、デートっぽくね？

今まで意識してなかったけど、男女が腕組みして街を回るのって、世間一般じゃ『デート』って言うんだよね？

そう思った時、一気に緊張感が増してきた。少し落ち着いてきた心臓の鼓動が、更に加速してきた。夏でもないのに、顔が熱くてメチャクチャ汗かいてきた。

だってさ、普通の買い物とデートって別物じゃん！ いや、俺は

今までの人生でデートなんて体験した事無いけど、絶対違うつて！
だって、デートって思った途端に熱くなったもん！

汗拭きたいけど、両腕をガッチリ掴まれてるから、ハンカチを取り出す事が出来ない。しかも、二人共、力強いから余計に無理だった。ふと、警察に捕まった犯人ってこんな感じなのかな、と思った。街を歩き回った俺達は、公園で一休みする事にした。まあ、疲れてるのは主に俺だけだね。

空いてる椅子に座って、一息つく。青空を仰ぎながら、デートって楽しいだけじゃないんだなって思った。

「あゝ、すいません。ちょっとお手洗い行ってきます」

「ええ」

「早く戻ってきなさいよ」

一言断ってから、公園のトイレに行った。

ふーっ、女と付き合うのは楽じゃないんだな。あっちこっち振り回された感じで、何だかスゲー疲れた。世の彼氏達は、いつもこんな苦労してんのかな。今まで、カップルを見ては殺意を抱いてきたけど、ちよつと見方を変えるか。

そんな事を考えながら、俺は用を足してトイレを出た。

それと同時に、俺の平穩は終わりを告げた。

ハンカチで手を拭いて、ドゥー工達が座ってる椅子に向かう途中で、彼女と出会ってしまった。

「あれ？ 貴方……」

「え？」

俺の事？ と思いながら、横に振り向く。

ソコには、以前の地下騒動で最初に遭遇した局員——ギンガが居た。

今日は例のコスプレではなく、ちゃんとした茶色の制服を着ている。

「あ、っ……！」

俺も驚いて、顔を引きつらせた。

——俺、どんだけ運無^ねえんだよオオオオ！？

自分の不運に、俺は内心にシャウトした。

更に運が悪い事に、俺は地下騒動の時と全く同じ服装をしている。面倒くさがり屋な性格が、こんな所で仇になるとは。

最初こそ以外な展開に驚くギンガだったが、すぐに冷静さを取り戻して詰め寄ってきた。流石、捜査官。

「貴方、地下で会った人ですよね？」

「いや、人違いじゃ……」

「いいえ。その顔と服装は忘れません」

そそくさと立ち去ろうとしたが、腕をガシッと掴まれた。女の子とは思えない、物凄い握力だ。

ちよっ、痛い！ マジ痛い！ この娘^こ、本当に女の子！？ この世界の女の子は、ホンットどうなってるの！？ どっかの戦闘民族なの！？ 赤いリボンの組織の博士が作った、サイボーグ！？

ハッキリ言っつて、ヤバい事態だ。管理局に捕まったら、俺は犯罪者と言う事で、裁判で有罪判決受けて、完璧に人生終わる。

「地下騒動の重要参考人として、一緒に機動六課まで来てもらいます」

「あつ、いや、その……」

連行される俺は、チラッとドゥー工達の方を見た。

サードが何やら暴れていて、ドゥーエが抑えている。俺の異変に気付いて、サードは助けようとしてドゥーエが止めてる感じた。そりゃそうだよな。ドゥーエは潜入任務中なんだから、正体がバレるような事は避けたいハズだ。そう考えると、管理局側に捕まった俺を始末に出来る可能性もあるな。俺の口から、ナンバーズの情報が漏れる事を恐れてさ。

私の正体がバレるような事をしたり、任務の邪魔になるようでしたら……殺しますよ……？

ドゥーエに言われた警告が、俺の中で蘇る。
終わったな、と俺は絶望のドン底に落ちた。

*

ギンガに連行されて、俺は機動六課って部隊の建物にやってきた。局員は若い奴等ばかりで、明らかに俺より年下のガキまで居る。ソイツ等は、地下で会った例のコスプレ集団だ。今は、ギンガと同じく制服を着て仕事をしてる。

機動六課に連れてこられた俺は、早々に取り調べを受けた。相手は、地上で会った高町何とかってのとフェイト何たらって二人の女局員だ。取調室には、ギンガも同席してた。

結果から言って、俺は連中に何にも喋らなかった。所謂、黙秘つてヤツだ。嘘や隠し事が苦手な俺は、喋る事自体をやめた。え？何でナンバーズの事を、隠すのかって？ だってさ、連中に喋るって事は、ナンバーズを裏切るって事になるだろ？ どうせ喋ろうが黙ってしようが、その内、潜入と暗殺が得意なドゥーエに殺されるんだろうけど、ナンバーズの事は裏切りたくなかった。一応世話に

なったし、ガジェットは友達だし、サードも居るしさ。それに、どうせ俺の人生おしまいなんだから、ドゥーエに殺されるのも悪くない。でも、出来れば苦痛が無いように殺ってほしいな。

結局、最後まで口を割らなかつた俺は、牢屋に入れられた。無機質な冷たい壁が剥き出しで、ベッドと洗面台、机にトイレが備え付けられた一室だ。俺はベッドの上で、大の字になった。ナンバーズの皆やサードは、どうしてるかな？ いや、今は、もう何も考えたくない。何もする気にはなれない。

初めて見る天井を眺めて、俺は溜め息をついた。今の状況を一言で表すなら、転落だな。可愛い女の子とデートみたいな事して、浮かれた結果がこの様だ。何コレ？ もう笑っちゃうよね。正直、もうどうにでもなれって感じだよ。捕まった犯罪者ってのは、こんな気持ちなのかね？

ベッドで横になって数分。ウトウトしてきた時、音が耳に入ってきた。ガツンガツン、と足音のようだ。廊下に響く足音は、俺が居る牢屋に近付いてくる。

俺は上体を起こして、鉄格子の向こうの廊下を見た。

ソコに現れたのは、一人の男だった。黒髪で、年齢は二十代前半位で俺と同じか少し上だろう。端正な顔立ちで、制服を綺麗に着こなした姿はいかにもエリートと言った感じがする。但し、着ている制服は機動六課の連中と違って、色が青い。

牢屋の前にやってきた男は、ニッコリと俺に笑顔を向けた。

「貴方が、地下騒動の重要参考人ですか？」

「そうですね……？」

何なんだ、コイツ？ 他の局員と何か、雰囲気が違う。

「ああ、自己紹介がまだでした。私、時空管理局本局から参りました、藤堂一也と言う者です。以後お見知りおきを」

変わらず笑顔で名乗る男——一也を俺は不審に思った。他の連中とは、やっぱり何かが違う。態度とか雰囲気とか、そう言う事じゃなくて、もっと明確な違いがあるような気がする。

笑顔を絶やさず、一也是言う。

「ふふ。何やら意地を張って、黙秘をしてるみたいですが、無駄な事ですよ。貴方が黙っているところで、彼女達の運命は変わらないのですから」

「え……？」

一也の言葉に、俺は僅かに動揺した。
今、コイツ何て言った？ 彼女達の運命は変わらない、だって？
どういう事だ？

「どういう事だ？ と言う顔をしていますね。信じられないかもしれませんが、私には解るんですよ……この世界の未来が、ね……！」
「この世界の未来……？ まさか……」

超能力者じゃあるまいし、そんな事解る訳がない。
疑いの目を向ける俺に、一也は衝撃の内容を語り出した。

「ええ。実は、私も貴方と同じなんですよ」

「俺と同じ？」

「はい。私も、別の世界からミッドチルダにやってきた異世界人なんです！」

「なっ……！？」

俺は驚きを隠せなかった。一也が同じ異世界人って事もそうだが、何より俺の正体を知ってる事の方が驚きだった。俺が次元漂流者だ

って事は、スカリエッティとナンバーズしか知らない事実のハズ。
ソレを知ってるコイツは、何者なんだ？

俺の動揺に構わず、一也は続ける。

「最初に言っておきます。貴方も地球の日本出身でしょうが、私と貴方が居た世界は違います。その証拠に、貴方はこの世界を知らない。しかし、私は知っている。

何故なら、私の世界では“この世界はアニメとして放送されていた”んですから……！」

「ア、アニメ？」

何を言うかと思えば、コイツ頭大丈夫か？

俺が怪訝そうに眉根を寄せるが、一也は全く気にした様子はない。

「とは言っても、私はこの世界がアニメの世界だなんて思ってたません。私の知るアニメに近い、パラルワールドだと考えています。

まあ、信じられないのも無理はありません。ですが、事実です。何なら、この先の出来事を特別にお教えしましょう」

一也は、まるで講義する教師のような振る舞いで、未来を語り出す。

「この後、地上本部では公開意見陳述会と言うモノが行われます。その時を狙って、スカリエッティ一味は地上本部とココ——機動六課を襲撃します。襲撃は成功し、管理局に手痛いダメージを与えます。まあ、悪党側もそれなりに活躍しなければ、盛り上がりませんからね。

そして後日、スカリエッティ一味は強大な古代兵器を復活させて地上制圧に動きます。ですが、連中の好調もここまでです。リミッターを外し、本来の実力を発揮した機動六課に敗れ、全員捕まって

しまいます。古代兵器も破壊され、完敗です！

いや、なかなか面白い作品でしたよ。自分達が戦ってる相手の黒幕が、自分達が属してる組織のトップなのですから、滑稽以外の何物でもない……！　ククク」

得意顔で語った一也の内容は、にわかには信じ難かった。だが、自信満々の一也の様子から、妙な説得力を感じた。一也の話には、頷ける部分もあった。最後の方の黒幕の事だけど、スカリエッティのバックに居るのが巨大組織のリーダーなら、あれだけの研究施設の資金の出所も納得がいく。黒幕から援助を受けてたんだな。

「そうそう。貴方が異世界人と解ったのも、根拠はアニメを観た事にあるんですよ。作品の中には、貴方は出てこなかった。つまり、私と同じイレギュラーな存在と言う事になるんです」

マジかよ、と俺は驚くしかなかった。

コレはもう間違いない。この一也って男は、この世界の事を全部知ってる。俺の正体を見抜いた事が、その証拠だ。

「ご理解して頂けましたか？　貴方が喋らなくとも、結果は変わらないのです。歴史は、定められた通りに動く。どうせ彼女達は戦いに敗れ、一人残らず捕まってしまうのですから」

それから一也は、思い出したように“とんでもない事”を話した。

「ああ、『全員逮捕』は間違いでした。確か、一人死んでましたね」「え……？」

嫌な言葉を耳にして、俺は顔をしかめた。

「死んだのは……確か、二番目の戦闘機人でしたね」
「なっ!？」

番号を聞いた瞬間、心臓が跳ね上がった。胸が締め付けられるように苦しくなつて、冷静さが失われていく。

——ドゥーエ……? ドゥーエが死ぬ……?
激しく動揺する俺の前で、一也は続けた。

「自分達を利用していた黒幕を殺した後、用済みの男を殺し、目の前に居たその男の友人の逆鱗に触れて殺されてしまいました。いやはや、殺しとは恐ろしいモノですね。ククク」

一也の笑いは、まるでドゥーエの死を嘲笑ってるようだった。

その時、俺は心中に不快感が広まった。拳を固く握り、目を鋭くして笑う一也を睨みつける。

俺の睨みに気付いて、一也は笑いを止めて、両手を上げた。

「おお、怖い怖い。そう睨まないで下さい。気に障ったのなら、謝ります」

頭を下げる一也だが、謝罪の気持ちは一欠片も無いだろう。何となく、態度で解る。多分、相手も解ってるのを承知してるんだろうな。ソレが余計に腹立たしい。

あ? 俺、何でコイツに腹立ててんだ?

少し熱くなった頭に、ふと一つの疑問が浮かんだ。

「では、私はこれで失礼します。自分の身を一番に考えるのなら、素直に話す事をお勧めしますよ」

そう言い残して、一也は去っていった。

アイツが居なくなっただ後も、胸の内がスッキリしない。

脳裏に浮かぶのは、ナンバーズとサード、それにガジェットの姿だ。

一也の話じゃ、アイツ等は悪人って設定らしいけど、そんな悪い奴じゃないと思うんだよな。いや、寧ろ良い奴に思える。短い間だったけど、こんなどうしようもないダメ人間を受け入れてくれたり、根性叩き直すとか言って訓練に参加させてくれたり、なんかかんで世話焼いてくれたんだよな。ガジェットも、何故か懐いてきたしさ。悪い奴等じゃない、寧ろ良い奴等だと思っし、一緒に居ると――楽しい。

思い返してみると、アイツ等と一緒に居た時って、結構楽しかったな。

そんな楽しい時間を俺にくれたアイツ等が、犯罪者として捕まろうとしてる。

しかも、ドゥーエは死んじまう。

「ふざけんな……！」

俺の気持ちは、自分でも気付かない内に声となって出た。

アイツ等の事よく知りもしないで、凶悪犯扱いして捕まえる？

「さげんなっ！ 犯罪者の事なんか知った事じゃない？ だったら、俺だって管理局テメラの事なんか知るか！」

そこで俺は、ハッと気付く。

「そうだよ……。元と言えば、管理局のトップのせいじゃねーか！」

一也が言ってたじゃねーか。自分達の属してる組織のトップが、事件の黒幕だって――。

あ？ 待てよ？ って事は管理局は、テメー等の組織の不祥事は

隠して、ナンバーズだけ捕まえて事件解決って事にしたのか？
そのうなのか？

そう考えると、腹の底から熱い怒りが込み上げてきた。
ふざけんなよ、クソ野郎ども！ 責任回避してんじゃねーよ！
俺はベッドから立ち上がり、鉄格子を掴んで叫んだ。

「すみません！ 誰か来てくれませんか！？」

ぶちまけてやる！ 一也から聞いた情報を、全部機動六課の連中
にバラしてやる！

ナンバーズだけを犯罪者にするなんざ、許さない！ 許してたま
るかっ……！！

「どうかしましたか？」

やってきたのは、俺を捕まえて連行したギンガだった。
俺は真相を話すべく、口を開いて、

「あの……！！」

すぐに言葉を止めた。

「何ですか？」

牢屋の外では、ギンガが俺の言葉を待ってる。
けど、俺は言えなかった。

自分の行為の無意味さに、気付いちまったんだ。

——話してどうなる……？

鉄格子を握ったまま、俺は顔を伏せた。

——話して…… 真実を訴えて……！！ そんな事したって、何も変

わらない……！ 変わらないんだよっ……！
自分の無力さに歯噛みしながら俺は、その場でうなだれた。

No.11 二人の異世界人と未来（後書き）

動き始める運命

歴史と言う強大な力に、凡人・隼樹が立ち向かう！

次回『運命への反逆と炎の救出劇』

No.12 運命への反逆と炎の救出劇（前書き）

デイド「一人の男から未来を聞かされ、彼は怒りを憶えた。他人の為に怒るのは、初めてだった。そして彼——隼樹兄様は、運命に挑むのです。『ナンバーズ』魔法が使えない男リベンジ！』始まります」

No.12 運命への反逆と炎の救出劇

あの藤堂一也とか言う奴が居なくなってから、俺は牢屋ですっと考え込んでる。

確かに、奴の言う通り、自分の身の安全を一番に考えたら、ナンバーズに関する情報を管理局に渡すのが利口だ。けど、俺はソレをやらない。ソレだけは、絶対にやらない。アイツ等は、俺に充実した日くれた恩人みたいなもんだ。そんなアイツ等売るような事は、絶対にやらない。それに、アイツ等が居なくなったら、また俺は独りになっちまうしな。

理由は何であれ、とにかく管理局への情報提供は無しだ。

それよりも、どうやって黒幕の連中を潰すかだ。

仮に、俺が機動六課^{ゴク}の連中に真実を話して、捜査が始まったとしても……上層部^{ウエ}の連中が組織の威厳や沽券^{コウセン}にかかわるだとか、何とかぬかして……逮捕されても表沙汰にならないで、闇に葬られるのがオチだ……。組織つてのは、そういう根回しをするからな。俺の世界でも、社員が起こした不祥事を隠蔽しようとした会社が、幾つもあった。

そんな汚いやり方で、テメエ等間抜け共の責任回避されてたまるかっ……！

怒りに歯を食いしばって、床の一点を睨むように見つめる。

俺の証言だけじゃ駄目だ。そもそも犯罪者扱いの俺の言葉なんか、信じてもらえない可能性がある。何か、無いか？ もっと決定的な

……壊滅的なダメージを与える方法……！

どうしたらいい……？ どうしたら……？

普段使わない頭を使って、俺は必死に考える。真っ向から戦ったら、一也が言ってた通りに負ける可能性がある。いや、可能性があるじゃなくて、確実に負けるな。冷静になって常識で考えれば、たかが犯罪一味が複数の世界を管理してる超巨大組織に敵う道理なん

が無い。スカリエツティが所有してる切り札の古代兵器が、どんな凄惨な代物か知らないけど、それでも圧倒的に戦力、兵力が違う。小学生でも解りそうな差だ。

なら、力勝負は駄目だ。別の方法で、管理局を倒すんだ。いや、巨大組織を倒すなんて、絶対に無理だ。なら、せめて組織のトップに居る黒幕の連中だけでも潰す方法は無いか？ 何でもいい……何でもいいんだ……！

額に組んだ両手を当て、目を硬く瞑った苦渋の顔で俺は考える。そうしてる間にも、一分、二分と時間は止まる事なく無情に過ぎていく。

その時、テレビニュースの光景が、俺の脳裏を過った。同時に、逆転の方法が俺の中で閃く。勝ちへの突破口が見えた。

——いける……！ これなら倒せるかもしれない……黒幕の連中をつ……！

僅かな勝利の可能性を見出だして、俺は自然と拳を固く握った。だが、連中を完全にぶっ潰すには俺一人じゃ無理だ。俺以外にも、それなりの数と準備が必要になる。何より、こんな所に閉じ込められてちゃ話にもならない。

苦々しい顔で、牢屋の中を見回す。犯罪者の魔導師を入れる事を考えて設計されてるのか、かなり頑丈な作りになってる。魔法どころか、筋力も並な俺じゃ破る事は出来そうにない。窓は見当たらないし、出入口は固い鉄格子に付いてる扉だけだ。仮に、何らかの方法で牢屋から出れたとしても、ココは局員がウジャウジャ居る所だ。魔法が使えない俺は、すぐに見つかって捕まるのがオチだろうな。つまり、脱獄は不可能って事だ。

いや、でも全く可能性が無いって訳でもない。一也の奴が言ってたが、公開意見何とかが地上本部って所でやるらしい。もしも、機動六課の連中が、その警備とかに出向くとしたら、一時的にココは手薄になるって事になる。脱獄するには、千載一遇のチャンスだ。そうなったら、その時を逃す手は無い。公開意見とやらが、

いつ開かれるのか分からないけど、今の内に牢屋を出る方法を考えておいた方がいいかもしれない。ココから出る事が出来れば、ナンバーズの未来を変えられるかもしれないからな。

俺は脱獄の方法を考えたが、ロクな案すら思い浮かばなかった。

*

機動六課の牢屋に入れられて、数日が経った。

いつドゥーエに口封じされるか、冷や冷やしながら過ごしてたが、今日まで彼女が殺しに来る事は無かった。

もしかしたら、俺が口を割っていないから様子を見ているのかもしれない。そうでなければ、俺の油断を誘ってブスツと殺りに来るのかもしれない。うん、後者かな。

どっちにしろ、そう長く時間はかけられない。公開意見までに、脱獄計画を練らねば俺やナンバーズに平穏な未来はない。

——マ●ケルウウウ！俺に脱獄の力をオオオオオ！プリズン・ブレイクさせて下さアアアアアい！

脱獄の神に祈りを捧げるが、全く名案が浮かばない。ふざけてるように見えるけど、マジだからね。それでも真面目にやって、悩んでるから。

苛々が募ってきて、頭をグシャグシャと掻きまくる。伸びた髪の毛が、乱れたが気にしない。そんな事を気にしてるより、脱獄計画を練る方が大事だ。

気を取り直して、考えに集中しようとした時、ふと外が騒がしい事に気付いた。軽く舌打ちして、壁を睨む。

「んだよ。人が真剣に考え事してるって時に……」

マジうぜー、と思った。人が考え事してる時は、静かにしろって教わらなかったのか？ ただでさえ、脱獄計画が立たなくて苛々してるってのに、迷惑な事だ。

外の騒ぎに更に機嫌を悪くすると、牢屋に一人の局員がやってきた。

「あの、ちょっといいですか？」

フェイト・Ｔ・ハラオウン。『エース・オブ・エース』として名高い高町なのはと並ぶ、超が付く程の優秀な魔導師だ。この世界がマジでアニメと似た世界なら、ヒロインは彼女だろうね。

そんなエリート魔導師様が、わざわざ俺の所にやってきたのだ。話があるらしく、手錠をかけられた状態で取調室に連れてこられた。他には誰も居ない。二人つきりだ。

改めて見ると、このフェイトって女も結構レベル高いんだよね。勿論、女の魅力的な意味で。今更だが、密室で美少女と二人つきりと言う状況に、緊張してきた。そわそわして、落ち着かない。

「どうしても、スカリエッティに関する事を教えてくれませんか？」

またか、と俺は少々ウンザリとした。でも、相手も仕事でやってんだよね。まあ、口を割らない俺が悪いんだし、とつと喋っちまえば楽なんだけど、意地でも喋らないぞ。折角、黒幕を潰す策を思い付いたんだから、今更諦める訳にはいかない。そうじゃなくても、話さないけどね。

「すみません。話せません」

今までと同じような返事をして、俺は口を閉ざした。もう話す事は無い、と態度で示す。

「そうですか」

俺の答えを聞くと、フエイトは険しい顔になった。何か、感情を押し殺してるようで怖いんだけど。

用が済んだら、早く俺を解放してくれ。

しかし、フエイトの話はまだ終わりじゃなかった。

「それじゃあ、コレだけでも教えて下さい。どうして貴方は、そこまでしてスカリエッティを庇うんですか？」

「え？」

おーい、キミちよつと勘違いしてるよ？ 俺は別に、スカリエッティを庇ってる訳じゃない。ナンバーズを裏切らない為に、黙ってるんだよ。スカリエッティは、オマケかな。

「スカリエッティは、多くの違法研究をしてきた広域指名手配されてる重犯罪者です！ どうして犯罪者であるスカリエッティを庇うんですか！？」

「いや、それは……」

こ、怖エエエエ！

ま、また急に荒い様子になったよ。いや、情報を吐かない奴にイラつくってのは不思議じゃないんだけど、何故かフエイトだけなんだよな。俺の取り調べで、いつも感情的になって声とか荒くなるんだよ。他の局員は普通なのに、何でだ？ いや、ギンガって娘もフエイト程じゃないけど、妙に熱くなるんだよな。絶対普通じゃないよ。スカリエッティと、個人的な因縁か何かあるのか？ もしそうなら、捜査に私情は持ち込まないでよ。つか、そういう人って普通、捜査から外されるんじゃないの？

ああ、もう面倒くせーな。でも、下手な事言つと殺されそうだな。

「私は許せない……！ 自分勝手な欲望で、人の命や運命を弄ぶあの男を私は許せない！ 貴方は、そんな男を庇つてるんですよ！？」

フェイトの迫力が、更に増して取調室に声が響く。廊下まで届いてるんじゃないか？ って思える程の声に、俺は圧倒された。

まあ、フェイトの言ってる事は正しいと思うよ。その異常な感情爆発の理由は解らないけど、スカリエッティが犯罪者で、許せないってのは正しいよ。ソコは、間違い無い。俺はよく知らないけど、アイツは悪事を沢山してきたんだろうから、逮捕されても仕方ないけど、悪いけど話せない。今、アンタ等に話しても意味ないんだ。本当の解決にならない。

「その……貴女の言ってる事は解ります……。スカリエッティは犯罪者だから、捕まえるべきだって……」

「だったら……！」

「でも！ それでも、言えないんです……！ 貴女に譲れないモノがあるように、俺にも譲れないモノがあるんです……！」

フェイトの言葉を遮って、俺は今の気持ちを精一杯伝えた。

「すみません」

最後に俺は、頭を下げた。

いや、決意を貫き通す為とは言え、何か悪い事しちゃった気分になったから。フェイトだって、純粹に事件解決の為に、こうして捜査してる訳だしさ。まあ、ちょっと怖いけどな。

「いえ……私の方こそ、声を荒げたりしてすみませんでした」

冷静に戻ったフェイトも、謝ってきた。

最後は気まずい空気になって、取り調べは終わった。

それにしても、フェイトのスカリエッティに対する異様な執着心みたいなのは、何だったんだ？　ちよつと気になるな。もし、アジトに戻れたら、直接スカリエッティに訊いてみるか。

ココから出れて、覚えてたらの話だけだな。

*

牢屋に戻った俺は、頭を抱えていた。

なんと、例の公開意見をやる日が、今日なのだ。牢屋に戻される時に、フェイトから聞いたんだ。どおりで外が騒がしいと思ったら、局員が地上本部とやらの警備をする準備をしてたんだな。

今日が公開意見の日だと知って、俺は頭を悩めた。機動六課も地上本部の警備に向かう、この絶好のチャンスを逃す訳にはいかない。しかし、脱獄を実行したいが、肝心の脱獄方法をまだ考えてない。公開意見だって、ずっとやってる訳じゃない。長くても一日で終わるだろう。猶予は、長くても一日だ。その間に脱獄方法を考えて、実行しなければならぬ厳しい状況なのだ。

ヤバイ、ヤバイぞ。早く脱獄手段を思い付かないと、手遅れになっちまう。

改めて牢屋の中を見回すが、隙と呼べる箇所は無い。大袈裟かもしれないが、非力な俺から見たら鉄壁だ。ちよつとやそつとの事じや、破れそうにない。ああ、ダメだ。素人の俺が、脱獄なんて大それた事出来る訳がないんだ。ヤベツ、ネガティブ思考が邪魔して、全然集中出来ねえ！

俺は悶えるように、頭をガジガジと掻いた。髪の毛は、更に乱れた。

その時だった。

突然、大きな音と共に牢屋が揺れた。

「おわっ！ な、何だ！？」

ビビった俺は、慌てて室内を見回す。

そしたら、廊下から煙が漂ってきた。しかも、何だか焦げ臭い匂いまでして、室内が異様な熱さに包まれる。

「オイッ！ コレ、火事じゃないか！？」

閉じ込められてる俺は、どうする事も出来ずにオロオロとしてた。

——どうするよ、コレ？ どうすんのよ、コレ！？ こんな時に、何で火事なんか起こってんだよ！？

恐怖でパニックになる俺の所まで、火の手が迫ってた。このままじゃ、焼け死ぬか窒息死だ。って、どっちにしたって死ぬんじゃない！

「ふっざけんな！ 絶対死なねーぞ！ 死んでたまるか！」

怒りに任せて、俺は鉄格子を蹴ろうと勢いをつけ、右足を振り上げた。

次の瞬間、鉄格子がバラバラになって崩れた。

「はあ！？」

不可解な現象に驚いて、俺は目を丸くした。

急に動きを止めようとしたから、バランスを崩して床に倒れてしまっ

「いつて〜!」

地味に呟いて、痛みに顔を歪める。

「隼樹!」

上から聞き覚えのある声が降りかかり、俺は顔を上げた。
ソコには、黒のワンピース姿のサードが立ってた。スカートの丈が短くて、中が見えそうだ。

「サード!?!」

「隼樹! ああ、良かった! 無事だったのね!」
「わっ!」

驚く俺を、サードは抱きしめた。

——いや、嬉しいのはいいんだけど、その、アレが当たってヤバ
い! 密着して、む、胸が押し付けられる形で……!

それよりも、何でサードがこんな所に居るのか訊こう。

「ちよっ……サード! 何で、こんな所に……?」

「何でって……アンタを助けに来たに、決まってるでしょ!」

「お、俺を助けに?」

「そうよ。六課を襲撃して、アンタを救出しに来たのよ!」

俺から離れて、大きな胸を張るサード。

正直、物凄く嬉しかった。口封じされる事ばかり考えてたから、
余計に嬉しいわ。

ん? 六課を襲撃?

「じゃあ、この火事は……」

「六課隊舎を襲撃した時に炎上したのよ」

「んな無茶苦茶な！ アン……アンタ、下手したら俺脱獄どころか死んでたよ！？」

「男が細かい事、気にするんじゃないわよ」

「いや、細かいくないでしょ！」

なんつー無茶苦茶な事するんだ、この女は！ 助けに来たのか、殺しに来たのか判らんわ。あーあ、さっきの感動が台無しだよ。

複雑な心境を抱いた時、ふとサードの後ろに人が居る事に気付いた。女の子で、髪は茶色で長く、頭には力チューシャを付け、見覚えのあるボディスーツを着てる。

「サード。その人って……」

「ん？ ああ、コイツね」

サードは横に移って、俺に女の子を見せた。

「ナンバーズのNo.12、デイドよ。アンタが捕まってる間に、動き出した新しいナンバーズ」

「デイドです。無事で良かったです、隼樹兄様」

丁寧にお辞儀をするデイドの両手には、ビームサーベルみたいな武器が握られてた。どうやら、鉄格子を斬ったのは、この娘このようだ。

それよりも、俺はデイドの言葉が引つ掛かった。

「は、初めまして。塚本隼樹です。あの……ところで、何で『隼樹兄様』？ 別に兄妹、じゃないですよね？」

「私にとっては、兄のような存在です。お会いできて嬉しいです」

「あ、そ、そう?。」

な、何だよ。照れるじゃないか。ただ、嬉しいと言ってる割には、あんまり表情が変化してないね。真顔だね。まあ、いいけどさ。すると、何故かサードが少し不機嫌な様子で言った。

「ホラッ、さつさと外に出るわよ！ 建物の中に居たら、私達とはもかくアンタが焼け死んじやうでしょ！」

「いや、元はと言えばアンタらが……」

しょうもない言い争いをしながら、俺達は建物の外に出た。外に出て、俺は愕然とした。中からは分からなかったけど、外から見て建物は酷い有り様だった。一言で表すなら、『地獄絵図』が正しいだろう。建物は半壊して、大小の瓦礫が転がっていて、オレンジ色の炎が燃え上がってる。更に、外には傷だらけで倒れてる二つの影があった。一つは金髪の若い女性で、全体的に緑色の服を着てる。もう一つは、毛並みが青い大型な狼だ。一人と一匹は、あちこちに負った傷から血を流して地面に倒れてる。

「コレ……やり過ぎだろう……」

燃える建物を眺めて、呆然と呟いた。一応、死人は出ないように配慮してるようだが、コレは明らかにやり過ぎだ。

けど、俺を助ける目的もあってやった事らしいから、俺は他に何も言えなかった。

外には、もう一人新しいナンバーズが居た。No.8で、名前はオットーと言い、ジャケットを着た茶髪の男の子だ。

「撤退します。隼樹兄様、ガジェット?型に乗って下さい」
「あ、ああ」

デイドに促されて、地上で待機してるガジェット？型に乗ろうとした時だった。

「機動六課襲撃……私の言った通りになったでしょう？」

声が聞こえて、俺は振り返った。

一同の視線が集まる先に、一人の男が居た。

藤堂一也。ふじどう いちや俺と同じく、別の世界からミッドチルダにやってきた人間だ。

局員の制服を着てる一也を見て、デイド達が武器を構えた。すると一也は、両手を上げて無防備である事を示す。

「待つて下さい。私は別に、貴方達を捕まえに来た訳ではありません。魔導師でない私では、戦闘する事すら出来ませんからね」

「それなら、何をしに来た？」警戒心を剥き出しで、デイドが尋ねた。

「なに、貴女達の友達の隼樹君に別れの挨拶をと思ひましてね」

一也を見て、俺は少し寒気がした。

燃え盛る隊舎、倒れてる仲間の横で、一也は笑っていた。初めて牢屋で会った時と、同じ笑顔だ。

俺は無言で、一也を睨むように見据えた。数秒の沈黙の後、俺は歩み出した。

「隼樹！」

「隼樹兄様！」

「大丈夫。話をするだけだから」

心配してくれるサードに言うてから、俺は一也に近づいていった。

ちよつと警戒して、二、三メートル間隔を空けた位置で足を止めた。

俺と向かい合つて、一也は小さく笑い出した。

「ククク！ ピタリ、私の言った通りになつたでしょう。まあ、本来ならナンバーズが回収するのは聖王の器だつたのですが、ソレが貴方に変わった。以前の地下騒動で、貴方が先に聖王の器を回収してしまつたからです。

しかし、そんなのは大した問題ではない。結局のところ、流れは、歴史は何も変わらない！ 聖王の器は、どっち道スカリエッティの手に一度渡るのですから。

そして、次の最終決戦で時空管理局の前に敗れる……！ 完璧なシナリオだ！」

「アンタ、何が目的なんですか……？」

コイツの長つたらい話なんて、心底どうでもよかつた。

そんな事より、コイツが何を企てるかが気になる。時空管理局に属してるみたいだが、どう見ても正義の為に働く善良な局員とは思えない。寧ろ、腹に一物抱えてそうだ。

俺が質問すると、一也は笑顔を絶やさず答えた。

「なに、単純な事です。私の望みは、貴方達が時空管理局に敗れ、逮捕される事です。

今後の私の計画に、貴方達社会のゴミ共は邪魔なんです」

『社会のゴミ』と言う言葉に腹を立てるも、我慢して二度目の質問をする。

「アンタの計画って、何ですか？」

「さすがに、そこまで教える事は出来ません。それに、これから捕

まる貴方に教えたところで、意味なんてありませんから」

コイツの笑顔は、他人の神経を逆撫でする感じだな。イケメンなんか、皆死ねばいいのに。

ああ、ムカつく！ コイツ、久々にマジでムカつく！

「じゃあ潰しますよ」

「え？」

余裕綽々してる一也に、ガツンツと言ってやる。

「俺が、アンタを潰しますよ！ ナンバーズを勝たせて！」

俺の言葉を聞いて、一也は口を開けてポカンとなった。

ややあつて、一也は笑い出した。

「ククク。何を言うかと思えば……！ そんなのは不可能ですよ！ そうならないよう、運命は決まってるんです」

「いいや、勝たせます！ アンタみたいな小物に負ける訳には、いきませんからね！」

「何……？」

おっと、今の言葉が気に障ったみたいだな。目付きが変わって、初めて顔から笑顔が消えたぞ。

プライド高そうだからな、ちょっと刺激したら、かかりやがった。

「だって、そうじゃないですか？ アンタ自身が何かした訳でもないのに、大物ぶって、正直格好悪いですよ？ これじゃあ、小物と言われても仕方ないですよ」

相手を刺激させる言葉を選びながら、目の前の一也に悪口を言う。眉根にシワを寄せて、一也は不愉快な様子になってる。もう一押しだな。

「あ、もしかして……俺に負けるのが怖いんですか？ だから自分で動こうとしないんだ。社会のゴミ如きに負けたら、一生の恥ですもんね」

喋ってる内に、何か段々熱くなってきたな。妙にテンションも上がってきた。相手を挑発するのって、何か楽しいな。

おっ、一也の奴、言いたい放題言われて、悔しそうに歯を食いしばってるぞ。睨みを利かせながら、一也が近付いてきた。

正直怖いけど、ここで怯む訳にはいかない。小さな勇気を振り絞って、睨み返す。

間の距離は縮まり、顔が近いほぼ零距离で睨み合う。

睨んでくる一也に、俺は不敵に笑ってやった。

「そうですよ……！ 悔しかったら来いよ、藤堂っ……！」

No.13 一度喧嘩を売ったら引き返せない(前書き)

オットー「僕達の世界にやってきた、二人のイレギュラー。一人は自分の野望の為に、一人は自分と自分以外の人達の未来の為に、衝突する。『ナンバーズ』魔法が使えない男リベンジ!』始まります」

No.13 一度喧嘩を売ったら引き返せない

この隼樹とか言う奴、とんだ大馬鹿だ。

お前みたいなアリンコ一匹で、どうにかなる問題じゃないんだよ。俺がこの世界にやってきたのは、もう七年前になる。ロストログアの影響で、ミッドチルダにやってきた俺は、時空管理局に保護された。最初は非現実的で不可思議な現象に、面食らって混乱したが、以前に学校の連中から聞かされた話を思い出した。俺のクラスに居た『オタク』が、聞きたくもないのに、しつこくあるアニメの話をしてきた。深夜にやっていた『リリカルなのは』とか言う、理解に苦しむ作品だ。何度もしつこく話してきたから、嫌でも内容を覚えてしまった。

だが、まさか、この時に聞いた話が役に立つとは思ってもみなかった。時空管理局とは、そのアニメに登場する組織なのだ。信じ難い事態に陥った俺は、事実を確認する為に独自に調査をする事を決めた。まずは、時空管理局に入局して、職と寝床を確保した。それから、管理局のデータベースにアクセスして、過去に起こった事件を片っ端から調べた。すると、そこには驚きの結果が記録されていた。ジュエルシードと言うロストログアを巡った『P・T事件』、長年に渡って管理局が捜査してきた『闇の書事件』と二大事件が地球で起こっていたのだ。しかも、事件を解決したのは、まだ小学校低学年の女の子と言うのだ。事件の詳細を見ても、全てカスオタクから半ば無理矢理聞かされたアニメの内容と一致していた。

その時、俺は確信した。この世界の流れは、図らずも俺が得てしまったアニメの内容と同じ運命である事を――。

同時に、俺の中で一つの野望が生まれた。第三期では、時空管理局のトップである最高評議会が元凶である『J・S事件』が発生する。その事件で、『戦闘機人』や『生命操作技術』等の魔法とはかけ離れた科学技術が登場する。未来を知る俺は、ソレ等の技術を奪

う事を計画した。最高評議會を始末して、邪魔なスカリエッティ共も逮捕して、連中の技術を奪い、事件のほとぼりが冷めた頃に俺が使うのだ。しかし、派手な事はしない。馬鹿な奴は、派手な事をしたがるが、俺は違う。そんな事をしても、手掛かりを残したりして自分の首を締めるだけだ。裏で暗躍し、行動範囲は狭く極一部に絞る。

そうして俺は、徐々にだが、確実に富、名声、権力、力を得るのだ。最高評議會の始末やスカリエッティの逮捕は、俺が動かずとも機動六課や他の局員が勝手にやってくれる。俺は、ただソレを眺めていればいい。下手に介入せず、傍観して、事件が解決した後でスカリエッティの技術を手に入ればいいのだ。

そう。運命は決まっているし、俺の計画は狂わない。現に、地下騒動と機動六課襲撃が実現している。

俺は、目の前で睨んでくる隼樹を睨み返す。

だと言うのに、この馬鹿は変えられると思ってる。決まった運命を――。

馬鹿がっ……！ お前程度の凡人が、いくら足掻いたところで何も変わらないんだよ！ もう決まってる事なんだ！ スカリエッティが捕まる事も、ナンバーズが負ける事も、全部決まってるんだっ！ コイツは、馬鹿だ。

しかし、コイツは単なる馬鹿じゃない。地下騒動の時、運もあつたとは言え、あのエース・オブ・エースを出し抜いた事がある。そんな奴が、俺憎さだけで、こんな馬鹿げた挑発をしてくるか？ いや、ソレはあり得ない。つまり、何か策があるのだ。

「ククク……面白い！」

思わず笑いが漏れて、隼樹が顔をしかめた。

「興味が湧いてきた。お前の考えた戦略……素人の浅知恵にな……」

！」

そうさ、恐れる事はない。挑んでくるのは、いかにも人生の負け犬って感じのクズ一人だ。

齒を覗かせ、不敵な笑みで言ってやった。

「いいだろう……！ お前の無謀な挑戦、受けてやる……！」

俺の言葉に、隼樹は更に険しい表情になった。気圧されないよう、必死に堪えてるのが見え見えだ。

「運命ってヤツは、お前のようなちっぽけな人間の力で、どうになる程ヤワじゃない……！ 寧ろ、強大！ 人の手など届かない鉄壁の巨壁……！ 打ち破れる訳が無い……！」

お前の付け焼き刃な素人アイデアが、どこまで通用するか楽しみにしてやる……！」

無力だ。

ナンバース共々捕まって、自分の無力さを思い知り、後悔するがいい。

*

「大丈夫なの、アンタ？ あんな事言つてさ」

「悔しかったから、勢いでつい口から出ちゃったんだよ……。あゝ

あ、言うんじゃないかった…… 一時のテンションに身を任せるもんじやないな……」

場所は、数日ぶりのスカリエツティ達のアジトだ。サード、ディード、オットーの三人と通路を歩いてる。

全壊に近い機動六課隊舎を後にして、アジトに帰ってきた。牢屋から出れて一安心したいところだが、そうも言つてられない。

隊舎前で、一也と勝負する事を決めちまったからな。

俺が落ち込んでると、隣を歩くサードが呆れた口調で言った。

「よく聞き取れない部分もあったけど、アレって宣戦布告でしょ？
まあ、相手は局員で私達の敵だけど……アンタ、ちゃんと勝算あつて言つたの？」

「まあ、はあ……」

俺は曖昧に返す。

いや、そりゃ一応牢屋の中で策は考えてきたよ。だけど、いざ相手に挑んだら自信が無くなってきた。一也の力説とか、不敵な態度で余計に不安になってきちゃったんだよな。今更ながら、あんな事言つて後悔してる。

ヤバい、超不安だ。でも、もう後戻り出来ないから、やるしかないよな。それに、一也に勝つ云々前に、このままじゃナンバーズが捕まっちゃうしな。ソレは、絶対に嫌だ。

結局、やるしかないんだよな。

おっと、先に二人にも言つとかないとな。

振り返つて、後ろを歩くディードとオットーに声をかけた。

「あつ、俺が藤堂に宣戦布告した事は、他の皆には内緒にしてね？
お願い」

「はあ……。隼樹兄様が、そう言つのでしたら私達は黙ってますが……」
「どうして言つたらダメなの？」

黙ってる事を約束するデイドだが、オットーは不思議に思ってる。

そこら辺を解ってないオットーは、まだまだ子供だな。

「いや、面倒な事になるからだよ。俺が局員に喧嘩売った、なんて他の皆知ったら騒ぎ出すと思うんだよね」

ただでさえ、一也に喧嘩売っちゃって参ってるのに、その上ナンバーズから俺の行動を注意されたりするの面倒だもん。

面倒事が嫌なら、最初から一也に突っ掛からなければいいじゃん、と思うだろうな。でもさ、何か引き下がれなかったんだよ。

「隼樹！」

通路の先から、耳に響くような大きな声が聞こえてきた。目を向けると、先に戻ってたナンバーズだった。久しぶりに会うせいか、自然と笑顔になる。

「皆！」

「この馬鹿っ！」

「ええええっ!?!」

再会の挨拶しようとしたら、いきなり怒鳴られたよ。案の定と言いか何と言つか、怒鳴ってきたのはノーヴェだ。

「管理局に捕まるなんて、ドジ踏んでんじゃねーよ！」

「す、すいません……」

相変わらず、ノーヴェは怖いな。いや、いつも以上に迫力がある。普段よりも眉間に深くシワを寄せて、鋭い目なんて相手を射殺

せそうな感じだよ。

拳の一発や二発は、覚悟しといた方がいいかな。

そう思いながら俺が身構えると、ノーヴェは意外な言葉を続けた。

「ま、まあ……無事で良かったよ……」

「へ……？」俺は耳を疑った。

「だ、だから……無事で良かったって言ったんだよ！ 馬鹿！」

「す、すいません！ その、ありがとうございます」

マジで俺は、自分の耳を疑った。

言葉通りに捉えるなら、ノーヴェは俺の事を心配してるみたいだ。いや、ちょっとビックリした。だって、あのノーヴェだぞ？ 常にカリカリしてて、俺を気に入らないと言った感じで睨んでるノーヴェが、俺の心配をしてたっばいんだぞ？

ん？ よく見ると、ノーヴェの腕に包帯が巻かれてるな。

「ノーヴェさん？ その……腕は、どうしたんですか？」

「あ？ こんなもん、大した事ねーよ」

「そうですか……。でも、あまり無理しないで下さいよ？」

「う、うっせーな。大丈夫だって言ってるだろ！」

「す、すいません」

ノーヴェに謝るの、コレで三回目だよ。

つかさ、そんな顔を真っ赤にする程、怒らなくてもよくね？

こっちだって、心配して言っただからさ。あれ？ 何か、ノーヴェの様子おかしくね？ 何か、モジモジしてね？ ちょっと気になるけど、ココでツツコンだらまた怒鳴られそうだから止めとこう。触らぬ神に祟りなし、だ。

ノーヴェとの会話を終わると、次にトーレが口を開いた。

「全く。ドゥーエの調べで、捕われた場所が機動六課だったからよかったものの……もし本局辺りにでも捕われていたら、いくら我等でも救出は難しいところだったぞ」

「すいません。って、捕まってる場所、ドゥーエさんが調べてくれたんですか？」

「ああ。戻ってきたサイドから事情を聞き、後にドゥーエからお前が捕まってる場所の情報が送られてきたんだ」

正直、意外だった。

てつきり、俺はドゥーエから見捨てられてると思ってた。最悪、管理局への情報提供を恐れて殺しに来るんじゃないか、とすら考えてた。

けど、実際は違った。ドゥーエが、俺の居場所を調べて特定してトーレ達に教えていたのだ。もしかしたら、俺を助ける為に――。

まあ、ドゥーエの真意は他人の俺には解らないけど。

「地下の件といい、今回の件といい、お前は本当に手間のかかる男だ」

腕組みをして、呆れたようにトーレは溜め息をついた。

でも俺は、落ち込みはしなかった。

手間がかかる手間がかかる、と言いながらも結局はトーレも俺を助ける事を選んでくれたと思う。そうじゃなきゃ、あんな事は言わない。

「隼樹が捕まったって聞いて、あたし等心配したつスよー！」

「まあ、こうして無事に戻ってこれたから良かったよ。とりあえず、おかえり隼樹」

ウェンディとセインも、笑顔で俺を迎えてくれた。

「そうそう。隼ちゃんのお友達も心配してたわよ?」

クアットロが言うと、彼女の後ろに沢山のガジェットが並んでいた。真ん中の黄色いレンズをチカチカ点滅させて、挨拶してるみたいだ。不覚にも、俺は泣きそうになった。

——お前等、皆……良い奴等じゃんか……!

帰る場所があるってのは、良いもんだ。自分の帰りを待ってくれて、迎えてくれる人の存在が、たまらなく嬉しい。ヤベツ、涙が出てきやがった。

「お兄さん!」

皆にバレる前に涙を拭こうとしたら、通路の奥から声と共に小さな女の子が駆けてきた。

足にしがみついていたのは、ヴィヴィオだった。

「ヴィヴィオ」

「隼樹お兄さん、おかえりなさい!」

顔を上げて、俺に笑顔を向けてくるヴィヴィオ。

お前な、感動してるところに、その笑顔はないだろう。追い打ち以外の何物でもねーよ。良い娘だよ、この娘スゲー良い娘だよ!

「ほらっ、涙拭きなよ」

ヴィヴィオのせいで更に泣いてしまうと、ディエチが指で涙をソッと拭ってくれた。

アンタも、ソレ卑怯だろ! 普段はあんま会話とかしないのに、こういう時に急に優しくしてくれたりとか、惚れちゃいますよ?

ふと俺は、一人の女の存在に気付いた。最初は、いきなりノーヴェに怒鳴られたり、皆と再会出来た喜びで気がつかなかったけど、一人知らないのが混じってる。多分、デイドやオットーと同じ後から動いたナンバーズだろう。

ピンク色の長髪で、額当てみたいな物をつけてる高身長の人だ。高さはトールと同じか、少し下位かな。着ている服は、やっぱりボディースーツだ。アレ、何とかならないの？

「初めまして、隼樹。No.7のセッテです」
「ああ、初めまして。塚本隼樹です」

何だろうな。普通に挨拶されただけなのに、妙な違和感がある。何っーか、こう、喋り方、口調が機械的な感じなんだよな。ホラッ、カーナビとかの音声ガイドみたいな感じだよ。

見た感じ、この娘もあんまり喋らなそうだな。でも、結構可愛いよ。胸も大きいし。

いや、しかし、新しいメンバーも加わって賑やかに……なるのか？ 新しい三人は、性格があんまり明るそうじゃないしな。まあ、だからって俺がどうこう言う事じゃないか。ソレはソレで、三人の個性ってヤツだしな。

懐かしく皆を眺めると、ある違和感を憶えた。何か、いや、誰か足りないような気がする。見た目小さいけど、存在感があって頼りになる……ああっ！

「チンクは？　そう言えば、チンクが居ないんだけど……」
「どうかしたんですか？」

あれ？　何か、急にナンバーズの何人かが表情を曇らせたぞ。ノーヴェなんか、歯を剥き出しにして鬼のような形相で固めた拳震わせてる。場の空気も重苦しくなったし、もしかして俺、地雷踏

んだ？

困惑してると、トーレが重い口を開いた。

「こつちだ。ついてこい」

トーレに続いて、俺達は通路を進んだ。

着いた所は、壁に作られた大きな棚に生体カプセルが並べられた広い部屋だ。カプセルの中には培養液が入っていて、裸の女が漂ってる。全部のカプセルに全裸の女が入って、ソレがズラリと並べられてるから男の俺には正直目のやり場に困る場所だ。前にアギトって赤い小悪魔な感じの奴が、スカリエツィを“変態医者”と呼んでたが、コレじゃそう呼ばれても仕方ないよな。つーか、前から疑問に思ってたんだけど、何で実験体は皆“女”なんだよ？ 男でもよくね？ いや、裸の男が並んでるの見るよりは女の方がいいけど。実験の相性に、女の方がいいのか？

トーレの案内で、一つのカプセルの前に着いた。その中には、やはり全裸になってるチンクの姿があった。ただ、他と違うのは治療の後を示唆する包帯が所々に巻かれてる点だ。

「任務中に、管理局の魔導師と交戦して負傷した。かなり損傷が酷い状態で、復帰するのに時間がかかるそうだ」

トーレの説明を聞いて、見た目以上に深刻な状態である事を知った。

「チンクお姉さん……」

ヴィヴィオも落ち込んだ様子をしてる。そういや、チンクの世話を受けてたんだっけな。大好きなチンクが傷ついて、ヴィヴィオも悲しいんだな。

「チンク姉をこんなに傷つけたあの鉢巻……！　アイツは、あたしの手で絶対ぶっ壊してやる！」

「壊しちやダメよ」。回収しなきゃ」

チンクが傷ついて、ノーヴェは相当怒ってる。いつもカリカリした様子のノーヴェも、教育係だったチンクには甘えてたみたいだからな。慕ってる姉を傷つけられて、怒り心頭に発するって感じた。

そんなノーヴェとは反対に、クアットロは普段と全く変わらない様子だ。何が楽しいのか、ニコニコ笑って。他のメンバーと違って、チンクが傷ついた事を特に気にしてない感じに見える。姉妹が傷ついてても、何とも思わないのかな？　正直ちよつと不愉快に思ったけど、小心者の俺は意見なんか出来ません。

しかし、俺の知らないところで派手に暴れたらしいな。一也の言う通り、地上本部って所も襲撃したと見える。主力のナンバーズが負傷したり戦闘不能になってる現状から推測するに、やっぱり武力で管理局に勝つのは無理だな。

あーあ。傷ついたチンクを見たら、何だか負けられない気持ちが強くなっちゃったよ。まあ、帰って来て早々に弱気発言したけど、もう御託言ってる場合じゃねーな。

いい加減、肚^{はら}決めるとしますか。

No. 14 俺達は雑草軍団だ（前書き）

ウーノ「非力な彼に出来る事は、考えること。そして考えた策を具現化させる為、彼は動き出します。全ては、勝つ為に――。『ナンバーズ』魔法が使えない男リベンジ！』始まります」

No.14 俺達は雑草軍団だ

チンクの状態を確認した俺は、自分の部屋に戻らずスカリエッテの研究室を目指した。

目的は勿論、一也が言つてた『運命』つてヤツを変える為だ。機動六課に捕まつて牢屋にぶち込まれてた時、一応策は考えてきた。けど、コレだけじゃ不充分なんだ。策を実行するのは、ある情報が必要になる。それから人手と準備をして、策を具現化させる事が出来る。

そついう訳で、俺は研究室に足を運んだ。

研究室では、相変わらずスカリエッティは研究に没頭してて、ウーノがサポートをしている。全く代わり映えない光景だな。ちょいと思つたのだが、二人つて夜ちゃんと寝てるのか？ 睡眠は摂らないと、マジで辛いからな。

「隼樹さん！」

俺に気付いたウーノが、作業の手を止めて駆け寄ってきた。

「大丈夫ですか？ 怪我はありませんか？」

「え？ あ、は、はい……大丈夫です……！」

肩を掴んで、頭から足まで確認するように見てくる。顔が近いから、恥ずかしくて直視出来ない。

俺が無事なのを確認したウーノは、ホッと安堵の溜め息をついた。

「そうですか……良かったです」

おおっ、ウーノまで俺の心配をしてくれてたのか。ヤッベ、メチ

ヤクチャ嬉しいんですけど。

「ははは。無事で何よりだよ、隼樹君」

スカリエッティも椅子を回転させて、こっちに向きを変えた。すると、俺達の様子を見てスカリエッティが、堪えるよう口に手を当てた。

「しかし……ウーノ、こうして見るとキミは本当に彼の母親のようだよ」

「なっ!?!」

「はあ!?!」

突然、何を言い出すんだこの変態医者は!?!

「我が子を心配する母親のようだよ、今のキミは」

「ド、ドクター!」

顔を真っ赤にさせて、ウーノが声を上げた。いつも冷静なウーノが、ここまで恥ずかしがるのを初めて見るな。つか、想像した事も無いし、想像し難いわ。

しかし、ウーノが母親ねえ。いや、こんな美人が母親だったら、メツチャテンション上がるよ。もう、超甘えちゃうよ。絶対、友達に自慢するよ。クッソー、何で俺の母親はウーノじゃないんだ? いやいや、待て待て。今は、そんな事を悔しがってる時じゃねーだろ。そりゃウーノが母親ってのは、凄く魅力的な事だけど、それはまた別の機会に考えるとしよう。早く本題に入らないと、どんどん聞きづらくなっちゃう。

よし。意を決して、俺は口を開いた。

「あの、ちょっといいですか？」
「ん？」

口論していたスカリエッティとウーノが、俺の声を聞いて振り向いた。

「ちょっと聞きたい事があるんです。その……皆さんが、これからやろうとしてる計画とか色々……」

俺が尋ねると、二人は顔を見合わせた。

今まで、スカリエッティ達の行動に関心や興味を持ったり、こうして聞く事が無かったからな。多少は驚かれて当然か。

一つ頷いてから、二人は俺に顔を向き直した。

「悪いが、ソレは出来ない相談だね」

「え……？」

断られた。

な、何でだ？ 何で教えてくれないんだ？ ホワイ？

心中で疑問を訴えると、スカリエッティが理由を語り出した。

「確かに、キミは私達側の人間だ。しかし、あくまでキミは私達の客人のようなものだ。戦闘要員でも無いキミに、私達の計画を教える必要は無いだろう？」

「はあ……」

いや、そりゃそうかもしれないけど、それじゃダメなんだ。今後の計画——特にドゥーエの行動の把握と黒幕についての情報は、絶対に必要なんだ。

もつともな理由だけど、簡単に引き下がる訳にはいかない。

「あの……別に計画に参加するって訳じゃないですから、ちょっとだけでも……」

「隼樹さん」

俺の言葉を遮ったのは、ウーノだった。普段通りの真剣で、凛々しくて綺麗な顔つきの彼女と目が合う。

「申し訳ありませんが、コレは決まった事です。貴方に、私達の計画を教える事は出来ません」

「いや、でも……」

コレは、かなりマズイ展開だ。

ここまで頑なに、情報を教えてくれないなんて正直予想外だった。特に、スカリエッティが教えてくれなかったのが、意外だった。スカリエッティなら、自慢話でもするような感じで、愉快気に計画の内容をペラペラ話してくれると思っていた。

けど、そのスカリエッティまで計画の内容を俺に明かしてくれない。

「私は別に話しても構わなかったのだが、ウーノがどうしても言っ
つてね」

「え？」

俺が心中に抱く疑問を読んだかのように、スカリエッティが言った。

「出来る限り、キミを危険な事に巻き込まないようにしたいと思う、ウーノの親心のようなものさ」

「ドクター！」

再び顔を赤くさせ、ウーノは声を上げた。だが、恥ずかしがって様子では、イマイチ迫力に欠ける。

なるほど、合点がいった。あのスカリエッティまで口を閉ざしていたのは、ウーノが進言したからなのだ。

しかし、意外と言えば意外だな。ナンバーズとは、ある程度の親交は深めたと思うけど、ここまでウーノから心配されてるとは正直驚きだ。スカリエッティからは俺の母親呼びわりされてるし、こっちまで恥ずかしくなってきた。でも、ウーノのような美人から心配されて、嬉しかったりする。

「そういう訳だから、計画の内容については諦めてくれるかい？」
「はい。そういう事なら仕方ないですね」

これ以上は無理だな、と悟った。あまり無理に聞き出そうとすれば、ウーノの心遣いにも悪いしね。

本人から直接情報を聞き出せなかったけど、他にも方法はあるだろう。時間もまだ少しはあるだろうし、焦らずにいこう。

だけど、このまま戻るのもアレだな。

そうだ。どうせなら、これからの出来事をスカリエッティ達に話そう。未来の様子を先に話しておけば、敗北という運命が変わるかもしれない。

期待を込めて、俺は口を開いた。

「あの……」

「ん？ 何だい、隼樹君？」

スカリエッティが尋ねてくるが、俺は答えられなかった。

——こ、声が出ない……！？

最終決戦でナンバーズが負ける未来を語ろうとすると、急に声が

出なくなつたのだ。息は出来るし、体に違和感も無い、意識もハッキリしてる。それなのに、声が出ない。まるで、何か呪いでもかけられたように、未来に関する事を話そうとすると、喋れなかった。気味が悪くなつた俺は、ふと思つた。

もしかして、コレが運命の力なのか？ 運命の抑止力つてヤツか？ 未来を変えようとする俺の行動を、見えない力が止めている感じだ。

「隼樹さん？ 顔色が悪いようですが、体調が優れないのですか？」

俺を心配して、ウーノが声をかけてきた。

大丈夫です、と答えて俺は研究室を後にした。

*

通路を歩く足取りは、重かつた。

情報は得られなかつたし、未来について話す事も出来なかつた。結局、出来ないのかな、運命を変えるなんて。一也が言つてた。運命つてヤツは俺一人でどうにかなる程、ヤワじゃなくて強大だ、と。もし、そうなら……俺に何が出来る？ 情報も聞けなくて、未来の事を話せない俺に、戦う力も無い凡人の俺に、何が出来る？ 何か出来る事があるのか？

ああ、ダメだ。またマイナスの方向に考えがいつちまう。こんな気持ちじゃ、未来を変えるなんて到底無理だ。

落ち込むと同時に、自分のダメさに腹が立つてきた。

苛々を募らせ、複雑な思いで溜め息をついた時だった。

「隼樹さん！」

後ろから呼ばれて、俺は足を止めて振り返った。

ソコに居たのは、ウーノだった。研究室で、スカリエッティの作業を手伝ってたハズなのに、抜け出してきたのか？

「ウーノさん。どうしたんですか？」

「少し、貴方の事が気になったので」

「え？」

どうやらウーノは、俺の事が気になって研究室を出てきたようだ。そんな事しちゃ、スカリエッティに「母親みたい」って言われても無理ないだろう。俺は大歓迎だけどね。

「隼樹さん。どうして急に、私達の計画を知りたいと言いだしたのですか？」

ああ、やっぱりその事か。そうだな。ソレ以外で、気になる事なんて無いもんな。

「それは……」

さて、どうするかね。一也の事を話すと、また更に心配かけたり、下手したら叱られそうだな。でも、だからって黙りするの也不错ないしな。

しばし悩んだ俺は、一也の事は伏せて、素直に自分の気持ちだけ教える事にした。

「勝ちたいって思ったんです」

「勝ちたい？」

怪訝そうに首を傾げるウーノに、「はい」と答えて続ける。

「俺、元の世界でも怠け者で、ダメな男だったんです。大学には行つてたんですけど、特にやりたい事も見つからなくて、就職意欲もロクになくて……毎日ダラダラ過ごしてました」

自分のダメな面を話してて、恥ずかしくなってきた。

「一応、企業の面接には何回か行つたんですけど……全然ダメで……ダメ出しまでされちゃいました。でも、悔しいとか、いつか見返してやるとか、そんな風に思つた事無いんです。自分がダメなのは解つてゐるから、やっぱそんなもんかつて逆に諦めてました。そんな事があつてから、就活もやらなくなつて、大学や家で遊んでばかりいました……」

でも、そんな俺が、今回は勝ちたいって思つたんです」

失いたくないんだ。

ナンバーズと過ごす時間が楽しくて、居心地が良くて、手放したくない。

戦いで負けたら、ナンバーズは捕まつてバラバラになる。そんなつたら、今の生活は戻つてこない。

それに、ドゥーエは死ぬ。殺されるんだ。死んだら、本当にそれつきりだ。死んだ人間は生き返らないってのは、世界の決まりのよいうなもの。ドゥーエは怖いけど、綺麗で、一緒に居て楽しいって思う時もあつた。

嫌だ。失いたくない、死なせたくない。

それに、一也の言葉で火も点いた。今まで、面接官にダメ出しされても何とも思わなかったのに、一也の見下した言葉にムカついた。単純な理由だ。気に入らないから、潰す。

「初めてなんです、こんな気持ち……！　今までの人生で、こんなに勝ちたいって強く思ったのは……！」

コレが、俺の理由だ。

勝ちたいって思ったから、戦って勝ちたい。まあ、俺の場合はナンバーズみたいにドンパチ派手にやるより、どっちかつーと地味な方だけだな。だって、ドンパチやる度胸なんて無いもん。ビビりなんだから、しょうがないだろ？

「そうですか」

俺の理由を聞いて、ウーノは一つ息を吐いた。
それからウーノは、意外な言葉を口にした。

「分かりました。私達の計画の内容を、貴方にお教えします」
「えっ!？」

全く予期してなかった言葉に、俺は本気で驚いた。

「い、いいんですか？」

「はい。今の隼樹さんの話を聞いていたら、何だか協力したくなりました。勝ちたいと言う貴方の気持ちは、私もよく解りますから」

真剣な表情を崩して、ウーノは微笑みを浮かべた。

「ただし、無理はしないで下さい。貴方に何かあれば、妹達も心配しますから」

「はい、勿論です。俺だって、出来るだけ無茶な事はしたくないですからね」

くう！ ウーノ、マジお母さんだね！

「そう言えば、この件は妹達には？」

「あつ、出来れば内緒で」

「分かりました。では、ココでは何ですから、研究室に戻りましょう。ソコでお話します」

「はい。ありがとうございます」

礼を言つて、俺はウーノの後に続いた。

さつきまで意気消沈してたが、ウーノの情報提供の約束で少し希望が出てきた。俺が計画を知る事が出来るつてのは、つまり運命に抗える可能性があるつて事だ。この世界の奴に、この世界の未来を教える事は出来ないが、俺が動く分には問題無いのかもしれない。ふと俺は、ちよつと気になってた事を訊いてみようと思った。

「あの、ウーノさん。一ついいですか？」

「何ですか？」

「どうしてウーノさんは、その……ここまで俺の事気にかけてくれるんですか？」

研究室で知ってから、ずっと引つ掛かってた。特別仲が良い訳でもないのに、どうして俺の事を凄く心配してくれるのか、不思議に思ってた。

俺が質問すると、ウーノは足を止めて振り返った。

「そうですね……ハッキリ言ってしまうえば、貴方が自分で言ったよな『ダメ人間』だからです」

「は？」

思わず俺は、間抜けな声を出した。

おいおい、本人の前で『ダメ人間』って言いますか？

「常にマイナス思考で、何かやろうと言う意欲も無く、このままで大丈夫なのかと不安で不安で仕方なく思っ放っておけないんです」

頬に手を当て、やれやれと言う風に小さくかぶりを振るウーノ。

——メチャクチャ俺の事心配してんじゃん！俺以上に心配してるよ！それにこの『しょうがない子ね』的な仕草は、もうお母さんみたいだよ！ウーノ、やっぱお母さん決定！

クソッ、スッゲー恥ずかしくなってきた。

穴があつたら入って、一生引きこもりたい。

*

その日の深夜。

俺は、空き部屋に一人佇んでいた。

いや、正確には部屋に居るのは俺だけじゃない。俺以外にも居るが、ソイツ等は人間じゃない。ガジェットってロボット。勿論、中にはサードの姿もある。

部屋の幅もあって、流石に全機は集まれてないが、それでもかなりの数が所狭しと並んでる。

さて、揃ったところで早速本題に入るか。

「皆に集まってもらったのは、管理局との最終戦の事で話があるからなんだ。実は、スカリエッティ達とは別に、俺なりの作戦を考えてきた。はじめに言っておくと、機動六課や他の局員は眼中に入っていない」

機動六課を相手にしないって発言に、数機のガジェットが互いに見つめ合ってる。そりゃ、怪訝に思うよな。何てったって、機動六課は敵組織の精鋭部隊だからな。

けど、だからこそ連中との戦いは避ける。相手にしない。

「連中の強さは、多分俺より皆の方がデータとかで解ってると思う。ぶっちゃけ、同じ人間とは思えない連中だよ。特に隊長・副隊長クラスは化け物だね。そんな連中と戦っても、悪戯に戦力を減らすだけで全く意味が無い。だから、俺は別の所を攻めようと考えた。

ソレは、事件の黒幕で管理局のトップ——最高評議会だっ……！」

ウーノとスカリエッティから、色々と聞いた。最終戦の計画、自達達のスポンサーであり黒幕の正体、そしてドゥーエの動きとかね。話を聞いて、ドゥーエが最高評議会を暗殺する事を知った。俺は慌てて、その暗殺を中止にするよう頼んだ。黒幕の最高評議会が死んだら、俺の策は破綻しちまうからな。俺の必死さが伝わったのか、スカリエッティは暗殺中止を呑んでくれた。それさえ約束してくれば、後はこっちの仕事だ。

まっ、ソレもガジェットが協力してくればの話だけだね。

「機動六課やデカイ組織は確かに強い……。けど、奇襲で崩す事が出来る……！ 六課の連中や他の局員が、ナンバーズと派手にドンパチ戦ってる間に……その隙を衝いて潰す事が出来る……！」

俺は、勝ちたい……！ ここで勝たなきゃ、俺達はボロクソに負けて、刑務所行きやスクラップだ……。俺は、そんなの嫌だ。御免こうむる！ 正義だ何だと抜かして、裏で悪事やってた最高評議会クズどもの代わりに捕まって人生台無しにされるなんて、そんなの納得出来るか！？ 俺は、そういう偽善者が大嫌いだった！」

そんな俺以上に最高にクソみたいな連中のせいで、ナンバーズを

犯罪者扱いされてたまるかよ！

ガジェットだって、連中の道具としてじゃなく、もっと違う活かし方をすれば全然危険じゃねえ。スクラップになんか、させるか。だって、友達なんだぞ？

「俺の計画には、皆の協力が必要なんだ。だからお願いだ！俺に力を貸して下さい！」

俺は頭を下げて、心から頼んだ。

一人じゃ何にも出来ない情けない奴だけどさ、皆が協力してくれば勝てるかもしれないんだ。無理強いはいしないけど、やっぱ出来れば協力してほしい。

そう思っていると、肩をポンつと軽く叩かれた。顔を上げ、俺の肩を叩いた人物を見た。サードが、笑みを作って俺を見ていた。

「アンタのソレ、愚問だったみたいよ」

「え？」

言われて俺は、前を向いた。

部屋に居るガジェット全機が、コードやらアームやらで『OKサイン』を出していた。

——お前等……！ ホント、機械のクセに良い奴等じゃんか……！ 泣くぞ、この野郎！ 涙もろく無いハズなのに……！ ちくしょう……この世界に来てから、他人の優しさに触れ過ぎたかも……。

何とか涙を流さず、抑える事が出来た。

「勿論、私も協力するわよ。アンタは、私が護るからね！」

「あ、ありがとう、サード」

そんな可愛い笑顔で言われたら、照れちゃうだろ。

ああ、顔が熱い。誰か扇風機持ってきて。

ともあれ、コレで人数は揃ったな。

待ってるよ、最高評議会、一也。絶対にぶっ倒してやるからな！俺達が、勝つんだ！

結成する。

精鋭とは程遠い、雑草軍団が結成された。

底辺の底辺に位置する存在が、集って世界のトップに噛み付くべく、牙を研ぎ始める。

反逆の旗を掲げる。

打倒・最高評議会——！

No.14 俺達は雑草軍団だ（後書き）

あの腹黒女と隼樹が対談！？

次回『腹黒くても根っからの悪って訳じゃないと思う』

No.15 腹黒くても根っからの悪って訳じゃないと思う(前書き)

クアットロ「ただ弄られるだけの男、馬鹿で嘘がつけない馬鹿正直な男、何の力も持たない無力な男。けど、そんな無力な男が巨大な存在を崩すのって、面白そうだと思わない？ 『ナンバーズ』魔法が使えない男リベンジ！』 始まりますわ」

No.15 腹黒くても根っからの悪って訳じゃないと思う

深夜、俺はサードと共に自分の部屋を出た。眠気を押し殺して、
気だるげな足取りで通路を歩く。

——超眠い……。

大きく欠伸をかき、目の端に涙の粒が浮かんた。良い子は寝てる
時間だし、良い子じゃない俺でも寝たいよ。フカフカのベッドで、
サードと一緒にグッスリと朝まで眠りたい。

しかし、寝れない。今から部屋に戻って、眠る事は許されない。
何故かって、呼ばれてるからだよ。誰かって？ ソレは部屋に着い
てからのお楽しみって事で、お願いします。

薄暗い通路を進んで、俺は指定された部屋に入った。室内には明
かりが点いていて、一人の女が俺達を待ってた。

「はい。お待ちしました」

こっちに手を振ってニツコリ微笑むのは、クアットロだ。

クアットロ。皆はもう知ってると思うけど、丸眼鏡に茶髪的女で
ナンバーズの一人だ。んで、俺の天敵でもある。このアジトに着て
最初に俺を弄ってきたのは他でもないクアットロだ。あの一件のせ
いで、ノーヴェにメツチャ睨まれたからな。今でもよく覚えてる。
その日から、俺はクアットロに会うたびに弄られてんだ。まあ、今
じゃもう慣れてきたけどさ。

しかし、そのクアットロがわざわざこんな時間に俺を呼び出し
て、一体何の用だ？ 俺には心当たりはないけど。

「お待たせしました。それで、俺に何か用ですか？」

「ちょーっと隼ちゃんに訊きたい事があるの」

笑みを顔に張り付かせて、クアットロが歩み寄ってくる。

どうでもいいけど、クアットロですつと笑ってるよな。何が面白いのか、毎日ニコニコニコニコと笑顔が絶えない女である。まあ、可愛いからいいけど。

目の前で立ち止まったクアットロは、笑顔のままで目を鋭くさせた。その顔を見た瞬間、背中に寒気が走った。

「コソコソと動いて、一体何を企んでるのかしら？」

顔を近付け、耳元で囁かれた俺は鳥肌が立った。

傍で控えてたサードが、腕を引っ張って俺をクアットロから引き離れた。俺と同じモノを感じたのか、サードは警戒している。

一方、クアットロは普段と違った妖しい笑みを浮かべて、こっちを見てる。

いやいやいや、何この人？ 雰囲気、ガラリッと変わったんですけど！？ S的な性格なのは予想してたけど、スゲー危険な感じがするぞ？ 顔なんて、ニコニコが消えて悪女な笑みになってるよ！

クアットロの豹変ぶりに、俺は動揺を隠せなかった。漫画とかで、眼鏡をかけてる女が実は腹黒くて性格悪いってのは見た事あるけど、実際に目の当たりにするとマジでビックリだ。

それにしてもクアットロの奴、俺達の動きに気付いてたのか。こりゃあ、下手にごまかすより素直に言った方がいいな。今のクアットロは、普段には無い危ない感じがする。

しかし、ロボットとは言え女の子に庇われるとは、情けないものだ。今に始まった事じゃないけど。

「えー、最終戦で皆とは別に、俺なりの作戦を立てまして……」
「ふうん。作戦、ねえ」

目を細め、クアットロは疑いの眼差しを向けてくる。

見据えられるような目を向けられて、俺も目を逸らさず向き合う。ニコニコ笑いをやめたクアットロは、SMの女王様な雰囲気、体のラインが浮き出てるボディースーツのせいもあるって妖艶さも感じる。最初は、クアットロの豹変ぶりに驚いたけど、こうして少し落ち着いて見ると、かなり魅力的だ。普段とは違う、クアットロの裏の魅力だ。

ただ、妙な違和感がある。多分、コレがクアットロの素なんだろうけど、初めて見た気がしない。前にも、見た記憶があるんだ。

俺が疑問を抱いてると、クアットロが口を開いた。

「まあ、ガラクタ達をどう使おうと貴方の自由ですけど、私達の夢の邪魔だけはしないで下さいね」

小馬鹿にしたように笑うクアットロに、俺は眉根にシワを寄せた。庇ってくれてるサードの手を見ると、握り拳を固めてる。表情をうかがわなくても、怒ってるのが解る。

俺も今のは聞き捨てならないな。俺の事が気に入らないのは、別に構わない。けど、アイツ等を――ガジェットを馬鹿にするのは不愉快だ。その中には、勿論サードも含まれてる。

「クアットロさん」

「何かしら？」

クアットロは、まるでゴミを見るような冷たい目をしてた。

「確かにガジェットは、クアットロさん達のような戦闘機人や一流魔導師に比べたら大した事ないです。けど、それでもやり方次第じゃ、その……何て言うか、“上”を引き摺り下ろす事も出来るんです。それに、アイツ等やサードはロボットだけど、スゴい良い奴等なんです！ だから、ガラクタって言ったのは撤回してくれませ

んか？」

アイツ等を馬鹿にされると、気分が悪いんだよ。こんな俺を護ってくれて、こんな俺の作戦に乗ってついてきてくれるアイツ等は、紛れもなくスッゲー良い奴等だ。

だから、ガラクタとは呼ばせない。

この世界での俺の友達だから、ソコは譲れない。

俺の話を聞いて、クアットロは顔をしかめた。コイツのような奴にとつて、俺が言った事は理解し難いんだろう。今まで、そういった考えをしてこなかったんだろーし、妹が傷ついても平然としてる性格の奴だからな。

「ねえ、隼ちゃん」

「はい？」

「貴方が考えた作戦、私に教えてくれないかしら？」

俺の作戦に興味を持ったのか、急に話を変えてきた。

そんな事より、俺としてはガジェットを認めてほしいんだけど、断つて更に機嫌を悪くさせるのも怖いしなあ。しょうがない、ここは俺が折れるか。

「はい、分かりました。けど、他の皆には黙っててくれませんか？」

「分かったから、早く話なさい」

少し苛ついた様子で、話すよう促してきた。

俺は、クアットロに作戦の内容を話した。初めはしかめっ面だったクアットロだが、内容を聞いてく内に、その顔に笑みが浮かんできた。一言で表せば、『邪悪な笑み』かな。

「へえ」。まあ、なかなか面白そうじゃない。素人の隼ちゃんにし

ては、上出来ね」

「あ、ありがとうございます」

むむ、まさか誉められるとは思わなかった。不覚にも、ちょっと嬉しくなった。

するとサードが、肘で少し強めに小突いてきた。多分、クアット口相手に気を許したのが嫌だったんだろう。

分かった。俺が悪かったから、小突くのは止めてくれ。

「分かったわ」

サードの小突きを止めると、クアット口が開いた。

「もし隼ちゃんの策が上手くいったら、ガジェットを馬鹿にした事は取り消してあげるわ」

「ほ、本当ですか？」

「ええ」

よし、言ったな。こうなったら、意地でも作戦成功させて、ガジェットを認めさせてやる。

密かに俺がテンションを上げてると、今度はサードがクアット口に話しかけた。

「ところでアンタってさ、普段は猫被ってるわけ？」

清々しい程ストレートに訊くな、サード。

一方、ストレートな質問を受けたクアット口は全く動じず、普通に言葉を返す。

「そうよ。猫被るのって、結構疲れるのよね」

ふう、と一つ息をついてから、クアットロは髪を分けてるリボン^{ほど}を解いた。

後ろで左右に分けられてた茶色の髪が、バサツと下ろされた。

背中を隠す程の長い髪を下ろしたクアットロを見て、俺は驚愕すると同時に今まで抱いてた違和感の正体に気付く。

「ああっ！ ドゥーエさんだ！」

「え？」

突然、声を上げた俺に二人とも驚いてる。

しかし、俺は二人の反応に構わず、クアットロを指差して若干テンションを上げて続けた。

「そうだそうだ、そんな感じです！ 誰かに似てるな、見覚えあるな、って思ったらドゥーエさんだよ！ あ、スッキリした！」

胸のつつかえが取れて、俺はまじまじとクアットロを見る。

あのサディスティックな瞳、怪しい笑みに妖艶な雰囲気、何か覚えがあると思ったらドゥーエと似てるんだ。

頭にドゥーエを思い浮かべながらクアットロを見ると、ある事に気付いた。さっきまで高圧的な態度だったクアットロが、何やら頬を赤らめてるのだ。

「じゅ、隼ちゃん？ それって、どついう事かしら？」

「え？」

「だから、その……私、ドゥーエ姉様に似てるのかしら？」

「ああ、はい。似てますよ。いや、何となく雰囲気誰かに似てる気がして、んでクアットロさんが髪を下ろした時にドゥーエさんの姿が被ったんです」

眼鏡外したら、多分ソツクリなんじゃないか？ それに、個人的には髪下ろしてる方が良いと思う。髪型だけで、随分と印象も変わったからな。

猫被ってる方も良いけど、素のクアットロはもつと良いと思うわ。大人な雰囲気で、さっき言ったようにドゥーエに似た感じでもあるしね。

「ドゥーエ姉様に似てる……うふふふふ！」

俺の感想を聞いたクアットロは、ブツブツ呟いたかと思ったら、笑い出した。

——おい、大丈夫か？ 戻ってこい。

心中で呼び掛けた時、クアットロが顔を向けた。

「もう、隼ちゃんったら良い子ねえ！ 何か困った事があったら、遠慮なくお姉さんに言いなさい！」

「え？ あ、は、はあ……」

何か、エライ上機嫌になったな。

隣に居るサードも、クアットロの変わり様に咂然となってる。

そんなにドゥーエさんに似てるって、俺の言葉が嬉しかったのか？ そりゃまあ、ドゥーエはスゲー美人だから憧れるのも何となく分かるけど……。まっ、いいか。

心の中でまとめ、そろそろ帰ろうとした時だった。

「あっ、そうだわ」

何か思い出したように、クアットロは声を出した。

「ガジェット好きの隼ちゃんに、面白い物をあげるわよ」
「面白い物？」

はて？ ガジェットで面白い物とは何だ？

頭の中で疑問符を浮かべる俺とサードを、クアットロは半ば無理矢理引っ張り、別の部屋に連れてきた。扉を開けると、中は真つ暗で何も見えなかった。先頭のクアットロがスイッチを押して、明かりを点けた。

天井の明かりに照らされ、室内にある物を見た俺は、驚きに目を見開いた。

「どうかしら？ 本当なら、『ゆりかご』の駆動炉を護らせる駒なんだけど、何機か貴方に貸してあげるわよ？」

上機嫌なクアットロは、部屋にある物の能力を教えてくれた。

——コ、コイツ等が加われればスゲー心強いぞ！ 作戦の成功率も上がるし、もしかしたらドウエーの死亡を回避出来るかも……！

俺は、今日ほどクアットロに感謝した事はない。普段は猫被つて、中身腹黒いけど、接し方次第じゃそんなに悪くないかも。

*

その日、いつも通りに俺は自分のオフィスに居た。

最終戦の時が迫っているが、何ら恐れる事も心配する事は無い。隼樹の奴が、何か企んでる感じだったが、全く問題無い。この世界で起きる出来事は、既に決まっているのだ。どんな小細工をしようと、変わらないモノは変わらない。展開に多少の変化が生じたとしても、万が一にも結果は変わらないのだ。

仮に、奴がナンバーズの戦闘力を上げる為の強化案を考え、実行したとしても時間が無い。グズグズ時間をかけていたら、管理局に居所を突き止められるからな。例え強化出来たとしても、所詮は付け焼き刃だ。そんな浅知恵で勝てる程、機動六課は甘くはない。

機動六課の強さを目の当たりにすれば、さすがに隼樹も諦めるだろう。彼女達の手にかかれば、ナンバーズなど雑魚に等しい。

粉碎、玉砕だ。

そうなれば、もう奴と顔を合わせる事も無くなり、邪魔者も全て消え去る。理想的な形だ。

仕事を終わらせ、俺はモニターを一つ出した。画面に映っているモノを見て、口元を吊り上げる。

まあ、もし万が一、億が一に不測の事態が発生したとしても、コレがある。コレで、邪魔者を殺せばいい。だが、あくまで不測の事態が発生した時だけだ。まだ試作段階で、テストも終了していない。不安要素もある現段階では、出来れば動かすのは避けたい。しかし、コレの出番は無いだろう。ゴミ共は、管理局の精鋭部隊である機動六課が掃除してくれる。

白い悪魔と恐れられる高町なのは、金色夜叉の異名を持つフェイト・T・ハラオウン、夜天の主にして部隊長の八神はやての三人に敵う者など存在しないのだ。

最終戦の日に、俺は奴の悪あがきを見届けてやるとするか。

No.15 腹黒くても根っからの悪って訳じゃないと思う(後書き)

『ゆりかご』が空を飛ぶ時、隼樹の最初の一手が……!?

——おっしゃあ! 言わせたぞ、その言葉……! 俺が欲しかった
言質を、皆の前で……!

次回『逆転への一手』

No.16 逆転への一手（前書き）

ウーノ「私達は、闘う為に生み出された戦闘機人。サードも、同じ目的で作られたガジェット。隼樹さんは、私達と違って普通の人間。出来る事なら、彼を巻き込みたくありませんでした。戦闘機人と普通の人間と違いはあれど、大切な家族ですから。『ナンバーズ』魔法が使えない男リベンジ！』 始まります」

No.16 逆転への一手

最終決戦当日の早朝。

俺——塚本隼樹は、とんでもない物を目撃してしまった。

緊張のせいかな、いつもよりも早い時間に目が覚めた俺は、サードを起こさないよう静かに部屋を出て、アジトの中を歩き回る事にした。一瞬、ロボットって寝るものなのか？と疑問が浮かんだが、朝っぱらから考えるのも面倒なので破棄した。プラプラと歩き回り、偶然足を踏み入れた場所に、ソイツ等は居た。

一人は、前に出会ったルーテシアって紫髪の女の子だ。ソコはい。その子は、全く問題ない。

問題は、ルーテシアの背後に立ってる謎の物体だ。

ソイツは、全身が真っ黒に近い状態で、何か鎧のような物を身に纏ってるようにも見えた。一応人型なんだが、よく見ると何となく昆虫を彷彿させる姿なのだ。虫のような顔で、目が四つもあって不気味だ。

——何コレ！？怖っ！

運が悪い事に、ソイツと目が合ってしまった、俺はビビって金縛りにあつたように動けなくなった。

いや、マジで怖いんだって。見た目を例えるなら、バイオハザードのクリーチャー。あの4に出てきた、サラザールの側近的な虫クリーチャーだよ。マジで、見た目あんな感じなんだって。もう見た目怖くて、全然動けねーよ。喰われる、殺される、って思ったもん。すると、ルーテシアが気付いて俺に振り向いた。俺を見たルーテシアは、何やら虫クリーチャーに話しかけてる。そしたら、虫クリーチャーは俺から視線を外してくれた。緊張の糸が切れて、俺は安堵の溜め息をついた。声が小さくて話の内容は、よく聞き取れなかったけど、俺が敵でない事を伝えてくれたようだ。

虫クリーチャーの視線から解放された俺は、この後どうするか考

えた。スカリエツティやナンバーズが実際に行動を起こすのは、まだだろうし、ぶっちゃけ暇だ。

しばし考えた俺は、ある事に気付いた。

——待てよ……。よくよく考えたら俺、アソコに行く為の移動手段用意してねーじゃん。うわ、グタグタ。

自身の作戦の穴を見つけた俺は、穴を埋める為にルーテシアと話をする事にした。確か、ルーテシアって集団転移が得意っつーか、とにかく出来るハズなんだ。交渉して、転移をしてくれるよう頼んでみる事にした。

ただ、やっぱルーテシアの背後に控えてる虫クリーチャーが、おつかない。襲ってきたりしない、よな？

不安を抱きながらも俺は、勇敢にルーテシアに接近した。最初から、もう足震えてるけどね。

何とか接近する事が出来た。背後に居る虫クリーチャーは、反応を見せない。よし、これならイケそうだ。

「お、おはよう、ルーテシア」

「ごきげんよう」

おおっ！ 返事が来た！

無表情で冷たそうな感じだけど、ちゃんと挨拶は返してくれた。

さて、どうしようかな。いきなり本題に入るのもアレだし、まずはちよいと質問でもしてみるか。

「えっと……ルーテシア、だよな？ こんな所で何してるの？」

「お母さん」

「は？」

「お母さん、見てるの」

ルーテシアは顔を上げて、一つの生体カプセルを見つめてる。

生体カプセルの中に入ってるのは、濃い紫色をした長髪の女性で、見た目はルーテシアを大人にした感じた。うん、クリソツだから親子だな。つーか、やっぱり裸なんだな。

俺は一瞬見ただけで、ルーテシアの母親から目を逸らした。だってさ、他人の母親の素っ裸見るなんて超気まずいじゃん。娘の前だよ？ 超気まずいわぁ。

軽く咳払いして、俺は気を取り直した。

「き、綺麗なお母さんだね」

「うん」

「いや、羨ましいな。俺のお母さんは、美人じゃないから」
「そう」

いや、会話続かねーよ！

こっちが何か言っても、「うん」「そう」しか返してこないもん！ 凄くやりづらいわ。

「えっと……何で、お母さんはこんな所に入ってるの？」

「解らない。でも、11番のレリックがあれば、目を覚ますってドクターが言ってた」

なるほろ。

今の話を聞いて、どうしてルーテシアが協力してるのか解った。要するに、目覚めない母親の為に頑張ってるんだ。まだ小さいのに、健気で良い娘じゃないか。ヴィヴィオといい、ルーテシアといい、この世界の女の子は良い娘ばかりなのか？ ま、別にいいけどさ。

まあ、ルーテシアの母親の件は置いて、そろそろ本題に入りますか。

「ルーテシア。ちょーっと頼みたい事があるんだけど、いいかな？」

「何？」

俺は、転移魔法である場所に送って欲しい事をルーテシアに話した。

するとルーテシアは、二つ返事でアツサリと承諾してくれた。いや、ホント助かったわ。ココで断られたら、破綻とまではいかないけど、計画成功が困難になるトコだった。だが、問題解決だ。後は、時間になるのを待っただけだ。

*

俺は今、朝飯を食べる為に食堂に来たのだが、ちよいと困った事になった。

「びええええええええん！」

「……えゝ？ 何コレ？」

ヴィヴィオが、盛大に泣いてます。

しかも、俺の足にしがみついています。

何かよく解らんが、俺を見た途端に泣き出して、走って足にしがみついてきた。正直、うるさくてウザい。いくら良い娘でも、五月蠅いものは五月蠅い。

「ちょ……何？ 何なのコレ？ 何で泣いてるの？」

「いや、実はさ……」

俺が疑問を口にするのと、セインが説明してくれた。スカリエッティの計画には、過去の聖王のクローンであるヴィヴ

イオが必要不可欠らしい。それで昨夜、ヴィヴィオの眠^{ちから}ってる力を引き出す為に、レリックの移植作業をしたそうだ。その時の事が、ヴィヴィオにとってトラウマ並の恐怖だったらしくて、移植作業をしたスカリエッティや立ち合ったウーノ、クアットロ、ディエチに対して恐怖心を抱いてしまったのだ。更に、クアットロ達と同じ格好をしているナンバーズも怖がってて、ビクビクしてるところに俺がやってきて、泣き付いてきたんだと。

他のナンバーズを見ると、皆お手上げの様子をしている。

まあ、話は解ったけど、ソレって完璧にスカリエッティ達が悪いんじゃない？　どんな手術か知らないけど、相手は子供なんだから手加減^つつーか、お手柔らかにしてやれよ。

「ああ、そうかそうか。怖かったね。もう大丈夫だから」

屈んで目線を合わせて、泣き喚くヴィヴィオの頭を撫でてやる。頼むから、コレで泣き止んでくれ。

頭を撫でてやると、ヴィヴィオは少し落ち着いた。まだ涙は流れてるが、大声は止まった。うむ、どうやら俺には心許してくれてるみたいだな。まあ、そうじゃなきゃ俺にしがみついたりしないか。しかし、今にも決壊しそうな感じで、油断出来ない状態だ。ナンバーズには任せられないし……ああ、面倒くせー。

「ヴィヴィオ」

まいつてる俺の後ろから、女の声が上がった。

振り返ると、起きてきたサードが立ってた。両手を広げて、ヴィオに笑顔を向ける。

「ほらっ、高い高いしてあげるから、こっちに来なさい」

「うん……」

小さく頷いて、ヴィヴィオはサードに駆け寄った。

サードは、寄ってきたヴィヴィオを両手で抱え、高く持ち上げた。上げては下ろし、上げては下ろしを繰り返していると、ヴィヴィオの顔に笑顔が戻ってきた。怯えの様子は消え去り、楽しそうに声を出して笑ってる。

そういや、真ん丸ボディの時にヴィヴィオに高い高いしてたっけな。その頃から、結構この二人仲良いし。髪の色も似た感じだし、こうして見ると少し年の離れた姉妹みたいだな。サードは口ポツトだけど。

「なーんか、あの二人姉妹みたいだよな」

お、セインも同じ意見っすか。見てて、何か微笑ましい光景だね。

さて、ヴィヴィオも機嫌を良くして泣き止んだところで、朝食にしますか。決戦前つてのもあるし、今の内に腹に入れとかねーとな。腹が減っては戦は出来ぬって言うじゃない。

*

朝食を終えた後、俺はナンバーズと一緒に研究室に居た。

ココで、今日の作戦の最終確認をしてるのだ。まず、ナンバーズは管理局の質量兵器である『アインヘリアル』つつー兵器を潰しに行く。その後に『聖王のゆりかご』と言う古代の巨大戦艦を起動させ、本格的に地上制圧に動き出す。ナンバーズは別れて、それぞれの配置に着く。チンクの復帰は間に合わなかったが、計画に変更は無しのような。

ちなみに、俺とサードはアジトで待機と言う事になってる。一部の者には俺の作戦は話してあるが、他の皆には秘密にしてる。余計な心配をさせて、迷惑をかける訳にはいけないからな。

作戦内容を確認した後、スカリエッティが指示を出した。

「さて、それでは作戦を始めようか。まずはアインヘリアル破壊だ」

「了解！」

ナンバーズは、声を揃えて答えた。

準備も整い、皆が動き出す。部屋を出て行こうとするナンバーズの背中に、俺は声をかけた。

「皆……！」

「ん？」

出撃しようとしてた皆が、俺の声で足を止めて振り返った。

ナンバーズの視線を受けて、俺は少し緊張する。正直なところ、気の利いた台詞なんか思い付かない。だから、シンプルに言おう。

俺も俺なりに精一杯頑張るから、皆も――。

「頑張つて」

負けると決まってる歴史かもしれないけど、こんなもんしか俺には言えない。

後は、皆の無事を祈るだけだ。

「フンッ。お前が我々の心配など百年早い」とクールにトーレ。

「速攻で制圧して、戻ってくるからな！」力強く答えてくれたノーヴェ。

「隼樹兄様、行ってきます」礼儀正しくお辞儀をしてくるディード。
「全部終わったら、また遊ぶっスよ！」いつも通り明るいウェンディ。

挨拶を交わして、ナンバーズは出撃した。

皆を見送った俺は、気合いを入れるように一つ息を吐いた。

それじゃあ、俺も自分に出来る事をやるか。と言っても、俺が動くのはもうちょい後なんだけどね。

うーん、いまいち締まらねーな。

まあ、いいや。それが俺だ。

*

アインヘリアルルの襲撃は、護りの魔導師部隊も全滅させて全機破壊して成功した。

ああ、一応言つとくと殺しはやってないからな。俺が言うまでもなく、元から出来る限りの殺生は控えるつもりだったらしい。俺の計画では、ナンバーズ側はそれなりに悪役を演じてもらわないといけないんだけど、殺しは流石にマズイから安心したよ。

最初のミッションを終えたナンバーズは、予定通りの配置に着く為に動き出した。

同時に、アジト付近の地中に埋まっていた巨大戦艦が姿を表す。研究室で、スカリエッティやウーノと一緒に俺は大型モニターで浮上する戦艦を見る。究極のロストログアと称されるだけあって、かなり巨大だ。その大きさだけで、他の存在を圧倒してる。でも、ぶっちゃけ動きが鈍い大きな戦艦って、恰好の的以外の何物でもないよね。まあ、ちつぽけな人間の蚊みたいな攻撃じゃ、アレを落とすのは無理かな。

それよりも、アレはどうにかならないのかな？ ゆりかが浮上してから、ずーっと興奮しっぱなしの変態医者が笑ってんだよ。いや、普通に笑ってんなら俺も気にしないんだけど、アイツの笑顔ぶっちゃけ気持ち悪いんだよな。イケメンじゃない俺に思われる位だから、相当ヤバいぞ。テンション高くなる気持ちも解るけど、ちょっとは自覚自重してくれ。マジで引くわ。うん、アイツは捕まってもいいかもしれない。

夢の始まりに興奮する狂気の変態医者を放置して、俺は傍に居るウーノに声をかけた。

「ウーノさん。モニター通信の準備いいですか？」

「ええ。いつでも大丈夫ですよ」

よし、やるか。ヤベ、ちょっと、いや、かなり緊張してきたな。深呼吸でもして、落ち着かないとな。

ウーノに頼んだのは、全国ネットのモニター通信だ。これで、機動六課や管理局は勿論、ミッドチルダ全域に映像を流す事が出来る。何か、選挙の演説するみたいで、緊張と恥ずかしさが混ざってきたな。演説なんてやった事ないけど。

それじゃ、ボチボチ始めるか。

「じゃあ、繋げて下さい」

「はい」

答えたウーノは、パネルを操作して作業を開始する。

すると、沢山の大小のモニターが部屋に現れた。通信が繋がったんだ。

「ん、んんっ！ あー。あー」

俺は通信が繋がってから、発声確認をした。緊張してるせいで、行動が逆になっちまって恥ずかしい。

「えー、皆さんこんにちは。これより私達は、聖王のゆりかごを使って地上を制圧します」

丁寧に、地上制圧を宣言しました。いや、だってスカリエッティみたいに馬鹿笑いしたり、漫画の悪役みたいに高圧的に宣言するなんて、俺の柄じゃないんだもん。コレが俺の限界です。

俺の宣言に、機動六課の人間が反応した。大型のモニターに映ってるのは、なのはとフェイトだ。

『貴方達の行為は、大規模騒乱罪になります！ 今すぐ騒乱の停止と武装を解除して、投降して下さい！』

——きたっ……！

予定通り、機動六課が食いついてきた。

「悪いけど、ソレは出来ません」

『貴方は……！』

モニター越しに声を荒げてきたのは、フェイトだ。

『貴方は、さっきの映像を観ていないんですか！？ 何の罪も無い女の子を苦しめて、利用して……何とも思わないんですか！？』

フェイトの言葉が、胸にチクチクと刺さる。

何とも思わない訳ないだろう。俺だって一応人間だし、良心も少しはある。ヴィヴィオがどんな酷い目に遭ってるかも、知ってる。俺の中の僅かな良心が痛んだよ。

けど、だからってココで止める訳にはいかない。ヴィヴィオには本当に悪いが、最後まで付き合ってもらおう。

「別に、何とも思いません」

胸がモヤモヤするのを感じながら、俺は冷たい言葉を放った。
モニターに映るフェイトの表情が、更に険しくなった。

「……そうですか。取調室で、譲れないものがあると聞いた時、貴方なりに護りたいモノがあると思いました……。けど、貴方にはそんなモノ無い！ スカリエッティと同じで、人の命を弄ぶ事を何とも思わない犯罪者です！」

言いたい放題言ってくれるな、フェイトさん。まあ、そう言われども仕方ない返答をしたから、当然か。
しかし、フェイトってクールそうに見えて結構熱くなるタイプだな。まあ、その方が俺には好都合だけだな。

「貴方は、必ず捕まえます！」

射抜くような鋭い目で、フェイトが言い放った。

——待ってたぜ、その言葉！

そう、俺はその言葉を待ってたんだ。

「捕まえる？ 俺達をですか？」

「そうです！」

「この事件の元凶を？」

「そうです！」

フェイトの言葉を聞いた俺は、内心ほくそ笑んだ。

——おっしやあ！ 言わせたぞ、その言葉……！ 俺が欲しかった言質を、皆の前で……！

俺は横目でウーノを見て、視線で合図を送る。ウーノは頷き、パネルを操作して通信を切った。

——決まったぞ、最初の一手……！ 勝利への一步を……！

振り返り、研究室の出口に向かって力強く一歩踏み出す。

後は、突っ走るだけだ。ここからが、本当の闘いだ。

「隼樹さん」

「ん？」

声をかけられたから、俺は足を止めて振り向いた。

何故か、ウーノが妙に暗い顔と言つか、悲しそうな顔をしてる。

「どうしたんですか？」

「隼樹さん。アレで良かったのですか？」

「え？」

「何も、貴方まで悪役を演じる必要は無いと思うのですが……。それでしたら、私やドクターが代わりにやっても構いませんのに……。いえ、寧ろその方が自然です」

ああ、なるほろ。

さつきフェイトにキツイ言葉を浴びせられた俺を見て、気を遣ってくれてるのか。ホント、ウーノは俺の事心配してくれるよな。その気持ちは、マジで嬉しいよ。

「いいんですよ、アレで」

「ですが……」

「そうよ！ あの女、隼樹の気持ちも知らないで好き勝手言っ、ム力つくしさ！」

ウーノに続いて、サードまで俺の為に怒ってくれてる。

やっぱ、皆良い奴等だよ。けど、スカリエッティは除外な。ウーノとサードの優しさに、ちょっと照れてる俺を見て笑ってるから。後で殺す。

「サードもありがとう。まあ、多少堪えたけど、大丈夫だから。寧ろ、悪人上等！ 正義の為と言いながら、やってる事は犯罪の偽善者なんかより、いっそスカリエッティのような悪人の方がよっぽどマシ！ になりたいもんだ、悪人に！」

No.16 逆転への一手（後書き）

——あのクソ餓鬼！ 別発想、別視点……機動六課に勝つ事を早々に諦めて、別狙いにきやがった……！

——さあ、始めよう！ アンタと俺の最初で最後の勝負を……！

次回『勝負の幕開け』

No.17 勝負の幕開け（前書き）

隼樹・赤夜叉「俺達は、全ての最強チートオリ主達に宣戦布告をする」

サード「バ・ロワ？　って言うか、アンタ達じゃ返り討ちにされるでしょ？　瞬殺で」

隼樹・赤夜叉「ですよ〜」

*

セツテ「彼の事は、話で聞いた情報しか知らない。私の任務は、彼を護り、勝利に導くこと。ならば私は、その任務を遂行するだけです。『ナンバーズ』魔法が使えない男リベンジ！』 始まります」

No.17 勝負の幕開け

腑に落ちなかった。

俺は本局の自分のオフィスで、モニターを展開して隼樹の動きを見ていた。正直、何故あんな言動をしたのか理解出来ない。あんな事を言ったところで、奴等が何か得する訳でもない。管理局や機動六課を刺激して、敵愾心を煽るだけだ。

全く理解に苦しむ言動だった。だと言うのに、何か胸に引っ掛かる。単なる馬鹿の挑発とも思える奴の言動に、不安感を抱いてた。杞憂だと思いたいが、不安が拭えない。

何なんだ？ この違和感……得体の知れない不安感は……？

気味悪い不安感を払拭させる為に、俺は考えた。現状や奴がモニターで喋った言葉を、思い返す。

アインヘリアルを襲撃したナンバーズに、特に大きな変化は見られなかった。素人が思い付きそうな、強化が施されてる様子も無い。あれだけの大口を叩いた隼樹が、何もしないなんて考えられない。

次に、モニター越しに見た隼樹の不可解な言動だ。あんな事を言っただって、状況が好転する訳でも無いし、観ている者から不快に思われるだけだ。特に最後の言葉が、意味不明だ。まるで、自分達を捕まえる事を確認してるかのような感じだった。そんな事をして、一体何の意味がある？ わざわざ奴が念押しするように確認しなくても、連中の逮捕——まあ、ナンバーズの何人かは保護だが、捕まえる事は決まって……。

そう思った時、俺は目を見開いた。

——あつ……！ ま、まさか、アイツ……！？

一つの可能性に気付き、俺は動揺した。

「どうしました、藤堂様？」

俺の動揺を見て、部下のアリスが声をかけてきた。どうやら彼女は、奴の狙いが解ってないようだ。

席を立ち上がり、アリスに指示を出す。

「アリス、俺について来い！」

「は、はい！」

急いでオフィスを飛び出して、通路を駆ける。脳裏を過る隼樹を忌々しく思い、自然と拳は固く握り締め、歯を食いしばる。

——やられたっ……！ あのクソ餓鬼！ 別発想、別視点……機動六課に勝つ事など早々に諦めて、別狙いにきやがった……！

奴の狙いは、ある意味で間隙を衝いてる。普通、両陣営の総力戦となったら、戦場に意識や注目が向く。奴は、ソレを利用した。戦場に出てる局員が、全く意識を向けてない所を攻めにきやがった。

通路を駆ける俺達は、途中で足を止めて周囲を見回した。誰も居ないのを確認して、壁の一部に手を触れる。すると、触れた部分の壁が回転して、暗証番号を入力する装置が現れた。番号を入力して、ロックが解除される。

静かに壁の一部が、扉のように開いて目の前に隠し通路が現れた。中に入ると、すぐに入り口は閉じられた。明かりに照らされた通路を進み、二人の局員の姿が見えた。

「藤堂様。どうされましたか？」

局員が俺に気付き、敬礼してくる。

「ココに誰か侵入してこなかったか？」

「え？ いえ、そのような事はありませんが……」

どうやら、俺の方が一足早かったようだな。

俺の予想が正しければ、奴は必ずココにやってくる。モニターでの言動の裏を読み取れば、もうコレしか可能性はない。そう思った時だった。

「やっぱり先回りされてたか」

通路に男の声が上がった。

俺はキツと目を鋭くさせて、声が聞こえてきた方へ顔を向けた。通路の奥から、ガジェット軍を従えた隼樹が、歩いてくる。やはり、奴の狙いはココだったか。ソレは予想通りだ。

しかし、この俺でも予想出来なかった状況になっていた。

「なっ……！？」

近づいてくる団体の中で、信じられない奴らを見つけて驚愕した。

「ば……馬鹿な……！ 何故だ……？ 何故、お前らがココに居る……！？」

信じ難い光景に、思わず声を荒げる。

ガジェット軍の他に、ナンバーズのセツテと囚われの身であるハズのギンガの姿があるのだ。

——馬鹿な！ 何だ、この状況は……！？ セツテはアジトでスリエッティの護衛に就いて、ギンガは洗脳されて地上本部制圧に向かうハズだろう！？ その二人が、何で隼樹と一緒にこんな所に来てるんだ……！？

正直、訳が解らなかった。隼樹と言うイレギュラーな存在の介入で、歴史の流れに多少は変化が生じるとは思っていた。だが、奴とナンバーズ、ましてやギンガまで一緒になってココを攻めてくるなんて完全に計算外だ。予測すらしていなかった。

動揺してる俺を見て、隼樹は口元を吊り上げ、不敵に笑った。

「ああ、やっぱり驚きましたか。まあ、無理も無いですよ。何せ、セツテとギンガさんが一緒に来る事は、俺にとっても誤算だったんですから」

「誤算、だと……？」

「そうです。まあ、俺にとっては“嬉しい誤算”ですけどね」

怪訝に思う俺の前で、隼樹が経緯を語り出した。

*

「隼樹さん」

「はい？」

部屋を出ようとしたら、またウーノに呼び止められた。いや、心配してくれるのは嬉しいけど、俺は行くなって決めたからね。女の子だけ戦わせて、男の俺が何もしないなんて情けないじゃないか。臆病者だけど、これでも一応男だからさ。

しかし、ウーノが俺を呼び止めた理由は、少し違ってた。

「出発する前に、貴方に会わせたい人達が居ます」

「会わせたい人達？」

はて？ 誰だろう？

そう思っていると、扉が開いて研究室に二人の女の子が入ってきた。

「あれっ!？」

二人を見た瞬間、俺は驚きのあまり、目を丸くして声を上げた。研究室に入ってきたのは、セツテとギンガだった。ギンガは、地上本部襲撃の際に重傷を負わせて、捕獲してきたんだ。今は傷も完治した様子で、バリアジャケットとデバイスを身に付けてる。

「え……？ あの、どうしてセツテとギンガさんが……？」

「私が連れてきたんです」

歩み寄ってくるウーノが、説明する。

「隼樹さんの作戦を聞いて、捕らえたギンガの協力を得ようと考えたんです。管理局員である彼女を同行させれば、貴方の作戦には都合が良いと思い、治療を終えて意識が戻ったギンガに貴方の事や作戦の内容を教えました。敵である私の話に、最初は疑いを持っていたようですが、何とか信じてもらい、協力を得る事が出来ました」

「マ、マジですか……？」

いや、マジで驚きだわ。

俺も皆には内緒で準備してたけど、ウーノも俺の知らないところで色々やってたんだ。

「えっと……じゃあ、セツテは……？」

「セツテは、貴方の護衛も兼ねて戦力強化に加えました」

「でも、確かセツテはアジトで……」

「私達の事でしたら、ご心配はありません。それよりも、隼樹さんは自分の身と作戦の事だけをお考え下さい」

優しく微笑むウーノを見て、何だかジンときちまった。

ウーノ、優しすぎるよ。どこまで俺の事心配して、考えて尽くしてくれてるんですか？ もう、お母さんって呼んじゃうよ？ って言うか、お母さんって呼ばせて下さい！

ウーノの優しさに感激しつつ、俺はセツテとギンガさんと向き合った。

まず、ギンガと目が合う。敵地のど真ん中に一人で居る状況に、若干緊張した様子だが、捜査官としての意地か目は鋭い。臆病な俺と違って、堂々としてる。

そんな彼女が綺麗で強そうで、ちょっと憧れる。

「いいんですか、ギンガさん？」

「私は、母を殺した戦闘機人事件をずっと追いつけてきました。その真相に辿り着けるのなら……私は、貴方に協力します！」

なるほどね。

今ので、機動六課での取り調べで、ギンガが熱くなってた理由が解った。母親の死の真相を確かめる為に、必死になってたんだ。多分、捜査官として今すぐにでも、スカリエッティを捕まえたいんだろうな。でもギンガは、スカリエッティを逮捕したい気持ちを抑えて、俺に協力する事で真相解明する道を選んだ。

コレも、ウーノの説得のお蔭かな。

ギンガの方は良しとして、次はセツテだ。まあ、本人も了解済みだろうけど、念の為にね。

「セツテも、いいの？」

「はい。ウーノから、既に話は聞いています。貴方を護り、作戦を成功させるのが私の任務です」

むむつ、やっぱりと言うか何と言うか、セツテは機械的な反応だな。まあ、悪い奴じゃないんだけどさ。もうちょっと、こう砕けた

感じと言うか、人間っぽい感じで喋ってくれるといいんだけどな。

まっ、今はその事は置いときますか。

ともかく、これで二人の助っ人が加わった。ぶっちゃけ、かなり心強く感じる。セツテは、ナンバーズ最強のトーレの教育を受けて、実力ではナンバー2に位置する。ギンガは管理局員だから、俺の作戦に加わってくれるのは好都合だ。

「よしっ！ 行くか！」

予想外の頼もしい助っ人が加わり、気合いも入る。

セツテとギンガ以外にも、サイドにガジェットも居るんだ。
絶対に負けねーぞ。

*

「——という事が、アジトであつたんですよ」

「ぐっ……！」

俺の説明を聞いて、一也が凄い形相で睨んでくる。

気持ちには解らないでもないけどな。俺も同じ立場だったら、予想外の展開に歯を食いしばって相手を睨んでたと思う。

そう、コレは俺や未来を知る一也にとって完全な誤算なんだ。あすればこうなる、と狙った事じゃない。上手く言えないけど、とにかくこうなったんだ。計算とは別に、自然に起きた展開なんだ。俺にとっては、良い展開だけだね。

悔しげな視線を向けたまま、一也が訊いてきた。

「ココへはどうやって入ってきた？」

「本局には、優秀な魔導師の集団転移で入りました。この隠し通路への入り口やパスワードは、ある人物から教えてもらってたんで、問題なく入れましたよ」

優秀な魔導師ってのは、他でもないルーテシアさ。スカリエツティ側で魔導師って言ったら、あの娘こしかいないだろう？ あっ、いや、ゼストとか言うオッサンもいたな。まあ、ぶっちゃけ、未来でドゥーエを殺したアイツの事は、好きになれんがね。理由なんて関係無く、ね。

入り口やパスワードの件に関しては、スカリエツティを通じてドゥーエに教えてもらった。

この大規模な戦争の死角を衝いて、勝つ為にな。

「途中、何人かの局員に見つかっちゃいましたけど、即眠らせました」

何度も言うようだけど、殺しはやってないからな。俺だって、人殺しはやりたくない。勿論、セツテやガジェット達にもやらせたくない。

睨みを緩めず、一也が口を開いた。

「お前の狙いは、最高評議会か……？」

「そうです」

流石、一也だな。あのモニターの一件で、俺の考えを見抜いたな。両陣営の真ん中に立ち、俺と一也は対峙する。

「頭を潰しに来たか……！ 真っ正面からぶつかっても勝てない事を悟って、裏側から崩す為に、最高評議会が居るココにやってきた。そして、モニターであんな事を言ったのは、最高評議会の姿や企み

を世間に公にする為の作戦だな！？」

「その通りです」

ホントに、全部見抜いてんだな。

俺が認めると、急に一也の表情が変わった。さっきまで悔しそうに歪んでた顔が、不気味な笑みに変化した。

「ククク。なるほど、隼樹君の狙いは悪くない。だが……その程度の戦力で潜り込んできたのが、隼樹君の運の尽きだ！」

不敵な笑みを浮かべる一也の周囲に、沢山の人影が現れた。

通路に集まったのは、総勢50人以上の局員らしき魔導師だ。最高評議会が居る部屋に続く通路は、かなり横幅が広いから大人数でも収まる。

魔導師の軍隊を従えた一也は、完全に余裕を取り戻してた。

「カカカ！ 隼樹君にとって最大の不運はこの警備だ！ 最高評議会直属の護衛魔導師部隊！ 言っておくが、この魔導師部隊は今戦場に出撃する魔導師以上の実力者揃いだ。その程度の戦力では、万が一にも突破される事は無い！」

野郎、やっぱそう簡単には通してくれないか。

一也の言ってる事は、ハツタリなんかじゃなさそうだ。魔導師部隊が現れた瞬間、セツやギンガ達が素早く身構えた。あの反応の早さと陰しい顔、相手をかなり警戒してる。つまり、相手の魔導師部隊は手強いって事だ。

確かに厄介そうだけど、悪いな一也。こっちには、誤算とは別に、前もって用意してある切り札があるんだよ。

「ぐわっ！」

「なっ！？」

悲鳴の直後に、驚きの声が上がった。魔導師部隊の一人が悲鳴を上げ、驚きの声を発したのは一也だ。

「どうした！？」

「大丈夫か！？」

近くに居る魔導師が数人駆け寄り、倒れた魔導師を見る。

「切り傷があるぞ！」

「馬鹿な！？ 我々に気付かれずに、一体どうやって……！？」

突然の不可解な現象に、魔導師部隊の何人かは混乱してる。

そりやそうなるわな。連中にとって、意味不明な現象だ。でも、種^{タネ}を明かせば何て事ない。

すると、一也が鋭い目で睨んできた。

ん？ もしかして、気付かれたか？

「貴様……まさか、貴様……！？」

「ククク……！」

おっと、思わず笑いが漏れちゃった。

しかし、一也の気付きは相当だな。勘がいいのか、今の状況を推理して見抜いたのか。まあ、正直どっちでもいい事だけどさ。

「そうです。多分、アンタの考えてる通りですよ。それじゃあ、種明かしといきましょうか」

俺の声を合図に、何も無かった所にロボットが現れた。

ガジェット？型。ガジェットシリーズ最後の型で、実力も最高クラスだ。昆虫のような足が付いてて、両手は鎌、見た目は気持ち悪いが凄い機能を持つてる。ソレは、姿を隠す光学迷彩だ。この機能を使えば、ロボットのガジェット？型は完璧に気配を消して、奇襲を仕掛ける事が出来る。あのエース・オブ・エースの高町を墜とした事もある、高性能ガジェットだ。いや、マジで凄いね。

あの晩、クアットロが見せてくれたのが、このガジェット？型だったのさ。

ガジェット？型を見て、一也は狼狽える。

「ば、馬鹿な……！？ ソイツは、ゆりかごの駆動炉の護りに着いてるハズだ……！」

「その通り。その通りなんですけど、何機か譲ってもらいました」「譲ってもらっただと……！？」

怒りと悔しさで、ギリツと音を立てて一也は齒を食いしばった。コレも、一也にとって計算外の事だろうな。

「ココの警備が、それなりに嚴重な事は大体予想してました。それに、アンタが来る事も」

「何？」

俺の言葉に、一也は怪訝そうに片眉を上げた。

「アンタなら、俺の計画に気付いてココに駆け付けてくる。思ってた通りに、アンタが来てくれて安心しました。だって俺が倒したいのは、最高評議会ともう一人……」

一旦言葉を切り、俺は一也を指差した。

「アンタなんだから……！」

「ぐっ……！」

これで舞台は整った。

「さあ、始めよう！ アンタと俺の最初で最後の勝負を……！」

No.17 勝負の幕開け（後書き）

——殺すっ……！ 奴等を……いや、隼^{ヤッ}樹を、
ココでキツチリと……
……！

次回『躊躇してる時じゃない』

No.18 躊躇してる時じゃない(前書き)

ギンガ「世の中には、不測の事態と言うのが起こります。ソレは、
良い方にも悪い方にも起こる可能性があります。運命を変える為に
闘う彼に起こる不測の事態は、どちらになるのか？」ナンバース
「魔法が使えない男リベンジ！」始まります」

No.18 躊躇してる時じゃない

こんなハズじゃなかった。

あの隼樹^{ガキ}、ナンバーズだけじゃなく本来戦場に出ているハズのギンガやガジェット？型を数機ひっさげて来やがった。

クソッ！ 俺とした事が、こうなる事は予測しておくべきだった。戦力、実力で劣る奴等が巨大な組織に勝つ最も有効な手段は、トップを潰す事だ。しかも、時空管理局のトップである最高評議会は、今回の事件の元凶だ。奴等の狙いは、最高評議会の今までの悪事と今回の事件の真相を世界中に暴露する事だろう。そうなれば、戦闘で敗北しても管理局側の不祥事が世間に明かされ、批難を受け、ナンバーズの刑が軽くなる。

奴はソレを狙って、ココを攻めてきたんだ。

今、俺の前では奴の軍団とこちらの魔導師隊が戦闘をしている。

戦況は、正直あまり良いとは言えない。？から？型のガジェットは問題ではない。ソコは問題無いのだが、厄介なのは？型のガジェットだ。あのタイプのガジェットは、光学迷彩で姿を消す事が出来る。ロボットだから、気配や魔力で動きを察知する事も出来ない。純粋な戦闘力なら、こちらの魔導師の方が上のハズだが、姿を消されては分が悪い。

ソレに加え、完全戦闘型のセツテに魔法と格闘技を使いこなすギンガが居る。ガジェット？型ばかりに気を取られてる魔導師の隙を見逃さず、ブーメランブレードで吹き飛ばし、突きや蹴りで倒している。

しかも、

「鬱陶しいわね！」

奴等に混じって、妙な女が一人居る。

長い金髪を左右に分けた女だ。半壊した機動六課隊舎で見た女なのだが、どうやら人間では無いようだ。背中から、ガジェット？型の持つ太いアームのような物を出して、魔導師を薙ぎ払っている。アームの先からは光線を撃ち、明らかに人間では無い。隼樹の他にも、イレギュラーな奴が出現したのだ。

隼樹の手駒と俺の手駒では、奴等の方が一枚上手だ。こちらが奴等より勝ってる部分は、数だけだ。

マズイ。このままでは、遅かれ早かれ突破されてしまう。

「ぐっ……！」

目の前の戦況を眺め、俺は逆転の方法を考えた。

最も手っ取り早いのは、こちらが先に最高評議会を始末してしまう事だ。隼樹の狙いは、あくまで最高評議会の逮捕であり、ソレには連中が生きている事が絶対条件となっている。つまり、先に最高評議会を始末すれば、奴の計画は破綻する。こちらの勝ちだ。

しかし、事はそう簡単ではないのも事実だ。現状では、こちらは奴等に押されてる形になっている。そんな状況で、最高評議会を始末する為に俺や何人かの魔導師を退かせたら、士気に影響が及び、数も減らす形になって奴等に突破の好機を与えてしまう。

緩められないっ……！

このギチギチに閉じられた兵の壁は、緩められない。ココは、最終防波堤、俺の最後の砦なんだ。この場を突破されたら、それこそ終わりだ。

歯を食いしばり、汗まみれの拳を強く固めた。

甘く見ていた。あのガキが、ここまでの戦力を揃えてくるなど考えてもみなかった。俺とした事が、とんでもない誤算、不覚だ。

「藤堂様……！」

俺の動揺を察したのか、秘書のアリスが心配した顔で寄ってきた。今の戦力で、奴等を押さえ切るのは不可能だ。となれば、俺に残された手は一つしかない。

「アリス……」

「はい。何でしょうか？」

「アレがあつたな……！」

「え……？」

ちつ、察しの悪い女だ。

この最悪の状況で、アレと言ったら一つしかないだろう。何とか苛立ちを抑えながら、俺は言った。

「このくだらない戦いが終わり、ほとぼりが冷めた後に動かそうとしてた奴だ」

「あつ……！」

ようやく分かったか。

「アレを動かすぞ……！」

「で、ですが藤堂様。アレはまだ未完成で、テストも完全には終了していません……！ 今動かすのは……」

「テスト終了前もクソも無いっ……！」

苛立ちを抑え切れず、とうとう俺は声を荒げた。

急に声を荒げた俺に、アリスは驚いてビクリッと体を大きく震わせた。

この馬鹿女は、今の状況が解っているのか？ ココを突破されたら、全てが水の泡になるんだぞ！

「ココの突破だけは、絶対に許す訳にはいかないんだっ……！　その為には、手段なんか選んでいられない！　殺すっ……！　奴等を……いや、隼樹^{ヤツ}を、ココでキツチリと……！」

そうだ。今は手段なんか選んでる余裕は無いんだ。どんな事をしなくても、ココを守り切る事が先決だ。使い物にならなくなれば、また造ればいいだけの事だ。大事な今は今だ。

「分かったら行けっ！　アレを起動させるんだっ……！」
「は……はっ！」

俺の命を受け、アリスは踵を返して走り去っていった。
アリスの背中が見えなくなり、俺は忌々しげに隼樹を睨んだ。

こなったら、躊躇してる時じゃない。何が何でもココを死守して、奴を殺すんだ……！

その為にも、今は耐えるんだ。俺の最終兵器——アレが届くまで、この兵隊の壁で持ち堪えるんだ。この壁を突破されたら、もう守る手段は無い。

イレギュラーにはイレギュラーを、だ。

*

「よしっ！　いいぞ！」

戦況は、思つて以上に有利な展開になつてゐる。

一也が集めた魔導師隊は、確かに強い。けど、それでも俺達の方が優勢だった。コレは、ガジェット？型を連れてきた事が大きい。いくら魔導師が強くて、姿を消せる相手となると戦い難くなる。

しかもガジェット？型ばかりに意識を向けてると、ソードやセツテ達が隙を衝いてくるからな。ソードとガジェット？から？型だけじゃ、こうはならなかったね。ホント、クアットロが？型を譲ってくれて助かったぜ。スゲー感謝してる。戦いが終わったら、改めて礼を言わないとな。

それにしても、と俺は戦ってるソードを見る。セツテが強い事は知ってたし、ギンガもそれなりに強そうだとは思ってたけど、まさかソードがここまで凄いとは思わなかった。背中から二本の太いアームを伸ばして、薙ぎ払うように魔導師に攻撃を仕掛けてる。それだけじゃなく、アームを合体させて何かデカい大砲になってレーザー砲撃まで撃ちおった。何かAMFのオマケ付きみたいで、相手の障壁を突き破って魔導師を何人も吹っ飛ばしてる。

——マジパネエよ。

元々戦闘機能が付いてたのか、今日の戦い前にスカリエッティから改造を受けたのか分からんが、とにかくソードも強かった。

ソード達の活躍で、見る見る敵兵が倒れ、数が減っていく。無論、こっちのガジェットも何機か破壊されてるが、俺達の優勢に変わりは無い。それに、壊されたガジェットは無駄死にじゃない。アイツ等が意地張って踏ん張ってたお蔭で、敵は明らかに疲弊してる。恐れを知らないロボットだからこそ、躊躇無く突っ込み、敵にプレッシャーをかけて精神的にも追い詰める事が出来る。

——勝てる……！ いや、勝つつ……！ 絶対に勝ってやる……！

戦況は優勢で、順調に進撃してる。ガジェット？型とセツテ達の高い戦闘力が上手く合わさって、次々に魔導師を倒していつて。ただし、殺しはしない。人殺しは絶対にしないよう、全員に言ってる。俺達の目的は、あくまで奥に居る最高評議会を表に引っ張り出す事だ。

そう、順調に進んでいた。

なのに、戦いの最中で俺は妙な違和感を憶えた。そのキツカケは、敵兵の奥に居る一也と目が合った時だった。

アイツは、険しい顔で俺の方を睨んでいた。一見すると、目障りな俺をただ睨んでるようだが、何か引つ掛かった。アイツの顔は、ただ単に俺を憎んでる表情じゃなくて、何か、こう……イライラしてる感じだった。まるで、何か待ってるような。

いや、と俺は頭を左右に振った。考え過ぎだ。初めて大きな戦いつてヤツに参加したせいで、緊張していらん不安を抱いてるんだ。

俺は、必死に気のせいだと自分に言い聞かせ、不安を振り払おうとした。

けど、一向に俺の中の不安は消えなかった。

相手の魔導師の数は、もう残り僅かだ。そろそろ、姿を消したガジェット？型がすり抜けられる位の隙間が出来てる。正体の解らない不安が胸中に渦巻いてるが、目の前には好機が出来つつあった。現に、一也の顔色はさっきよりも悪くなっている。奴にとって、コレは想定外の事態なんだ。

ガジェットには、道が出来次第、前に進むようあらかじめ指示を与えてある。今指示を飛ばさなくても、ガジェットは自己判断で兵の隙間を縫って奥に進むハズだ。

相手の魔導師の数は、もう五、六人にまで減っていた。こっちも、それなりの被害はあるが優勢には違いない。

コレならイケる！

そう思った時だった。

一際大きな金属が砕ける音が、通路に響いた。

「えっ！？」

一同の視線が、音の出所に向けられた。

ソイツを見た瞬間、ゾクツと背筋に悪寒が走った。

視線の先に、見た事も無い異形が居た。思わず自分の目を疑った。全体的には人の形に近いが、顔が人間のモノではない。トカゲのような、爬虫類の顔をしている。まるで特撮ヒーローに出てくる怪人

のようだ。

実際にあんなモノを見ても恐がらないだろう、と思ってたが、そうでもなかった。ソイツを見た俺は、完全にビビってた。

「何なんだよ、アレ……？」

絞り出したような声で、疑問の言葉を出した。自分でも驚く程、震えていた。

セツテ達も突然現れた怪物を警戒してか、見据えたまま動きを止めていた。

謎の怪物が現れた途端、追い詰められてた一也が冷や汗を流しながらも余裕の笑みを浮かべた。

「ククク……！ コレでお前等の快進撃も終わりだ、隼樹……！」

いいぞ、好きなだけ攻めてこい。雑魚が何匹かかってこようが、問題無い……！ 全てコイツが蹴散らす……！ 俺が造った半生物兵器でな……！」

「半、生物兵器……？」

一也の言葉を聞いて、半ば啞然とした様子で呟いた。

一也は、狂気染みた笑みを浮かべ、言った。

「やれ、ガルマっ……！」

指示が出た直後、異形——ガルマが動き出した。

何も無い所に跳んだガルマは、拳を固めて鋭い突きを放った。宙に放たれた突きは、ガシャンと硬い物が壊れる音が鳴った。突いた空間が歪み、バチバチと放電したかと思うと、ボディを貫かれたガジェット？型が現れた。

「なっ!？」

「まさか……ガジェットの位置を見破った!？」

近くで身構えていたセツテとギンガが、驚愕の声を上げた。

勿論、俺やサードも驚いた。光学迷彩で姿を消した?型を捉えるなんて、信じられなかった。

俺達の驚く様を見て、一也が笑い声を上げた。

「カカカ……! 残念だったな、隼樹! ガルマに、ガラクタの小細工は通用しねーんだよ!

ソイツはな、魔力の他に、熱源で相手の動きや位置を把握するんだ! 熱は人間もガジェットも持っている共通のエネルギーだから……姿が見えないなんて、関係無いんだよ!」

そして、一也が解説を終えた直後、ガルマはガジェットの群れに向けて大きく口を開いた。

次の瞬間、口の中にエネルギーが溜まって、ソレをガジェットの群れに向けて一気に放出した。放たれたエネルギーは光線のように宙を飛び、ガジェットの群れに直撃して、通路を揺らす大きな爆発を起こす。

煙が晴れていき、粉々になったガジェットの残骸が見えてきた。

ガルマの砲撃の威力を見て、俺は尻餅をついてしまった。足もガクガク震えてる。

「セツテ! サード!」

「言われなくても!」

「分かってるわよ!」

想像以上の脅威を目の当たりにして、ギンガは殲滅に動くよう二人に声を投げた。

三人は、それぞれ三つの角度から攻撃を仕掛ける。

「ナックルバンカー！」

「IS・スローターアームズ！」

「喰らえっ！」

ギンガは背後から硬質フィールドを纏った拳の突きを放ち、セツテは左側から二つのブーメランブレードを飛ばし、サードは右側から砲撃を放った。

空が無い通路では、逃げ場は無い。流石にコレは避けきれないと思ったが、驚きの光景を目にした。

「なっ！？」

攻撃を仕掛けた三人が、同時に驚愕した。

ガルマは回避しないで、三人の攻撃を防いでいた。半球状のドームのような障壁で体を覆って、三方向の攻撃を受け止めてるのだ。

「無駄だっ……！ ガルマの障壁は強化されてる上に、魔法を無効化させるAMFも含まれてる！ 物理攻撃・魔法攻撃に対する対策は万全なんだよ！」

「そ、そんな……！？」

三人はガルマから離れて、間合いを広げた。

俺は、余裕を取り戻した一也を睨んだ。

——あの野郎……！ なんてモノ隠し持ってたやがんだ……！

こんな隠し玉があったなんて、想定外だった。違法研究の実験体を持つてるのは、スカリエッティだけと決めつけてた。その思い込み、決めつけで足を掬われた。

「決める、ガルマっ！ そのクス共に、力の差を見せてやれ！」

一也の指示を受け、ガルマは体勢を変えた。

屈んで両手を床に着け、四足歩行の獣のような構えを取る。目は先ほどよりも鋭くなったように見え、獲物を狙う獣のような威圧感を放っている。何か仕掛ける気だ。

敵の異変を感じた三人、それにガジェット達も対応出来るよう身構えた。

メキメキと四肢に力が入る音が、耳に入ってきた。

何をするつもりなのか、と凝視していると、次の瞬間にはガルマの姿が視界から消えてた。

「え……？」

呆けた声を出した直後、一体のガジェットが斜め縦に割れた。

「えっ！？」

壊れたガジェットの目を向けた直後、また別の方向から何か壊れる音が聞こえた。

まさか、と思い振り向くと、ソコには真ん中に何か貫通したような穴が空いたガジェット？型があった。

何が起きてるのか解らず、通路全体に目を向けた俺は、驚愕して目を見開いた。

俺の目に飛び込んできたのは、線だった。ダダダダッと激しい音を立てて、線が幾つも通路内を物凄い速さで飛び交っていた。

ガルマだ、と直感した。多分、手足の異常な筋力で床、天井、壁を蹴って飛びまわってるんだ。更に厄介なのが、縦横無尽に跳び回ってて、動きや攻撃の軌道が全然読めない。並の人間の俺じゃあ、沢山の線が通路内に引かれてるように見えるだけで読みもクソも無

い。

「動きが読めない！」

「メチャクチャよ、コイツ！」

ギンガ達ですらガルマの動きは捉えられず、どう対処したらいいの
か困惑していた。

そうこうしてる間に、次々とガジェットが破壊されていく。

腹の底から悔しさが込み上げてきて、俺は固めた拳で床を殴った。
見てるだけの自分が、ふがいなくて、何も出来ないのが悔しい。

そして、ガルマの牙はセツテ達にも襲いかかった。

「がはっ！」

無防備の背中を強打され、ギンガは床に倒れた。

「ぐあっ！」

セツテは、二本のブーメランブレードを破壊され、腹に砲撃並の
打撃を受け、前のめりに倒れた。

「ぐっ………！」

サードは、両足を破壊されてバランスを崩して床に倒れた。更に、
背中から出ているアームも破壊して、武装を無力化させた。

五分も経たない内に、戦況はひっくり返された。

「み、皆………！」

倒された皆の元に駆け寄ろうとしたが、ソレは叶わなかった。

突如、目の前に黒い物体が現れ、行く手を阻まれた。
ガルマだ。

「がっ……!!」

左頬を拳で殴られ、床に倒される。

更に体の上に乗られ、身動きが取れない状態になった。何とかどかそうとするが、物凄い怪力で押さえられて全然動けない。

「じゅ……隼樹い！」

サードの呼ぶ声が、聞こえた。俺よりも危険な状態なのに、こんな時でも俺の心配をしてくれてる。

セツテ達も受けたダメージが大きそうで、すぐに動けないようだ。

「ハハハハハ！」

次に聞こえてきたのは、一也のム力つく笑い声だった。
カツカツと足音を鳴らして、一也が近づいてきた。

「終わりだ、終わり……!! 終戦! 敗者決定っ……!!」

俺を指差して、一也が敗者宣告をした。

「ぐっ……!!」

涙目で一也を睨む。

怪物に追い詰められた恐怖、一也に言いたい放題言われる悔しさ、ソレらの感情が渦巻いて、目から涙が出てきた。

——くそっ……!! ここまで来たのに、負けるのかよ! 結局、

歴史は変えられないのかよ……ちくしょう……！

心中で悔しさを叫ぶ俺を見下ろして、一也は笑う。

「これで解つただろう！ お前のような弱者が、運命を動かせる訳ねーんだよ！ お前みたいなクズは、一生勝てねーんだよ！ クズっ！ クズがつ……！」

俺を見下し、暴言を吐いてくる。

何か言い返してやりたいが、言えなかった。悔しいけど、今の俺は敗者以外の何者でもない。

悔し涙を流してる時だった。

「藤堂様……！」

一也の後ろから声が聞こえた。

女の声だ。

一也が振り返った先には、さっき居なくなった女局員が立ってた。急いで来たのか、少し息を切らして肩を揺らしてた。

「おおっ、アリスか。ガルマの起動、ご苦労だったな」一也は機嫌良く部下に言葉をかけた。

「今、この身の程知らずの馬鹿にトドメを刺すところだ……！ クク……コレで全て解決だ……！ コイツさえ消せば、邪魔者は居なくなり、俺の時代がやってくる……！」

仲間が倒され、俺自身も取り押さえられて身動きが取れない。

絶体絶命の状況だ。この状況をひっくり返すのは、無理だ。一也のように、隠し玉でも無い限り――。

そう、諦めかけた時だった。

ドスッ、と何か刺すような音が耳に入った。俺が、ガルマに手刀

か何かで刺されたのかと思ったけど、体に痛みは感じなかった。すると、ポタツと何か雫が落ちてきた。視線を下げる途中で、赤い液体が目に入った。その赤い液体は、俺に乗っかってるガルマの腹の辺りから滴り落ちていた。

「え……？」

偶然にも、俺と一也の声が重なった。

ただ、一也の方が若干驚きの気が大きい感じだ。

「あら、ごめんなさい。隙だらけだったので、つい刺してしまったわ」

ガルマの背後から、聞き覚えのある女の声が聞こえた。

顔を動かして、ガルマの背後を見ると、意外な人物が居た。

ガルマの背後から刃物を刺したのは、なんと一也の部下のアリスと言う女だった。

「なっ……！？ アリス！ 何をしてる！？」

部下の凶行に、激しく動揺した一也が声を荒げた。顔色を悪くさせて、後ずさる。

アリスは刃物を抜き取り、ガルマの体を押した。不意を衝かれたガルマはバランスを崩し、俺から離れた。その隙に、アリスは俺の腕を掴んで引っ張り、立たせた。

「え？ え？ え？」

訳が解らず、俺は混乱する。

どうして敵側の彼女が俺を助けたのか、全然解らない。

「貴様……誰だっ……！？」

ワナワナと体を震わせて、一也は怒声を上げた。

頭に血がのぼって熱くなってる一也に対して、アリスは冷徹な笑みを浮かべた。

「この子のお姉さん、と言ったところかしら？」

答えた直後、アリスの姿が変化した。

一也と俺は、驚愕して目を大きく見開いた。

「ああっ……！」

「ドゥーエさん……！」

俺を助けてくれたのは、ナンバーズのドゥーエだった。

No.18 躊躇してる時じゃない(後書き)

次回『決着』

No.19 決着（前書き）

隼樹「俺なんか、在なくてもいいんじゃないかって思ってた頃があった。そんな考えをしてたら、トーレに叱られて模擬戦までやらされて、ボロボロにされた。けど、その時にトーレに認められた気がして、嬉しかった。だから、こんな俺でも何か出来るんじゃないかなんて思った。だから、こんな柄でもない事してるのかもしれない。『ナンバーズ』魔法が使えない男リベンジ！』 始まります」

世の中には、誤算ってヤツがある。

どんなに綿密に計画を立てても、計算外の出来事がどうしても起きる時があるんだ。しかし、ソレが必ずしも悪い方とは限らない。

そして、俺の身に起こったのは嬉しい誤算だった。

一也の切り札の怪物に追いつめられ、絶体絶命の窮地に立たされた俺を助けてくれたのは、ココに居ないハズのドウエだった。

「ドウエさん！」

目に涙を一杯に溜めて、俺はドウエに抱き付いた。驚きよりも助かった安心感が大きくて、涙が止まらねえ。

そんな俺を抱いて、頭を撫でるドウエはまるで姉のようだった。

「ば、馬鹿なっ……！ な、何故お前がココに居る！？ お前は地上本部で死ぬハズだった！」

突然乱入してきたドウエを見て、俺と同じかソレ以上に動揺してるのは一也だった。まるで幽霊でも見るように、蒼ざめた顔をしてワナワナと震えている。

まあ、未来を知ってる奴なら当然の反応だよな。

ドウエは一也に顔を向け、不敵な笑みで言った。

「確かに、私は地上本部でゼストに殺されるハズだったわ……けど、その時、一機のガジェットが助けに入って命拾いしたのよ。当然、その後ゼストは始末したわ。殺しにかかってきたのだから、逆に殺されても文句は言えないものね？」

「な、何い！？」

「マジっすか!？」

ドゥーエの語る真相に、一也と俺はほぼ同時に驚きの声を上げた。
——いや、殺っちゃったんすか、ドゥーエ!？　しまったアアアアア！　人殺しは無しつて方向の旨が、ドゥーエにまで伝わってなかったアアアアア！　完全にミスったアアアアア！　でも、ちょっとスッキリした黒い俺が心の中に在る！

内心にもシャウトした俺は、複雑な心境を抱いた。

光学迷彩で姿を消したガジェット？型を地上本部に向かわせ、ドゥーエを救出させる。作戦は上手くいってドゥーエは助かったが、まさかゼストを返り討ちで殺すとは……こいつはちと予想外だった。てつきり、そのまま逃げるものとはかり思ってたからな。

ただでは引かない、ソレがドゥーエか。恐い。そんな恐い女に抱き付いてんだよな、俺。

「ぐうつ……!」

一也の顔色が悪くなっていき、表情が歪んで齒を食いしばる。

ドゥーエの生存は、一也にとって完全に誤算だった。あともう少しで俺を仕留められたのに、思わぬ邪魔が入って奴の計画がどんどん狂っていく。

ん？　待てよ。さっきドゥーエは、一也の部下の女に変身してたよな？　まさか……殺ってないよね？

正直、確認するのが恐いけど、気になる。

「ドゥ……ドゥーエさん？」

「何かしら、隼樹？」

「その……ドゥーエさんが変身してた元になった女の人なんですけど……その人はどうしたんですか？」

「ああ、彼女なら廊下で眠ってるわ」

そこで俺は唾を飲み込み、自然と声を潜めた。

「……殺しっすか？」

「気絶よ」

心外とばかりに、ドゥーエは顔を顰めた。

いやだって、ゼスト殺しが発覚した後じゃ嫌でも殺しの可能性を考えちゃいますよ。でも、まあ、結果手にあの女は殺してないみたいだから、良しとしとくか。ゼストはご愁傷様だけど……。

「くっ……！ ガルマっ！」

一也の声で、俺はハッと気付く。

そうだった。ドゥーエ生存に喜んで忘れてたけど、まだ状況は変わって無かった。あの化け物がいるんだ。

「隼樹。下がってなさい」

ドゥーエの顔からも笑みが消え、真剣な表情でガルマと対峙する。ガルマは、ドゥーエにさされた腹の傷を右手で押さえて、無言で突っ立っていた。傷を負っても悲鳴一つ上げないところが、何か不気味だ。

「ソイツ等を殺せっ！」

一也の命令を受けたガルマは、走り出した。

猪のような突進で距離を詰め、空いてる左手を振り上げ、鋭い爪で切り裂こうと振り下ろす。しかし、ドゥーエが後ろに避けた事で空振りとなった。

ドゥーエの奇襲で受けた傷が響いてるのか、動きが明らかに鈍っていた。

これならイけるか？ と思った。

相手の一撃を避けたドゥーエが、鉤爪かぎづめのような固有武装の突きを繰り出す。だが、彼女の攻撃も決まらなかった。鉤爪の切っ先がガルマの体に届く寸前で、障壁に阻まれたのだ。

「くっ……！」

攻撃を防がれ、ドゥーエの顔が険しくなる。

くそっ、やつぱ状況は好転してねーな。ドゥーエは戦闘機人だけど、主に潜入任務に特化してるから戦闘能力は、そんなに高く無い。そりゃ、並の魔導師とかなら退けるだろうけど、相手は並も大盛りも超えた化け物だからな。魔導師や戦闘機人とも一線を画してるあの化け物と、正面から闘り合って勝つのは難しい。

ドゥーエの一撃で動きが鈍ったとは言え、厄介な相手である事に変わり無い。

どうすればいいんだ？ と俺が悩んでる時だった。

「はあっ！」

突如別方向から声が上がリ、直後に硬い物同士がぶつかり合う音が鳴った。

見ると、さっきダウンさせられたセツテが、ガルマの障壁に拳をぶつけていた。

「やあっ！」

続いて、ギンガも体を回転させ、魔力と勢いを乗せた回し蹴りを繰り出す。ガツンッと大きな音を響かせ、蹴りは障壁に当たった。

しかし、ガルマの障壁の硬度は高く、二人の攻撃を受けて傷どころかヒビ一つ出来てない。

「くっ！ 厄介な障壁ね……！」

ガルマの障壁の硬さに、ギンガが顔を顰めた時だった。急にガルマが振り返り、大きな口を開いた。何なのか一瞬解らなかったが、口の中で生成されていく光の塊を見て理解した。

「セツテ、離れて！」

危険を察知したギンガは、近くに居るセツテに訴え、自分も急いで横に跳んだ。

直後、閃光が走った。ガルマの口から放たれた紫色の光線が、二人の間を通過して壁に当たる。光線は軽々と鋼鉄の壁を突き抜け、大きな穴を作った。

「全く……！ 一体幾つの能力を備えてるのよ！？」

ガルマの戦闘能力を目にして、ドゥーエは舌打ちした。闘って、初めてガルマの強さを知る。

ヤベーな。このままじゃ、勝ち目ねーぞ。ガルマが弱ってても、こっちの攻撃が通らなきゃ意味が無い。

って言うか、俺さつきから観てばつかで何もしてねーじゃねーか。何か、凄く情けねえな。でもなあ、だからと言って俺に何が出来たの？ って話だよ。仮に俺が闘いに参加しても、すぐに返り討ちに遭うのがオチだ。そりゃそうさ。だって人間だもの。弱っちい人間なんだから、確実にドゥーエ達の足引っ張るぜ。だったら、下手に闘いには参加しない方がいい。

でも、このまま何もしないってのは嫌だな。

何か、俺に出来る事は無いのかよ？

その時、ふと思った。

——つか、俺が一也倒しちゃえばいいんじゃない？

そっぴやそうだ、と俺は頭を抱えた。

そっぴだよ！　だつて、あのガルマつて化け物、一也の命令で動いてんだから！　命令送る奴が居なくなる……いや、止まるよう命令を送れば、機能停止みたいになるんじゃない？　待機モードみたいなだつて、半生物兵器つて事は機械も含まれてるじゃん！　半分ロボットみたいなものじゃん！　ヤベツ！　何か勝機見えてきたら、テンション上がったきた！

よし！　そうと決まれば実行あるのみだ！

ガルマをドゥーエ達に任せて、俺は一也に向かって駆け出した。あの野郎をタコ殴りにして、意地でも停止命令を出させてやる。そう意気込んで、闘いの成り行きを見守ってる一也の顔目掛けて、拳を振り抜く。

「なっ……！！？　がぶっ！」

闘いに気を取られてた一也は、俺に気付くのが遅れて拳を左頬に受けた。

倒れる一也の体に跨り、マウントポジションを確保して再び殴る。

「藤堂っ！　ガルマを止めろ！　お前が停止の命令を出すまで、殴り続けるぞ！」

「ぐっ……！！」

一也は、両腕を顔の前で交差させて、ガードしている。なかなか拳が一也の顔に届かない。

だあゝ、くっそゝ！　喧嘩なんかほっとんとした事無いから、上手い攻め方がいまいち分からねえ！

とにかく、無我夢中で拳を振るい続けた。
だが、俺の攻勢も長く続かなかった。

「調子に乗るな！」

単調な俺の殴りの隙を縫って、一也の拳が顔に飛んできた。
鼻にガツツと思いつ切り拳を受けて、俺はたまらず顔を手で覆って怯んだ。マジで殴られたのも、コレが初めてだった。ぐわアアア！ マジ痛え！ 潰れてね！？

その隙に一也は立ち上がって、痛みに悶える俺を蹴り倒した。完全に形勢が逆転しちまった。ヤバい。非常にヤバい。

「お前みたいなクソガキが、俺に勝てる訳ねーだろうが！ ああ！？」

怒りの形相で、一也が倒れた俺を蹴ってくる。

頭、腹、腕、足、とにかくメチャクチャに蹴ってきやがる。俺は頭と下半身にある急所を守るので精一杯だった。甲羅に籠った亀の気分だ。ああ、ちくしょう！ 一也の蹴りも容赦無いぜ！ 体中が痛えよ！

「鬱陶しいんだよ、お前は……！ さっさと消えろ！ 死ねっ！
カス！ ゴミ！ クズが！」

物凄く腹の立つ罵声を浴びせてくる一也。

ああ、そうさ。お前の言う通り、俺は自他共に認めるクズさ。努力なんてしないで、色んな事から逃げてきた駄目野郎さ。けどな、そんな俺だけど、コレだけは逃げる訳にはいかねーんだよ。柄じゃ無いけど、勝ちたいんだよ。勝って、皆ともつと一緒に居たいんだよ。

けど、手も足も出ない状況だから、悔しい事に反撃出来ない。
ああ、弱い自分が憎い。
そう思った時だった。

「そこまでよ……！」

「あ!？」

突然割り込んできた声が聞こえたと同時に、一也の蹴りが止まった。

ボロボロになった顔をゆっくり上げると、一也の足を止めてるサードが居た。壊れたハズのアームが伸びて、一也の足を掴んで動きを止めてる。

「サード！」

「き、貴様……！」

一也は、足を掴んでるアームを外そうと必死になるが、外れる気配は無い。ガツチリと掴まれていて、人間の腕力じゃビクともしない。

立場の悪さに動揺する一也に、サードは素晴らしく素敵な笑顔に向けて言った。

「アンタが死ねっ！」

固く握られたサードの拳が、一也の顔面にクリティカルヒットした。

「ぶべっ！」

下品な悲鳴を上げ、一也は吹っ飛んで壁に叩きつけられた。

一つ溜め息をついてから、サードが体を起こしてくれた。

「大丈夫、隼樹？」

「あ、ああ。ありがとう。って、サードの方こそ大丈夫なの？」

「ええ。壊れた脚は、他のガジェットの残骸を取り込んで、修復したから」

「スゲエ！」

そんな機能まで付いてるのかよ。サードも、他のガジェットと一線を画してるな。

「そつだ、藤堂は！？」

目的を思い出して、俺は慌てて吹っ飛んだ一也に顔を向けた。

さっき思いつ切りサードに殴り飛ばされたからな。死んでなきやいいけど、大丈夫だよな？

「ぐっ……がはっ……！」

おっ、生きてる生きてる。

良かった！マジホッとしたぜ。コレで死んでたら、色んな意味で洒落にならないからな。サードは人殺しになっちゃうし、最悪ガルマも止められないかもしれないからな。

俺はサードに肩を借りて、まだ意識がある一也に近付いた。

「藤堂……！ガルマを停止させる命令を出すんだ」

「くっ……誰が、出すか……！」

倒れてる一也は、傷と汚れのある顔を上げ、睨みと共に言った。まあ、そう簡単に言わねーわな。コイツは俺が来るよりも前に、

この世界に来て準備してきたみたいだし、自分の計画を簡単に諦める訳ねーか。

だけど、状況が状況だから、利口な判断をした方がいいぞ。

隣のサードが屈み、手を伸ばして一也の首を掴んだ。ギョツとする一也に、キレ気味にサードが言う。

「アンタ、状況解ってんの？ ガルマに助けを求めても、来る前にアンタを殺す事だつて出来るのよ？ 死んだら計画も何も無いでしょう？ つまり、完全に『詰み』って事よ」

「ぐっ……！」

一也の顔が歪む。

「ぐぐぐう……！」

その目には、涙が浮かんでいた。

自分が完全に追い詰められた事を悟り、悔し涙を流したんだ。自身の安全確保の為に、一也は闘いの場から離れた所に居た。ソレが仇になった。

「ほらほら、命が惜しかったらさっさとしなさいよ。こっちだってゆっくりしてる暇は無いんだから」

グイグイと一也の首を掴んでる手を動かして、サードが急かす。

おいおい、殺すなよ？

でも、早く停止命令を出してもらわないと困る。あまり時間をかけたくないし、ドゥー工達もいつまでも持ちこたえられないだろうしな。

ややあって、一也は観念したように項垂れた。
そして、

「と……止まれ、ガルマ！」

遂に一也が停止命令を出した。

ソレを合図に、ガルマの動きはピタリと止まった。ゼンマイが止まった人形のように、ピクリとも動かない。

完全に停止したガルマを見て、俺は一安心して胸を撫で下ろした。ガルマが、命令にだけ動く奴で助かった。もしも、ある程度の自己判断能力があったら、ドゥーエ達との戦闘を中断して、すぐに一也護衛に動いてたらどうなった事か。多分、俺等負けてたな。

一也の命令で動きが止まったガルマを、ドゥーエ、セツテ、ギンガの三人の一斉攻撃で倒した。一也の野望は、ガルマの肉体と共に粉々に砕け散った。

奥の手を潰され、一也は完全に覇気を失った。茫然自失になって、死人のように頂垂れている。

一步違えば、俺がああなってたんだな。

まあ、何はともあれ勝った。一也に勝った。

だけど、まだ終わりじゃない。

最後の仕事が残ってる。

さあ、この闘いの決着をつけよう。

ドゥーエとセツテに通路を任せて、俺はサイドとギンガを連れて奥に進んだ。

*

「キモっ……！」

ソレが最初の言葉だった。

俺達がやってきたのは、今回の事件の黒幕である最高評議会が居る部屋だ。いや、部屋と言うより空間って表現の方がいいのか？
広くて薄暗くて、何か鉄板のような物が何枚も宙に浮いてる。

『き、貴様等、何者だ！？ どうやってココまでやってきた！？』

空間に、動揺する老人の声が響いた。

声の主は、あまり直視したくねーんだけど、目の前にある三つの生体ポッドの中身だ。

聞いて驚け、中身は何と人間の脳髓だ。うう、マジで気持ち悪い。ギンガなんか、自分の組織のトップの予想外にショッキングな正体目の当たりにして、目を見開いてフリーズしちゃってるよ。傍に居るサードが、正気に戻すよう頑張って呼びかけてる。

俺も込み上げてくる吐き気を必死に抑えて、連中と向き合う。それにしても、もっとマシな延命の方法は無かったのか？

『ん？ 待てよ……貴様、映像に出ていた若造か？』

『何と……！？ では、この小僧はジェイルの使いか何か？ ジェイルの奴め、一体何を考えているのだ！？』

何かゴチャゴチャ言ってるな。このまま放っておくと、いつまでも喋ってそうだから、そろそろ切り出すか。

緊張を吐くように溜め息をついて、改めて連中に目を向ける。

「えっと……あの、アレです。俺は、ココに居る管理局の捜査官のギンガさんにアンタ等の逮捕、並びに今回の事件の黒幕がアンタ等である事を世間に公表しに来ました」

『な、何だと！？』

俺のちよいグダグダな台詞を聞いて、最高評議会の顔色……いや、

声色が変わった。ポッド内も泡がブクブク立って、相当動揺してるな。やっぱ、連中のような隠れる黒幕程小心者なんだな。

『き、貴様……そんな事をすれば、どうなるか分かっているのか？』
「まあ、混乱するでしょうね。それに、管理局への信頼信用も落ちるでしょうし。でも、まあ、しょうがないでしょう？ それだけの事したんですから」

『馬鹿な真似は止せ……！』

『そうだ。それに我等は決して、私利私欲で生命操作技術やゆりかごを使おうとしていた訳ではない……！ 全ては、我等が管理している次元世界の平和の為なのだ……！』

ああ、駄目だ。

コイツ等の言い訳を聞いてると、物凄くイライラする。

世界の為だ何だ言ってるけど、結局はソレも全部自分の為なんだよね。突き詰めれば、『自分の望むモノを形にしたい』と言う私利私欲だ。まあ、んな事連中に言っても意味ないだろうし、口論してもしょうがない。

だって、絶対、平行線辿るのがオチだもん。

もう面倒だから、サクッと行きますか。一也との勝負だけで、もうヘトヘトだよ。正直、連中の相手をするのもダルい。

「サード。準備はいい？」

「いつでもいいわよ。ああ、それから、ギンガも復活したから」

「ど、どうもすみませんでした……」

冷静さを失った自分を恥じてるのか、ギンガは頭を下げてきた。

まあ、しょうがないよな。自分の上司が、実は脳味噌トリオでした、なんて明かされた日にゃあショック死しそうだな。

まっ、ギンガも正気に戻ったんだし、良しとしよう。

「んじゃサード、お願い」
「はいはい」

ナンバーズのように、モニターとコンソールを出したサードは、少し操作してから他に複数のモニターを展開させた。映ってるのは、他の戦場や避難してるミッド住民等々である。何かって？ 生中継ってヤツですよ。

「あーあー。今日は晴天なり、今日は晴天なり」

本番前のチェックは大切だからな。

しかし、何故だろう？ 緊張のせいか、妙に恥ずかしい。

ええい、気にするな俺！ これから、ナンバーズを助ける為の大事な生放送するんだぞ！

気を取り直して、俺は目の前にある複数のモニターに向かって喋り始めた。

「ええ、どうも。先ほど、ちょこつと出た塚本隼樹です。実は、皆さんに重大なお知らせがあり、えー、このように全国生放送をさせていただきますました」

『止せっ！ 止める！』

「ちよっ……うるさい！ 脳味噌のクセに喋るな！」

余計な声を挟んできた脳髓を怒鳴って、俺はモニターに向き直る。

「えー失礼しました。えつと……そうそう、大事なお知らせがあるので、戦闘中の人達は一旦中断して耳を傾けて下さい。お願いします。」

えーつとですね……まあ、小難しい説明とか苦手なので、簡単に、

単刀直入に言います。今回の大規模な犯罪の黒幕は、変態ドクターことジェイル・スカリエッティ——ではなく、先ほど声を挟んできた、俺の後ろにあります時空管理局のトップ、最高評議会の皆さんです！」

言いながら俺は、後ろを示して最高評議会の正体を生中継で世間に晒した。

モニターに映ってるミッドの住民や局員は、衝撃の光景にざわついている。中には子供が泣いてる姿も、ちらほらと見える。もうちょいの辛抱だから、我慢してくれ。俺だって吐き気我慢してんだから。

「連中が黒幕だって事は、スカリエッティが洗いざらい喋ったり、調べれば分かる事です。」

そういう事ですので、管理局の皆さん。ちゃんと最高評議會を逮捕してくださいね？ 俺に言いましたよね？ この事件の元凶を捕まえるって……まさか、全国ネットで公言した言葉を破棄するなんてしませんよね？」

管理局員——特に機動六課の面々は動揺の度合いが大きかった。

そう、コレさ。あの時のやり取りは、この為の布石。こうなれば、組織の威厳云々なんて言ってられない。最高評議會や事件の真相を、闇に葬られる事は無い。こうして、逮捕宣言をしたり、最高評議會の姿を晒しちまったんだから。連中の正体だけでも、ミッド住民にとっては信じ難いショッキングな事だ。それに、俺がこんな事を言えば、マスコミが黙って無い。嘘か本当かは置いて、必ず興味を抱いて調べる。そうなりや、隠し事なんか出来なくなるし、色んな事が世間に晒される事になる。

計画通りだ……！ 気分は某死神ノートを持った偽神ぎしんのようだぜ。さて、それじゃあ最後の仕上げといきますか。

…… ホント、柄じゃないんだけどな。

「さっき言った通り、事件の黒幕は最高評議会です。連中は、私利私欲の為にスカリエツティを生み出し、違法研究をさせて、その技術を自分達のモノにしようと企んでました。」

と言う事はですよ？ スカリエツティやナンバーズは、最高評議会に利用されてきた、言わば被害者みたいなモノなんです。まあ、こんな事言っても皆さんすぐには理解出来ないと思います。でも、言わせて下さい。

ナンバーズは、皆悪い奴じゃないんです。優しい長女、かなり恐いけど綺麗な二女、デカくて厳しくて優しい三女、腹黒いけど……まあ、ソレも味な四女、小さいけど俺なんかより頼りになって、しっかり者で姉妹想いの五女、明るくて元気な六女、短い付き合いだけど俺を助けてくれた七女、無口だけど妹と仲が良い八女、ツンデレ疑惑のある九女、おとなしそうで力持ちの十女、いつも笑顔の十一女、こんな俺を兄と呼んで慕ってくれる十二女……皆、個性があって良い人達なんです。そりゃ、中には狂暴な奴が居ますけど、ソレは街中で見かける若い同年代の女の子のはしやぎ様と同じですよ。え？ 戦闘機人だから人じゃない？ いや、残念ですけど、戦闘機人って“人”って字がありますから人です。

とにかく、アイツ等は悪い奴じゃないんです。どうしても納得いかないんだったら、代わりに俺を逮捕してくれて結構です。喜んでアイツ等の罪を背負いますよ。ブタ箱にでも何処にでもブチ込んでみろってんですよ！」

一時のテンションに身を任せ、熱く語った後で俺は思った。
やっぱ柄じゃねえ。

世間を揺るがした大事件『JS事件』が終結して、数日後。

——マ……マジでブタ箱ぶち込まれたアアアアアアア！

自分が置かれた現状に、俺は内心にシャウトした。

あの後、逮捕やら裁判やらゴタゴタと慌ただしく行われて、気が付いたら俺は牢獄の中に入れられてしまった。

しかも、

「アンタと一緒にですか……」

「フンッ」

——也と同室だった。

世の中、そう甘くは無かった。ナンバーズの罪は消えたが、その分の罪がマジで俺に押し掛かってきやがったのだ。陰謀暴かれて同じくブタ箱行きの最高評議会の怨念か、残ってる根回しか、とにかく俺まで囚人になっちまった。スカリエッティも、多分牢獄行きだろう。だって、アイツの事は庇って無いもん。ソレがいけなかったのか？

何にしても、犯罪者は野郎ばかり捕まってめでたしめでたし。

「ってめでたくねエエエエ！ あ、すいませーん！ ココから出してくださいアアアア！ アレです！ 違うんです！ あの時はずですね、一時のテンションに身を任せて、何か、どうかしてたんです！ 僕、何にも悪い事してません！ つーか、ホントにブチ込みます！？ 普通、こう、なんかかんやで全員無罪でハッピーエンドみたいなフワッとした感じで終わりません！？ ねえ？ すいませーん！ 誰かアアアアア！ 出してくださいアアアアアアア！」

他人の為に何かするなんて、やっぱり柄じゃない事するんじゃない

か
っ
た。
。

No.19 決着（後書き）

次回、『魔法が使えない男リベンジ！』最終回！

拘置所に収容された隼樹の運命は？

エピソード（前書き）

隼樹「『ナンバーズ』魔法が使えない男リベンジ！』最終回、始まります」

エピソード

色々あって、俺は牢獄の隅っこに蹲っていた。

いや、マジで酷え話だぜ。

俺はただ、ナンバーズが逮捕されて離れ離れになる未来を変えたかったただけなのに、結果こうしてブタ箱入りだ。意味が分かんない。そりゃあ、一時のテンションに身を任せた俺自身にも責任はあるけどさ、マジでブタ箱にぶち込まなくてもよくね？　だってさ、事件の黒幕暴いてやったのよ？　理由はどうあれ、結果的に管理局の膿を見つけてやったんだぜ？　寧ろ、俺に感謝すべきだろう。それなのに、こんなトコにぶち込みやがって腐れ税金泥棒共が。

「いつそ管理局なんて、滅んじやえばいいんだ」

「もう滅びかけてるだろう、お前の行為で……」

俺の独り言に言葉を返したのは、一也だ。

まあ、そうなんだけどさ。俺が管理局のトップの実態を世間に明かした事で、組織への信用はスツカリ落ちてしまった。マスコミにも激しく叩かれて、組織は対応に困ったり、組織内で不信感が募ったり、色々揉めたりもして組織としての機能が充分に動いてないらしい。

ハッ、ざまあみろだ。善良な市民をブタ箱にぶち込んだ罰だ。せいぜい苦しむがいい。

「ああ、それにしても……退屈だ」

出れないもんはしょうがないとしても、ココの環境は問題だ。

だって、牢獄って何も無いんだぜ？　テレビは勿論、雑誌やトラップなんか無いのだ。生活に必要な最低限の物だけで、娯楽っ気

のありそうな物は何一つ無い厳しい環境である。

辛い。

何も出来ない事が、これ程までに辛いなんて初めて知った。一部屋に二人だけど、相手が一也だから気まずくて殆ど何も話せない。

死ぬ。

精神的に死んじまう。

ちくしょう。珍しく頑張ってみたのに、何でこんな目に遭わなきゃならんだ？ 割に合わない、なんてレベルの話じゃねーぞ。くそつ、最後の最後でこの仕打ちはあんまりだぜ。

こうなったらアレだ、脱獄だ。

いや、無理か。まず、ココの鉄格子を何とかしなきゃいけないし、壁も分厚いから破壊は不可能。仮に牢屋を出れたとしても、出口までの道のりが全然分かんないしな。やっぱ、素人に脱獄は無理か。IQ高くて建築技術に詳しくないと、脱獄なんて夢のまた夢か。

ああ、なんて哀し過ぎるんだ俺の人生。泣いていい？

俺が自分の人生を哀れんでた時だった。突如、地震のような揺れが起こった。しかも、爆発音らしき音まで聞こえてくる。

「おわっ！？ ビックリしたあ……！ 何何？ 何事！？」

揺れと音に驚いた俺は、牢屋の中であたふたして首を左右に振る。まあ、そんな事しても牢屋から出れないんだから、様子をうかがう事すら出来ないだけだね。

小心者の俺と違って、一也は冷静だ。床に腰を落としたまま、爆発音がした方を見つめている。

俺も視線を辿って、同じ方向を見る。

すると、視線の先にある壁にヒビが走り、亀裂となって広がっていった。

「え？ えっ！？」

異常事態に、俺は完全にビビって頭の中はパニックだった。
一也の顔にも緊張が走る。

次の瞬間、亀裂が広がった壁はガラガラと崩れた。煙の中から、壁に出来た大きな穴が見えてきた。穴の先は暗くて、よく見えない。その穴の中から、ひょっこりと何かが出て来た。

「隼樹、姉達が迎えに来たぞ」
「はっ!？」

咄嗟に身構えた俺達の前に現れたのは、意外な人物だった。

「チンク!？ おま……何でこんな所に!？」

穴から出て来たのは、片目を黒い眼帯で隠した銀髪少女、ナンバーズのチンクだった。

「傷が癒えたのでな。全員でお前を助けにきたんだ」

「全員って……え？ ナンバーズ全員ですか!？」

「そつだ。おつと、あまり長く時間をかける訳にもいかない。早く出るぞ」

「あ、ああ」

チンクに促されて、床を立って隣を向いた。

隣に居る一也は、チンクが空けた穴を見つめている。

少し逡巡してから、俺は口を開いた。

「一緒に来ますか……?」
「……」

返事は無い。

けど、外に出たって気持ちは伝わってきた。
まあ、いいや。俺はチンクと一緒に出よう。一也は一也で、好きにすればいい。

俺はチンクと一緒に、穴を通って牢屋を出た。久しぶりにチンクの顔が見れて、嬉しかったのは内緒だ。

*

「隼樹！ 無事で良かったっス！」

「久しぶり。元気だった？」

拘置所の外に出ると、ナンバーズとサードが勢揃いして俺を迎えてくれた。

「お、おお」

動揺しながらも、俺は返事をした。

「隼樹！」

「おおっ！？」

ウーノに抱きつかれた。

「隼樹……！ 無事で良かったわ……！」

「ウ、ウーノさん……！」

いや、ウーノさん。泣く程心配してくれるのは嬉しいけど、その、

他の人が見てる前で抱きつかれるのは、ちょっと……かなり恥ずかしい。それに良い匂いもするし、胸も当たって俺の興奮ゲージも急上昇なんですけど。

「ちょっとウーノ！ 時と場所を考えなさい！」

「ドゥーエさん……！」

「それに抱くのが長いわよ！ 早く私と代わりなさい！」
わたくし

「あれえ！？ 何か違うね！？」

いや、まあ、ドゥーエに抱きつかれるのも良いけど、今はそんな場合じゃないから。

だから、抱き付きはまた次の機会で。

「そうよ！ アンタ達じゃなくて、私と代わりなさいよ！」とサード。

「いや、そうじゃなくて……アンタ等、マジで何やってんですか！
？ 助けてくれた事は嬉しいですけど……こんな事したら、折角無罪になったのに、また犯罪者に逆戻りっすよ！？」

ホントさ、俺の苦勞が水の泡って感じだよね。誰の為に、ブタ箱ぶち込まれるまで頑張ったと思ってるんだ？ 元々ぶち込まれる事なんて、考えてなかったけどさ。

しかし、疑問に思う俺とは対照的に、ナンバーズの面々は当然と言わんばかりに答えた。

「隼樹は、あたし達の為に頑張ってくれたから……今度は、あたし達が助ける番だと思って」と微笑むディエチ。

「そうよ。それに、隼ちゃんが居ないと退屈なのよねえ」いつものニコニコ笑顔なクアットロ。

「私達姉妹が皆無事に一緒に居られるのは、貴方のお蔭です。だから

ら、その貴方を助ける為なら、喜んで犯罪者にでも何にでも戻るわ」

うおおおおおおおおお！ ヤバい！ 泣きそうだ！ 皆、そんなに俺の事想ってくれてたのか。今まで生きてて、ここまで他人に想われて、これ程嬉しい事はねえ。

「あらあら、嬉し泣きかしら？」

ウーノに優しく撫でられる。

おおおおおおおおお！ 既に泣いてんじゃねーかよ、俺！ おかしいな？ 俺、こんなに涙もろかったっけ？ 何にしても恥ずかしい！ 牢獄の中とは別の精神的苦痛で、死ぬウウウウ！

「随分とベタベタしてるな、隼樹」

俺が羞恥心に悶えていると、後ろから声が聞こえた。
ソコには、俺達が通ってきた穴から出て来た一也が居た。

「藤堂……！」

ウーノから離れ、振り返って一也と向き合う。
一也は目を鋭くさせ、口を開いた。

「隼樹……今回は俺の負けだ……。だが、次はこうはいかない……！ 必ず……次は必ず俺が勝つ……！」

それだけ言って、一也は一人場を去っていった。
おいおい、漫画とかでよくある再戦フラグか？ まあ、またなんやかんやで振り返りにしてやるぜ。

「我々も、そろそろこの場を離れるぞ。局員に見つかりと面倒だからな」

トーレの意見に頷き、この場を離れる事にした。

「ん？」

ふと俺達は、視界に人影を捉えて足を止めた。

「ギンガさん！？」

俺達の前に現れたのは、管理局のギンガだった。

ヤッベー、こんな早く局員と遭遇かよ。こんな所で足止め食ったら、局員が着ちまう。ったく、俺ってどこまでツイてないんだ。

表情を険しくさせる俺だったが、ギンガの口から予想外の言葉が出た。

「行つて下さい」

「え……？」

あれ？ 行つてって……行つていいの？ マジで？

ギンガの思惑、真意が解らん。

「あの……いいんですか……？」

「ええ。貴方のお蔭で、事件が本当の解決を迎える事が出来ましたし……それに、お母さんの事も解りました」

ああ、そういやギンガのお母さんは、過去の戦闘機人事件で命落としたんだっただな。詳しくは知らんけど、やっぱ背後に最高評議会がいたんだっけ。ついでに、レジアスとか言うオッサンも絡んでた

とか無いとか。

まあ、いいや。俺には関係ねえし。

「ですから、今回だけは目をつぶります」

ギンガは、横に動いて道を開けてくれた。

「あ、ありがとうございます」

礼を言っ、俺達は道を走った。

「お元気で」

ギンガに見送られて、俺達は拘置所を後にした。

*

「やあ、親友よ！ 無事で何よりだよ！」

「アンタも脱獄してたんかい……」

拘置所から離れた場所に着けば、俺と同じ囚人服を着たスカリエッティが、例の如く笑いながら迎えた。ホント、コイツはいつでもどこでも元気だな。

「つーか……お前等……」

俺は、スカリエッティの後ろに居る連中を見た。

アイツ等が——十数機のカジエットが居た。あの闘いで生き残っ

たガジェット達だ。

ガジェット達は、『おかえり』と書かれた旗を掲げて俺を迎えていた。

「うおお……うおおおおおお！」

ちくしょう！ 感動で涙が止まらないぜ！ お前等やっぱ、皆良
い奴等だアアアアアア！

こんな良い奴等と、これからも一緒に居られる。

俺の人生も捨てたもんじゃねーな、と思った。

エピソード（後書き）

どうも、作者の赤夜叉です。

前作から読んでる方、今回初めて読んでくれた方、今までありがとうございます！

『魔法が使えない男』の『もしも』の最終回。前作は湿っぽい終わりでしたが、今回は比較的明るい感じにしました。

本作品はコレで終わりですが、これからもよろしくお願いします。

では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9645s/>

ナンバーズ～魔法が使えない男リベンジ！～

2011年7月30日18時20分発行